
恋の相手は魔王様！？

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の相手は魔王様！？

【Nコード】

N7655V

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

彼氏に振られて落ち込んでいた22歳のOL八槨^{やまきの}希空は、RPGゲームの世界へ転生してしまう。転生先は自分で設定した“防御力最強”のチートキャラ“ノア”。勇者となって世界を救うかと思いきや、何とラスボスである魔王に連れ去られてしまう。“ノア”は魔王の側近として勇者と戦うはめに。世界を滅ぼす手助けをしつつも、ノアと魔王は次第に心が惹かれあっていく。冷酷で残虐でクールなイケメン魔王様と最強チート設定女性主人公による恋愛ファンタジーです。

ブローグ

私はあなたに出会うために生まれてきた。

そう思える相手に出会えたことは、一生に一度の奇跡だと信じたい。

私の選択が間違っていたとしても、後悔はしない。

私が自分で選んだ道だから。

この先どんな人生が待っていたとしても、それは私とあなたが選んだ道。

寄り添って、支え合って生きていきたい。

離ればなれになってしまったとしても、私の心はあなたと共に歩みます。

それが夢い夢であったとしても、あなたの心は私の中で確かに息づいているから――

第1話

「ん……」

目を覚ますと彼はベッドの端に腰掛けて、タバコを吸っていた。私は腕を動かすたびに隆々と動く彼のたくましい背筋が好きだった。私は上体を起こすと彼を背後から抱きしめる。何も身に着けていない胸の先端が背筋に触れ、私は熱い吐息を漏らす。

「別れよう」

それは唐突に告げられた。私は自分の体が強ばるのを感じ、彼の信じられない言葉が派手な装飾の施された部屋に吸い込まれるのをただ呆然と聞いていた。

彼は私の腕を避けるように立ち上がり、下着を身に着け始める。

私は呼吸が苦しくなるような衝撃を何とか乗り越え、掠れた声を紡ぎ出す。

「な、なんで……」

「飽きた」

「え？」

信じられない言葉の連続に、私は目頭が次第に熱くなるのを感じる。

「あ、飽きたって」

「お前にはもう飽きたんだよ。ウザいし疲れるし」

彼は乱暴にシャツを羽織り、吐き捨てるように悪魔のような言葉

を私に叩きつける。

「やらしてくれるから付き合ってたけど、俺もう別にセフレいるし」
「ひどい！」

堪えきれず流れる熱い涙が頬を伝い、シートにぽたりと落ちる。
握りしめた拳が色を失い、小刻みに震えている。耐え難い屈辱と敗北感が全身を震わせ、私はまた呼吸が苦しくなってくる。

「結婚……」

「あ？」

彼がベルト締めながら怪訝な表情で振り返る。あれは私が彼のバースデイにあげたアルマーニの高級品だ。

「結婚してくれるって言ったのに……」

途端に彼の乾いた笑い声がこだまする。私はびくつと驚いて彼を見つめる。それは明らかに嘲笑だった。

「バカかお前。そんなの俺が本気で言ってると思ったのか？」

彼はシャツの胸を大きくはだけたまま歩き出す。胸には私があげた銀のチェーンが揺れている。彼の身に着けている物は私があげた物ばかりだ。彼は私のものはずだった。

私が何も言えずに震えていると、ドアノブに手を掛けたまま彼が振り返る。

「もう連絡してくんなよ、じゃな」

薄暗いホテルの一室に、ドアの閉まる乾いた音が吸い込まれていた。

「ただいま」

誰も応えてくれる人のいない真っ暗な部屋は、昼間の熱気が籠もって鬱陶しいくらいに蒸していた。私は部屋の灯りを点けるとエアコンのスイッチを入れる。いつもは二十八に設定してある温度を、思いっきり低くしてやる。

「はぁ……」

何もする気が起きない。私はバックを床に落とし、ベッドに身を投げ出すように倒れ込む。

私は昔からいつもそうだった。自分で勝手に盛り上がりすぎて相手が見えなくなってしまう。思い込んだら他の可能性は、特に悪い予感はずべて無視してしまう。自分に都合良く解釈してしまうのだ。

傷つくのが怖い。相手を傷つけるくらいなら、自分が傷ついた方がいい。

それが綺麗事だとわかっていても、ついずるずると引き摺ってしまふ。私の悪い癖だ。

彼に関してもそうだった。

最近“コト”が済んだ後妙に素っ気なかったのには気づいていた。会えばすぐに彼は身体を求めて来る。デートで映画やショッピングをしたのはもう何ヶ月前のことか。

思えばだいぶ前から彼の気持ちは冷めていた。私はそれに見て見ぬ振りをしていたんだ。現実から目を背け、夢想の世界に埋没して安心したつもりになっていた。

お酒でも飲まないとやってらんない。

私は身を起こして着替える。どうせ寝るだけだからスウェットでいい。シャワーはホテルで浴びてきた。下腹部にはまだ彼の感覚が残っている。今夜だけは思い出に浸ろう。そして明日にはすっぱりと忘れてしまおう。明日からまた憂鬱な仕事が始まるのだから。

冷蔵庫から半分ほど残った安いワインを取り出す。赤い液体をグラスに注いで、テレビのリモコンに手を伸ばす。

その時テレビの前に置いてあるゲーム機の緑のランプに気がつく。そういえば昨夜ゲームの途中で寝てしまっていた。

テレビを点けると画面には「ゲームオーバー」の文字。そういえば昨夜は適当にやって全滅してしまっていたんだっけ。

ゲームは少し前に流行ったロールプレイングゲーム。「クレセニア皇国物語」というありきたりな名前のRPGだ。

発売当初は国を造って国力を高め、軍隊を組織して大規模な戦争を行えるシミュレーションゲームの要素も取り入れた画期的なシステムという“売り”だった。

私は地道にこつこつとお金を貯めてアイテムを買ったり少しずつ強くしていくのが好きで、こういう長い時間のかかるゲームは大好きだ。でも好きだからといって上手だとは限らない。昨夜はレベルがまだ低いにも拘わらず敵の主力部隊に遭遇して、あっという間に全滅させられてしまったのだ。

「今度はちゃんとクリアしたいな」

私はリセットボタンを押してスタート画面に戻す。まるで彼との思い出をリセットするかのように。そうすることでまた、自分の情けない人生をやり直せる気がした。

スタート画面で「新しくゲームを始める」を選択する。五分ほどあるプロローグをスキップして、主人公の性別やパラメータ設定画

面に切り替える。プロローグなんて最初ぐらいしか観ないでしょ、普通。

今まで勇者といえど男という先入観があつて、金髪碧眼のイケメンキャラクターを選択していた。でも今日は男はこりこりだった。私は性別女を選択し、見た目は幼い少女のキャラにしてみた。あまり普通の人は選ばないキャラかも。実際初期パラメータは貧弱で、他のキャラに比べて全体的に弱そう。何でこんなキャラがあるんだろ？

私はその時まったく気づいていなかった。そんなキャラは元々このゲームには、設定されてなかったのだ。

「どうせなら思いつきり防御力を高めちゃおう」

私は持っている三百ポイントをすべて防御力に注ぎ込む。攻撃力は初期の雑魚敵にも苦戦するほど貧弱なものだったが、防御力はあり得ないくらい高くなった。

「攻撃は他のキャラに任せちゃっていいよね」

私は知っていた。序盤に屈強な戦士が仲間になるのだ。敵モンスターの攻撃力は序盤でも結構強くて、前にやった時は戦士タイプだったのにも拘わらず何度もHPが真っ赤になってその戦士に助けもらった。

「最後は名前か」

私は少し迷った末、本名を入れることにした。

「ノ…… ア…… っと、よし！」

決定ボタンを押した瞬間、私は画面から発生した白い光に包まれた。

「きゃああっ！」

そのまま私の意識は白い光の中に溶け込んでいった。

第2話

頬に当たるザラザラとした不快な砂の感触で、私は目を覚ます。明るい陽射しの中、小鳥の囀りが降り注いでいる。ぼやけた視界が定まると、風に揺れる深緑の雑草が目に入る。奥には赤茶けた樹皮の木々が立ち並ぶ森が見え、その根元には丈高い雑草が生い茂っている。

「ん……」

私は両手をついて上体を起こし、周囲を見回す。どうやら私は森の中にある砂利道のだ真ん中で寝ていたようだ。

……ってここどこ？ 私は自分の部屋でワインを飲みながらゲームをしていたはず。こんな山奥に倒れているはずがない。

私はぼやけた頭を振りながら立ち上がる。膝に力が入らなくてふらつく。裸足の足の裏に砂が痛い。

その時私は自分の体の異状に気づく。

私は真っ白なワンピースを着ていた。スウェットの上下じゃない。それに手足が妙に白くて細い。

「これ、どういうこと？」

声を出すとともにその違和感に驚く。私の声じゃない！ その声はまるで、十代前半の少女のような声だった。

「どっぴうつことよお……」

砂利道はまっすぐと森の中を伸びている。道の両側に並ぶ木々は杉に似た針葉樹林で、とても私のいた都会とはかけ離れている。道

は人の手が入ったように固く整地されているが、舗装されているわけじゃない。

前も後ろも薄茶色の砂利道がまっすぐと伸びているだけだ。

「誰かぁ！」

私は違和感のある少女の声で叫んでみる。木漏れ日の中小鳥たちが飛び立ち、辺りは静まりかえる。私が不安になってもう一度叫ぼうとすると、すぐ脇の草むらが大きく揺れる。

「なんだぁ、こんなところに人間がいるぞ？」

草むらから出てきたのは大きな鬼だった。

「きゃぁあ！」

私は口を両手で押さえて後ずさる。すると背後の草むらがまた大きく揺れ、もう一体鬼が出てくる。

「ヤツらは撤退したんじゃないのか？」

鬼は見た感じ身長二メートルはある大きさだった。黄色い瞳をぎよろつかせ、張り出した下顎からは何本もの牙が真上に突き出ている。赤黒い肌に深緑色の鎧を身に着け、刃渡り五十センチメートル以上はある長い両刃剣も携えている。剣には赤錆が浮いて、とても丁寧に手入れをしているように思えない。

鬼たちは私の前後を挟み込むように立つ。逃げられなくなってしまった私は、震えながら鬼たちを見上げる。私の頭は鬼たちの腰より少し高いくらいの身長しかないので、ほぼ真上を見上げるような形になる。

「おそらくさつき襲った村から逃げ出した子どもじゃねえか？」

「だって人間は、みんなヤツらが逃がしたんだろ？」

「だから逃げ遅れたんだよ。なあ？」

鬼は私を見下ろして問いかけてくる。

「あ、あの、私……」

「だったらこいつだけでも殺しておかねえと、お頭に怒られるんじゃないか？」

「そうだなあ」

鬼たちは私の話なんか全然聞こうともしない。鬼といっても、頭に角はない。やたらと臭い体臭と口臭で、私は息をするのも苦しくなってくる。

こいつら私を殺すとか話してない？ 私、殺されちゃうの？ わけもわからずこんなところに来て、自分じゃない少女の体のまま死んじゃうの？

冗談じゃない！

「あの！ 私その村から逃げて来たんじゃないやありません！」
「ん？」

鬼たちはようやく私の方を見る。体が大きいと神経鈍いのかな？

「私はどうしてここにいいのかわかんないんです。それにあなたたち何者ですか？ お、鬼みたいな格好して、そんな危ないもの持ってる」

「オ、オニ？ オニって何なんだ？」

鬼は私の頭越しにもう一体へ聞く。もう一体の鬼は首を傾げて私を見下ろす。

「オレたちはオークだ。オレたちを知らないって、どういうことだ？」

オーク？　オークってまさかモンスターのオーク？　ゲームだと序盤の終わりくらいに出てくる雑魚敵だ。

「あの村から逃げてきたんじゃないかってことは、もしかしてヤツらの仲間か？」

「んじゃ、なおさら生かしておくわけにはいかねえ！」

オークはそういうと黄色い目をぎらつかせる。明らかな殺意を感じて、私は後ずさる。

「ひ、い、いや……」

「食っちゃみたいところだけど、ヤツらの仲間だったら死体をお頭に持ってかなきゃならねえからなあ」

「面倒くせえけどお頭にバレたら怖えしなあ」

オークは圧倒的な存在感で私に迫る。振り上げられた錆びた剣が、逆光になって黒い影になる。

「い、いやああああっ！」

私は踵を返して一気に後ろへ駆け出す。足の裏に突き刺さるような砂粒の感触が、これは夢じゃないことを否が応でも教えてくれる。私はどうしちゃったの？　何でこんな目に遭わなきゃならないの？　一体私が何をしたっていうの？

恐怖で膝に力が入らない。懸命に走っているつもりなのに、全然前に進んでいるような気がしない。体にまとわりつく重い空気を泳ぐようにかき分ける。

「待て、逃がさねえぞ！」

オークの恐ろしい怒声がすぐ後ろで聞こえて、私はまた言葉にならない悲鳴を上げる。森に私の悲鳴が吸い込まれていく。

すると私は突然、前に進まなくなる。足が地面から浮いている感覚がした。

私は胸に違和感を覚えておそろおそろ見下ろす。私の胸からは白いワンピースを突き破って、赤錆の浮いた剣がまっすぐと前方に突き出ていた。

第2話（後書き）

「オーク」の設定は当作品オリジナルです。ご了承ください。

第3話

「あ…… あ……」

私は声を上げることもできず、信じられない光景を見下ろしていた。

自分の胸の真ん中から赤錆の浮いた剣が突き出ている。身体の内側に固い異物感を覚え、私は強烈な力で持ち上げられていく。じんわりと滲み出てくる鮮血は、まるでスローモーションのように白いワンピースを染め上げていく。

「はぁはっはっはっ、焼き鳥みてえだなあ！ このまま連れて行くか！」

「そうだなあ、お頭に報告したら焼いて食うか！」

オークたちの陽気な話し声を聞きながら、私の視界は上昇していく。もう森の梢に切り取られたぎざぎざの青い空しか見えない。白い雲がゆつくりと流れていくのを眺めながら、目尻から流れる熱い涙の雫が頬を伝うのを感じた。

ああ、私はこれで死ぬんだ。わけもわからないまま、こいつらに食べられちゃうんだ。思えばいいことなんか何一つない人生だったなあ。せめて彼には一言、恨み言でも言ってやればよかった。もう遅いけど。まさにゲームオーバー、終わりだ。

遠のく意識の中で、私は空に立ち上る砂煙と複数の男の人たちの怒声を聞いた気がした。

「我々が着いた時にはすでに殺された後でした」

「しかしどうしてわからなかったんだ？ 村人は全員確保したんだろ？」

「ええ、そのはずでしたが、チェックリストに漏れがあったようです」

「村長に確認を取れ。こんな少女が一人で前線に紛れ込めるはずはないんだ」

「はっ！」

ドアが開閉する音と人の歩く振動が背中に伝わってくる。私はどうやら固い床に寝かされているようで、腰やら肩甲骨やら後頭部やらいろんなところが痛い。

痛いって…… ええっ？ 私、確かオークに串刺しにされなかったっけ？ 何で生きてるの？

驚いて目を開けると、顔には白い布が掛けられていた。布はビールよりは厚手のものだが、光が透けて見える。

ごわごわした感触に、私は布を取り払おうと手を動かす。

「お、おい、う、動いてるぞ！」

「うわあああっ！」

途端に周りが騒がしくなる。何人もの足音が聞こえ、床を踏み鳴らす振動が私の身体を揺らす。私はもがきながら布を払いのけ、上体を起こす。

そこは粗末な部屋の中だった。埃っぽい床には、木製の簡素なテーブルと何脚かの椅子の脚が見える。

私は壁際に寝かされていたようで、頭の上には明るい陽射しの差し込む窓がある。視線を巡らすと、出入り口と思われるドアの前に、茶色い鎧を身に着けた男の人が二人、怯えた表情で私に剣を向けている。

「あ、あの、私……」
「じゃ、しゃべった！」

一人の男の人が顔面蒼白になってドアを開けようとする。よほど慌てているのか、上手く開けられないようで何度もドアノブをがちゃがちゃと回す。

「ここ、どこですか？ 私、どうしちゃったんですか？」

ひりついた喉から、相変わらずの少女の声を絞り出す。こうして聞くと舌つ足らずでアニメキャラクターみたいなしゃべり方だなど、頭の冷静な部分で分析する。

「ちょ、ちよつと待て。アンデットがしゃべるのはおかしい。顔色だつて普通だぞ？」

剣を構えている男の人が、ドアノブに取り付いている人に話しかける。私がきよんとしていると、いきなりドアが勢いよく開いた。

「何を騒いでいるバカ者どもが！ 死者を弔うという……」

ドアを開けて入ってきたのは、さっきのオークにも負けず劣らぬ大きな男の人だった。

黒い短髪に太くてふさふさした肩。たくましい頬には稲妻のような傷跡が走り、肩や二の腕の筋肉は異様なほど盛り上がっている。黒い鎧を身に着けていて、背中には身長ぐらいある巨大な剣を斜めに背負っている。年の頃は三十代後半から四十代といったところだろうか。私のお父さんよりちよつと若いくらいに見えた。

その男の人は私と目が合うと、ぎよつとして動きを止める。眉根にしわを寄せると、次いで鋭い視線に変わる。

「なぜ生きている？」

「え、あ、あの、私」

その男の人は床を踏み鳴らして私の側へ近づいて来る。床が振動してお尻が痛い。私は思わずその迫力に後ずさってしまう。壁際だったため、背中がすぐに壁についてしまった。

男の人は片膝をついて私と視線を合わせる。大きな目がぎよろりぎよろりと動いて、私を確かめるように見回す。

「ふむ、アンデットではないな。ではなぜ生き返ったのだ？」

男の人は無精髭の目立つ顎をじよりじよりと撫でさすりながら考え込む。

「へ、ヘルメス様、不用意に近づくとき、危険です」

「馬鹿者！ モンスターとそうでない者の見分けもつかんのか愚か者めが！」

すぐ側で雷が落ちたような大声を出されて、私は喉が「ひっ」と鳴ってしまふ。埃っぽい空気が喉に張り付いて、私はごくりと唾を飲み込んだ。

でもこの人の名前、ヘルメス？ どこかで聞いたような……

「あっ！」

私はこのたくましい男の人の見た目と、ヘルメスという名前に心当たりがあった。あのゲームで最初に仲間になる屈強な戦士。黒い鎧を着てて、“クレイモア”という両手剣の使い手だ。

って、ええええっ！

「どうした、何をそんなに驚く？」

ヘルメスと呼ばれた戦士は立てた膝に肘を載せて、柔和な表情になる。私を怯えさせないためだろうか、その口調は背後の兵士たちに対するものとは全然違う。

「あ、あの、ここはどこですか？」

「ん、ここか？　ここは我がクレセニア王国軍の第三駐屯地だ」
「ええっ！」

「クレセニア王国軍」って、まさにあのゲームのシナリオに出てくる名称じゃん！

「あ、あの、もしかしてここはク、クレセニア王国ですか？」

ヘルメスさんは無骨な頬を緩め、優しく微笑みながらもしっかりと頷く。

私は軽い目眩を覚えて、呆然とヘルメスさんの顔を見つめていた。

第4話

「も、もしかしてここはポルタ村…… ですか？」
「む？」

ヘルメスさんの顔色が変わる。

“ポルタ村”は勇者が生まれ育った村という設定で、ゲームがスタートする場所だ。

「そうだ、村を接収して前線基地にしている。むう、地理に詳しいということやはりテグス村の者なのか？」

「は、あ、いや、私は……」

私は返答に困ってしまう。“テグス村”とはポルタ村の隣の村で、どうやらさっきの話だとモンスター軍に占領されたいらしい。ゲームだと確か、序盤にそこで何かイベントが起きたはず。

もしヘルメスさんの話が本当ならば、私はあのゲーム「クレセニア皇国物語」の世界に来てしまったことになる。そしてこの目の前の戦士は、初期に仲間となるゲームキャラクター“ヘルメス”。勇者である主人公を助ける重要なパーティメンバーだ。

でもそんなことってあり得るの？ ゲームの世界に来てしまうなんて、SFかファンタジーの世界じゃない！

「え、ええっと……」

「言いづらいなら無理に言わなくてもいい。しかし一旦死んだ者がアンデットではなく生き返るとするのは聞いたことがない。そなたは偉大な賢者か大魔法使いか？」

「そ、そんなじゃないです！」

“賢者”は治癒や聖なる魔法と攻撃や呪いなどの闇の魔法を両方使える、ゲーム後半に出てくる強い魔法系キャラクターだ。

“大魔法使い”とはプレイヤーの操作するキャラクターがなれる職業ではなく、ある特定のイベントで登場するシナリオクリアに絶対必要な特別な存在だ。

「ふむ、言えないのなら無理に聞き出すつもりはないがとにかくケガは大丈夫か」

「え、あ、そ、そういえば」

私は自分の胸を見下ろす。真っ白いワンピースの前には真っ赤な染みが広がっている。胸の真ん中は無惨にも破れ、破れ目からはほんの少しその存在を主張している胸の谷間が見えてしまっている。白い皮膚の表面には、刺し傷どころか擦り傷さえない。

「うむ、綺麗に傷は消えておるな」

ヘルメスさんはワンピースに空いた穴を覗き込んでいる。その時初めて私は気がつく。私ノーブラじゃん！

「あ、いやぁ！」

私は咄嗟に腕で前を隠す。

ヘルメスさんは目を丸くし、次いで豪快に笑う。

「あいや、これは失礼した！ 娘と同じくらいの年だけに、あまりにも不作法が過ぎてしまったな！」

「む、娘？」

ヘルメスさんに娘なんていたっけ？

私は必死にゲームの設定を思い出す。そんな設定は聞いたこともない。ゲームキャラのヘルメスは、勇者が魔王討伐に旅立つ時にその心意気に共感して仲間になるだけの存在だ。

「とにかく、そなたにはいろいろ事情がありそうだ。ぜひ殿下にお目通り願おう」

「殿下？」

勝手に話が進んでいつて、私は頭がついていけなくなる。ヘルメスさんののしと部屋を出て行ってしまふのを呆然と見送りながら、私は自分が今置かれている状況を整理する。

もし……もし本当にここが「クレセニア皇国物語」の世界なら、私はなぜこんな非現実的な状態に置かれてしまったんだろう。

いや、この際“なぜ”という理屈は置いておこう。仮に本当にゲームの世界に来てしまったのなら、私のはどうしたらいい？ どうすれば戻れるの？

その時私は気づく。

テグス村がモンスターに襲われたというのが、「イベント」だとしたら？

よく覚えてはいないけど、確かゲームのイベントは村長さんの頼み事をこなすといった些細なものだった。もし、モンスターに占領されるのがそのイベントの代わりだったら？

私はここポルタ村で目が覚めた。

軍隊の駐屯地とかいう設定ではなかったけどここで目が覚める、つまりここからゲームが始まったと考えたら？

そこまで考えて、私は最悪の結論にたどり着く。

「あ、あの！」

私はいまだ入り口付近で怯えた表情をしている、二人の兵士たち

に声を掛ける。二人はひそひそと内緒話をしていたが、急に声を掛けられてびくつと肩を上げる。

「な、ななな、なんでしよう」

「鏡！ 鏡ありますか？」

「鏡？」

剣を構えていた方の兵士の人が、眉根にしわを寄せる。もしかしてこの世界に鏡なんてないのかな？

一瞬不安になったけど、ドアノブを回していた方の兵士がおそろおそろ部屋奥を指さす。

「か、鏡ならそこに」

私は床に座っていたので気づかなかったけど、テーブルに隠れて見えなかった奥の壁に鏡が備え付けられていた。おそらく身だしなみを整えるためだろう。

私は立ち上がるうとしてふらついてしまう。壁に手をついて立ち上がると、がんばって一歩踏み出す。

うん、大丈夫。歩ける。

私は一歩一歩ゆっくりと鏡に近づく。鏡は多少埃で汚れてはいるものの、使用に差し支えはないようだ。

私は鏡の前に立ち、自分の顔を見る。

そこには自分で選択してパラメータを設定した、あの少女のキャラクターがいた。

「ま、まさか……」

まるで陶器のような白い肌。ストレートの長い黒髪は、多少埃がついてしまっているが丁寧なトリートメントしたみたいさらさら

としている。細く形の整った眉の下で、アーモンド型の大きな目と黒い瞳がこつちを驚いて見つめている。鼻筋の通った小振りな鼻の下に、桜の花びらのような桃色の唇がほんの少し開かれている。年は十代前半くらいだけど、見ようによっては一桁に見えるくらい可憐だ。

鏡の中のかわいらしい少女は、両手で自分の頬を押さえている。指先に触れる柔らかくすべすべした肌は、まさしく自分の顔だ。

私もしかしてゲームの主人公になっちゃったの？ つ、つまり世界を救う勇者？

その時ドアが勢いよく開けられる。

そこには金髪碧眼の世にも美しい美青年が立っていた。

第5話

「あなたが生き返った方ですか？」

まるでギリシャ彫刻がそのまま血の通った人間になったかのような整った顔立ちに、私は返事をするのも忘れて呆然としてしまう。金髪碧眼の偉丈夫。私はこの人を知ってる。知り過ぎてるくらいに。

「どうかなさいました？」

丁寧な物腰、眩いばかりの黄金の鎧。それ以上に美しく輝く長い金髪。美しい海のように澄んだ碧い瞳。私がいつも選択していたプレイヤー…… “勇者” だ。つて、ええええっ？

「あ、は、え、いや、な、なんで？」

私はパニックになってしどろもどろになってしまう。“勇者”は私じゃなかったの？ でも目の前にいるこの金髪碧眼の美青年は間違いなく勇者。何度もプレイしているからよくわかる。クリアはしたことがなかったけど。

「殿下、いきなり聞かれても彼女が困ってしまうでしょう。まずは落ち着いて座ってお話ししましょう」

勇者さんの後ろから、さらに大柄な体のヘルメスさんが入ってくる。大きな体の男の人が二人増えただけで、部屋がとても狭く感じられる。ヘルメスさんはさっきの二人の兵士たちに飲み物を持って

くるようにいつけて、ドアを閉める。

「ああ、そうだね。すまなかった、ちょっと興奮してしまっていたようだ。どうぞ」

勇者さんは苦笑すると私に椅子を引いてくれる。床と違って椅子とテーブルは綺麗に掃除されていて、この部屋は遺体安置所とかじやなくて普段から何かに使われていた部屋だということがわかる。勇者さんとヘルメスさんは私の向かい側に並んで座る。二人が並ぶと、私の前には壁ができたようになって、少し怖い。

「そんなに怯えなくていいですよ。わたしはシュナイダー。クレセニア」シュナイダーです」

勇者さん、つまりシュナイダーさんは私に指の長い綺麗な右手を差し出す。私は何かの本で読んだことがある。戦士は不用意に利き腕は差し出さないって。

シュナイダーさんは左腰に剣を提げている。黄金でできた鞘に赤や緑の宝石で派手に装飾された鞘だ。あれは確かゲーム中盤まで使う『クレセニアの剣』。レベルアップに応じて攻撃力が上がる勇者専用の剣だ。ゲームのグラフィックではよくわからなかったけど、こうして見るととても美しい剣だ。

剣を左腰に提げているということは、シュナイダーさんは右利きだ。そして右手を私に差し出している。それは私を信頼しているという意思表示でもある。仮にも勇者と呼ばれる人にそこまでの信頼を示されたら、私もそれに応えないと失礼になってしまう。状況的には間違いなく、オークたちに食べられそうになった私を助けてくれた人たちのだから。

私はテーブル越しにおずおずと右手を差し出す。こんな美形の男の人にこにこ見つめられると、挙動不審になってしまう。私はい

つも、誰に対してもそうだけど。目なんか合わせられないし、どこを見たらいいかわかんない。

シュナイダーさんは私の手を軽く握ると、手首を返して私の手の甲をじつと見つめる。

「え、あ、な……」

「ふむ…… 温かい。血も通っているようだ。ということは、やはりあなたはアンデットではなさそうですね」

「え、あ、や」

私は反射的に手を引いてしまう。シュナイダーさんは目を細める。

「失礼、よければあなたの名前を教えてくださいませんか？」

「わ、私の名前ですか？」

何て言えばいいんだろう。「八槨希空です」って言うてもいいのかな？ でも今の私は私じゃないし。そこでふと気がつく。そういえば私、このキャラに何て名前つけたっけ？ ……そ、そうだ！

「ノ、ノア…… です」

「ノア」

シュナイダーさんはヘルメスさんと顔を見合わせて、私の名前を噛み締めるように繰り返す。きつとさつき話に出ていた“リスト”というのと、頭の中で照合しているのだろう。そこにはたぶん「ノア」という名前は…… ない。

「ではノアさん。あなたはオークに刺されたにも拘わらず生きている。それはなぜですか？」

シュナイダーさんの表情は優しく温かい。それは決して私を問い詰めようとか、非難しようとしているわけではない。私の今のこの状況を何とか理解するためにも、ここは正直に全部話してしまった方がいいかもしれない。なにせこの人はこの世界を救う勇者さんなのだから、頼ってもいいと思う。

「あ、あの…… わ、わからないんです」
「わからない？」

シュナイダーさんの形のいい眉根にしわが寄る。お、怒られちゃうのかな？
けれどシュナイダーさんはすぐに表情を緩めて、テーブルに両腕を出す。肘について組んだ両手に顎を載せ、私を興味深げに覗き込む。

「もしよければですが…… あなたのステータスを教えていただけませんか？」
「ステータス？」

今度は私が聞き返す番だった。
ステータスってあれよね？ ゲームキャラクターの能力値一覧表。ゲームだとボタンを押して「ステータス」のコマンドを選択すれば、画面にウィンドウが開くやつ。

「もしかしてステータスの開き方も知らない？」

シュナイダーさんの物腰はあくまでも穏やかだ。私はおそろおそろ頷く。

シュナイダーさんはまたヘルメスさんと顔を見合わせて頷き合うと、細く白い人差し指を前へ伸ばす。

「こうしてみてください」

シュナイダーさんは空中で人差し指を真横にずっと引く。するとその下の空間が陽炎のように揺らめく。

「ステータスは自分以外の者には見ることはできません。よければ、あなたのステータスを読み上げていただけませんか？」

「あ、は、はい……」

私はシュナイダーさんの動作を見よう見まねでやってみる。右手の人差し指を顔の前で伸ばし、シュナイダーさんを指さすみたいになつてすぐ前に押し出す。ステータス画面を開くという意識があるせいか、何となくゴムをつつくような変な弾力のある反発を指先に感じる。

「あ、なんか感じます」

「うん、そのまま横に引いてみてください」

「はい」

私は指を伸ばしたまま、真横に引いてみる。

するとまるで開けたチャックから何かが零れるように、白く光る画面が下りてきた。

「あ！」

「ふむ」

ヘルメスさんがたくましい顎を手のひらでなぞる。固そうな無精髭が、じゃりつと音を立てる。

「きちんと見られるようすな」

「ノアさん、画面はちゃんと出てますか？」

「あ、はい」

画面には白い線が引かれていて、表のようになっている。ゲーム画面で見てた通りだ。

「ヒットポイントはいくらですか？」

「ええっと……」

私は左上の「HP」の項目を見る。ヒットポイントとは「体力」、もしくは「生命力」だ。

「十五、です」

「ふむ、そんなものでしょうね」

この数値は初期設定値から一切、ボーナスポイントを振り分けていない。かなり弱い方だと思うけど、“ノア”くらいの少女なら普通の数値なのだろう。

「攻撃力は？」

「ええっと、七……です」

私の声は尻つぼみに小さくなってしまふ。「AP」は“アタックポイント”で攻撃力だ。それが“七”って弱過ぎる！

シュナイダーさんとヘルメスさんは、顔を見合わせて苦笑する。

これはたぶん普通の数値より低いと思う。シュナイダーさんは攻撃力には何もコメントせず、質問を続ける。

「防御力は？」

「あ、はい、ええつと……」

私は攻撃力の下の項目を見る。防御力は「DP」で“ディフェンスポイント”だ。

「あ、え、ええっ？」

そこには信じられない数字が並んでいた。

第6話

『DP：9999』

信じられない数値に私は固まってしまう。シュナイダーさんとヘルメスさんは、そんな私の様子に訝しげな表情で画面越しに覗き込んでくる。

「どうかしましたか？」

「え、ええっと……」

何て言えばいいんだろう。九千九百九十九ですって言えばいいの？ いや、このゲームのステータスは、万の単位は表示されない。攻略本にもそう書いてあった。

じゃ「限界まで上がってます」って言えばいい？ それじゃいかにも「私は怪しいです」って言うてるようなもんじゃない！

過去一番進んだ時で、終盤の始めくらいまでだった。その時でさえ確かDPは千ちよつとだった。攻略本によると、どんなに強いキヤラクターでも三千くらいだったはず。たぶん。

しかもこの数値は数値通りとはとても思えない。つまり“測定できません”状態ってことよね？ こういうのなんていうんだっけ？ 裏技？ バグ？ 違う、ええっと…… そうだ、“チート”だ！ 人差し指を突き出したまま固まっている私を、シュナイダーさんの澄んだ碧い瞳とヘルメスさんのぎょろりとした目が見つめている。は、早く答えなきゃ！

「あ、あの、きゅうじゅう…… きゅう…… です」
「九十九？」

シュナイダーさんとヘルメスさんは、身を乗り出していた上半身を勢いよく伸び上げらせてハモる。私は肩を竦めて目をつぶる。びくつと指を引いた途端、ステータス画面は消えてしまう。

「その歳で、しかも失礼ながら少女の身ですでに防御力が百近いとは驚きですな！」

「うん、刺されても生き返ったことと何か関係あるかもしれない」

真剣な表情で話し始めた二人を前に、私は身を小さくして俯く。
ごめんなさい、それ嘘です。ほんとはその百倍以上です…… なんて今さら言えない。

二人の話を聞いているとヘルメスさんの防御力で七十五、シュナイダーさんで漸く百を超えたばかりだという。

でも私は違和感を覚える。

ゲーム序盤の彼らのパラメータはもつと低かったはずだ。もちろん、勇者の場合は最初のボーナスポイントの振り分け方次第でもつと高く設定することはできる。それこそ私みたいに。

でも平均的に振り分けていったら、百は超えられない。他にも魔力(MP)とか敏捷性(AG)とか器用さ(DF)とか運(LP)とかいろいろあるんだから。あ、そういえば私、自分のステータス全部見る前に画面消しちゃった。ま、いいか、また後で確認すればいいし。

彼らのパラメータに限らず、この村がクレセニア皇国軍の駐屯地になつてることとかテグス村がモンスターに占領されてしまったこととか、どうも私の知っているゲーム「クレセニア皇国物語」のシナリオとは微妙に違う。

同じなのに違う。私は真剣に語り合う二人を上目遣いに眺めながら、嘘をついてしまった後ろめたさと今後の不安で泣きそうになつてしまった。

「遅くなりました」

ドアが開いてかわいらしい少女が顔を覗かせる。歳は小学校高学年くらい。くりつとした大きな目に眉の上で切り揃えられた黒く艶のある前髪がとても愛らしい。着ている水色のブラウスは質素なものだ。でも笑顔は明るく、その利発そうな顔立ちには既視感があった。

「なんだ、リーネじゃないか。お前が持ってきたのか」

リーネと呼ばれたその少女は、グラスが三つ載った大きめのトレイを一生懸命運んでくる。いや、トレイが大きいのではなく、その少女が小さいからそう見えるだけだ。飲み物を零さないように、じっと見つめながら歩いてくる様子がとてもかわいらしい。だからこんなに来るのが遅かったんだ。

少女はコップに入った琥珀色の飲み物をヘルメスさんに取ってもらいながら、満面の笑みで大きく頷く。

「はい、父さま！ これも仕事ですから」
「父さま？」

私は思わず少女とヘルメスさんを見比べてしまふ。どおりで既視感を覚えるはずだ。この少女はヘルメスさんに目元がそっくりだ。

「ああ、ノアさん。こちらは私の娘のリーネです」
「ヴィルヘルム」リーネです。よろしくお願いします」

呆然とする私の前で、リーネさんはスカートの裾をちよつと持ち上げてお辞儀をする。文化の違いなのか、日常生活ではちよつとお目に掛からない上流階級の挨拶みたいだ。

「あ、え、えと、ノアです」

私は勢いよく立ってぺこりとお辞儀する。弾みで椅子が大きな音を立てて床を擦る。

「ノアさん、リーネにはノアさんの身の回りの世話をしてもらいます。何かあったら娘に言うてください。ああ、自己紹介が遅れました。私はリーネの父でシュナイダー殿下の護衛をしておりますヴィルヘルム」ヘルメスです。以後お見知りおきを」

ヘルメスさんは私の三倍はあろうかという厚くて大きい右手を差し出す。

「あ、は、はい」

私がおそろおそろ手を出すと、ヘルメスさんは優しく握って上下させる。

私の手を放すと、ヘルメスさんはシュナイダーさんと目で会話して立ち上がる。グラスを一気に煽ってテーブルに置くと、リーネさんの頭に手のひらをぽんと置く。

「リーネ、ごちそうさま。父さんたちは仕事に戻るから、ノアさんをお前の部屋に案内してあげなさい」

「はい」

リーネさんはトレイを胸に抱いてしっかりと頷く。

「ノアさん」

シュナイダーさんが真剣な顔で私を見ている。私はどきつとしてまた視線が泳いでしまう。

「テグス村の人たちはポルタ村の人たちといっしょに明日の朝、皇都へ避難させます。あなたもいっしょに来てくださいませんか？
そしてできれば父に会ってもらいたい」

「ええっ？」

シュナイダーさんのお父さんって、もしかしてクレセニア皇王？

「は、はい、でも……」

「でも？」

シュナイダーさんの表情が曇る。私は慌てて首を振る。

「い、いえ、わかりました。よろしくお願いします」

私が深々とお辞儀すると、シュナイダーさんは訝しがりながらもにこやかに手を振ってヘルメスさんと部屋を出て行く。リーネさんは満面の笑みで見送っている。

シュナイダーさんの優しそうな笑顔を見ると、私は言えなかった。シュナイダーさんのお父さんつまりクレセニア皇王は、シナリオでは間もなく魔王に暗殺されることを。

第7話

「ノアさん、どうぞ！」

「失礼します」

元気いっぱいリーネさんに手を引かれて、私は部屋に入る。

リーネさんの家つまりヘルメスさんちは、私がいた家から歩いてすぐのところにあった。どうやら私がいた家は、臨時の作戦本部だったようだ。

「やっぱりヘルメスさんって、この村で仲間になったんですね」

「え？ 『やっぱり』ってなんですか？」

「え、あ、いや、なんでもないです」

赤いチェックのベッドカバーの上に腰掛けて、リーネさんは大きな目をきよとんとさせている。

リーネさんの部屋は年相応にかわいらしく、こじんまりとした中にも女の子らしさが滲み出ている。窓際に置かれたベッドの足下には手作りと思われる学習机があり、その横には二段の本棚がある。中にはぎつしり本が詰まっていて、どんな本があるのかちょっと気になる。その向かい側の壁には小さめのクローゼットがあって、両開きのドアがついている。

床は剥き出しのフローリングで、どうやら日本のように靴を脱いで家に上がる文化はないらしい。裸足だった私は、リーネさんのお古のブーツを履いている。外履きのまま部屋を歩くことは、日本人の私としてはちょっと憚られた。でも郷に入っては郷に従え、私は勧められるままにベッドに腰掛ける。

「あの、ノアさんっておいкуつなんですか？」

「え？ あ、えつと」

リーネさんは目をきらきらさせながら私の顔を覗き込む。

いくつって言えばいいんだろう。本当は二十二才だけれど、今の体はどう考えても十代前半。適当に言っちゃうのは気が引けるし…… 設定に年齢とか書いてあったつけ？

「当ててみましょうか？」

「ええっ？」

リーネさんは「ん」と言いながら、私を品定めするように上から下まで眺めている。なんだか私、ずっとリーネさんに主導権を握られっぱなしだ。

「幼く見えるけどお…… うん、十五！」

リーネさんは満面の笑みだ。もうそれでもいいやと思ってしまう。

「すごい、正解！」

私はぱちぱちと拍手する。うん、十五でいいや。ってか、十五の気がしてきた。

「じゃあ、うちとそんなに変わらないですね。うち、いくつに見えます？」

「ええ？ うんと…… 十二？」

「惜しい！ 来月で十二です。今は十一」

「そっかあ、しっかりしてますね」

「ノアさん！」

「うわっ！」

リーネさんは勢いよく私との距離を詰めてくる。もうほんと「ズサッ！」って感じで。

「だったらお互い敬語はやめませんか？ それに『さん』付けもよそよしいし」

「うん、もちろんいいわよ」

「えへへ、よかった！ じゃあ、ノアちゃん？」

「なあに、リーネちゃん？」

「えへへえ！」

リーネちゃんは嬉しそうに舌を出して顔を赤くする。こんな会話ここ何年もしたことないから、私もなんだか気恥ずかしい。でもわからないことだらけの状況の中で、リーネちゃんこうして話しているとすごく安心できる。それはリーネちゃんの明るさのお陰だろう。

「始め父さまに『同じくらいの年の女の子がいるから面倒をみるよ』って言われて、うちすごく緊張したの。だってこの村にうちと同じくらいの年の女の子っていないし」

「あ、そうなんだ」

まださっきの家からここまで歩いてくる範囲しか見てないけど、確かにここはとても小さな村だ。ゲームだと建物が数軒しか建ってなかったと思う。実際見ると、もっとあつたけど。

それでも学校のような施設はないし、確かに人口は少なそうだ。

「あ、そう言えばお母さんは？」

私は聞いてしまってから「しまった」と思った。リーネちゃんの

顔が見る間に曇っていく。

「母さまは二年前にモンスターに襲われて死んじゃった。仇は父さまが討ってくれたけど、母さまは戻ってこないから」

「ごめん、悪いこと聞いちゃった」

私は目がうるうるしてしまう。

この家に入った時、中が妙に雑然としていて違和感を覚えた。それはきつと家事全般をリーネちゃんがやってるからだ。

リーネちゃんはふるふると首を振り、また笑顔を作る。

「うちだけじゃないから。この村も隣のテグス村も、そういう家いっぱいあるんだよ」

「そうなんだ……」

私は絶句してしまう。

今まで考えたこともなかった。ゲームの中の世界だって人が死ねば誰かが悲しむ。プレイしてる時には何の気なしにやってたけど、こうして現実として向かい合うとこれはやっぱり戦争なんだって。モンスターを率いる悪の魔王と人間の戦争。これはそういうゲームなんだ。

「ノアちゃんもそうなんですよ？」

私はどきつとする。おそらくリーネちゃんは私を戦争孤児だと思っている。ヘルメスさんがそう説明したのかどうかはわからないけど、一人で保護された時点でそう思うのは当然だろう。

「ん、ま、まあ…… ね」

「だったら、うちよりたいへんだね。うちはまだ父さまがいるから」

「うん、いいお父さんだね。怖くない？」

「時々怖い。特に特訓中は」

「特訓？」

「うん、自分の身は自分で守れるようにって父さまに特訓してもらってるの。あ、よかつたら見てもらえる？　夕食の支度を始めるまで、まだ時間あるし」

「もちろん！」

私はリーネちゃんに手を引かれて家を出る。リーネちゃんは手をつないだり腕を組んだり、頻繁にスキンシップを求めてくる。きつと寂しかったんだろうな。気丈に明るく振る舞ってるけど、仕事で忙しいヘルメスさんを心配させないように無理してるんだと思う。

せめて皇都へ行くまでも、リーネちゃんと仲良くしてあげたいと思う。勇者がシュナイダーさんなら、世界を救うお仕事は私の役目じゃないし。ってかそんな役目、私には絶対無理だし。

リーネちゃんは家から少し離れた崖下に来る。

この村は山の側にあつて、村の北側は峻険な崖になっている。

北以外の三方は、モンスター除けの高い防護柵が塀のようにぐるりと村を取り囲んでいる。

「じゃ、見ててね！」

「うん」

リーネちゃんは崖を「むむむ」と睨んでいる。いや集中してるのかな？

右手を前に突き出して、左手は右手首をしっかりと掴んでいる。何をするんだろう。

するとリーネちゃんの開いた右の手のひらが、ほんのりと赤い光を帯びてくる。

こ、これ…… まさか魔法？

私は自分の喉が、ごくりと鳴るのを聞いた。

第8話

「むううゝ、やあっ！」

気合い一発、リーネちゃんの手のひらからは火の玉が飛び出す。でもそれは一メートルほど飛ぶと、ぺしゃっと地面へ落ちる。崖までは全然届いていない。

「あれ？」

リーネちゃんは構えを解いて、黒ずんだ地面を見る。火の玉はもう消えてしまっている。

「やっぱりまだダメだなあ」

リーネちゃんは人差し指を空中に突き出し、チャックを開くように横へ引く。ステータス画面を開いてるんだ。

「MPはもう、二十超えてるのになあ……」

リーネちゃんの肩越しに覗き込んでみるけど、陽炎のように空気が歪んでいるだけで画面らしきものは見えない。シュナイダーさんの言ってたことは本当みたいだ。

「ね、ノアちゃんは魔法使える？」

「え、私？」

リーネちゃんに言われて私はびっくりしてしまう。そう言えばさっきはステータスを全部見る前に閉じちゃったから、自分のMPを

確認してない。

「ちょっと待って」

私はリーネちゃんと同じように空中に画面を開く。表の左側の下の方に、MPの欄があった。

『MP：―』

「え、なにこれ？」

「どうしたの？」

私が固まっていると、画面の向こう側からリーネちゃんが心配そうな顔で覗き込んできた。

「ない」

「え？」

「MPがない」

「えええっ！」

リーネちゃんの大きな目が見開かれる。

「ないってどういうこと？」

「なんかステータス欄に横棒？ マイナス？ みたいなのがついてるだけの」

「そんなことってあり得るの？」

リーネちゃんはぽかんと口を開けたまま惚けている。私はステータス画面を消して、がっくりと肩を落とす。そんな私に慌てて、リーネちゃんはフォローしてくれる。

「で、でも、この世界の人で魔力のない人なんていないんだから、きつと何かの間違いだよ！ 父さまだって、ああ見えてちゃんと魔法使えるんだから！」

両腕をわにわにと振りながら必死に慰めてくれるリーネちゃんに曖昧な微笑みを浮かべて、私は心の中でため息をつく。

私この世界の人じゃないんだよなあ……

確かに私がいつも使っていた金髪碧眼のイケメンキャラに限らず、数種類あったキャラはどれもMPが設定されていた。

戦士タイプや魔導師タイプなど特性に応じて初期値は様々だけど、ゼロということはなかった。いくらチートでもこんなのあり？

「もしまたモンスターに襲われたら、リーネちゃん助けてね？」

私はリーネちゃんに力なく笑いかける。

「え、あ、うん！ もちろん、任せて！」

リーネちゃんはぶにゅぶにゅの力こぶを見せてくれる。

「こう見えても魔導師見習いだから、もっともおつと特訓してちゃんとした魔導師になるんだ！ そしていつかは……」

「いつかは？」

リーネちゃんのはにかみながら上目遣いに私を見る。うわっ、めっちゃかわいいし！

「ノアちゃんはバカにしない？」

「しないよ」

リーネちゃんはそれを聞いて満面の笑顔になる。

「いつかは召喚師になるのが夢なんだ！」

序盤で選択できるキャラのジョブ、いわゆる適性職業はいくつかある。RPGゲームによくあるものだ。

“魔導師”とはいわゆる魔法使い。他にも“魔術師”というものがある。リーネちゃんの言う“魔導師見習い”というジョブはないから、おそらくレベルの低い魔導師ということなんだろう。

“魔導師”は攻撃を中心とした魔法が得意なジョブで、“魔術師”は戦闘支援や冒険に役立つ魔法が得意なジョブだ。

他にも治癒系魔法の得意な“僧侶”なんてジョブもある。

“魔導師”がある一定のレベルに到達するとジョブチェンジできる。それが“召喚師”だ。

“召喚師”は“召喚獣”と呼ばれるかなり強い空想上の獣を呼び出して敵を攻撃することができる。ドラゴンとかも召喚できる。私は以前“召喚師”を育てたことがあった。すごくかっこいいグラフィックアニメーションで、戦闘中にも拘わらず見とれてしまったのを覚えている。

“召喚師”はシナリオ中盤以降、ものすごく頼りになるキャラだ。数十体のモンスター集団でも、一瞬で全滅させてしまうくらい強い。“魔術師”は序盤ではほとんど戦闘には役に立たず、他のキャラで守ってあげなければならない。パーティのお荷物って言ってもいいキャラだ。序盤ではほとんど使いどころがなく、せいぜい用途のわからないアイテムを拾った時鑑定させるくらいだ。

でも“魔術師”からしかねない上級ジョブがある。それが“精霊使い”だ。

“精霊使い”はめっちゃくちゃ強い。レベルの高い“精霊使い”が一人仲間にいるだけで、戦闘はかなり楽になる。確か中盤では“精霊使い”が仲間にいる時しか発生しないレアイベントもあったは

ずだ。

“僧侶”の上级ジョブは“司祭”で、戦闘不能になった仲間をも復活させられる。

そして“魔導師”“魔術師”“召喚師”“精霊使い”“僧侶”“司祭”をすべて経験した究極のジョブが“賢者”だ。

魔王を倒すのに賢者は絶対にいなくちゃいけないキャラじゃないけど、いるとかなり楽になる。“賢者”を育てるには通常のプレイ時間の倍は掛かっちゃうけど、プレイヤーにとっては一度は使ってみたいキャラだ。

「きつとなれるよ！」

「うん！」

気を取り直して「むむむ」と特訓を始めたリーネちゃんを、私はしゃがんで膝に肘をついて眺めていた。

この時の私は思いもつかなかった。

私には魔力が「ない」んじゃないかった。

「必要がなかった」んだと。

第9話

車や電車、飛行機などのない世界での長距離移動が、こんなにも過酷なものだとは思ってもみなかった。

ポルタ村を出てから一週間が過ぎていた。

ポルタ村とモンスターに占領されているテグス村との距離は約三十五キロメートルで、ほぼ目と鼻の先と言っていい。私が倒れていたのはそのほぼ真ん中の地点だったらしい。

そんなに近いところだから、ポルタ村はいつモンスターたちに襲われてもおかしくないように思われた。しかし実は、それは当分は心配しなくてもいいらしい。

一カ所を占領するとそこを橋頭堡とするために陣地化が行われる。ポルタ村にあった防護柵のような物や見張り用の櫓や攻撃に備えての罠の設置などだ。

それらの作業が常に敵の反撃に備えながら行われるため、一ヶ月はポルタ村は安全だという。

避難民を率いる部隊のリーダーにシュナイダーさんやヘルメスさんたちが就いたのには、そういう理由もあった。

また第一駐屯地から第二駐屯地、第二駐屯地から第三駐屯地のポルタ村へ、玉突きのように増援が送られてきたこともある。

現在ポルタ村には二百人以上の屈強な兵士たちがいる。ヘルメスさんに言わせれば、「皇国の精鋭部隊」なんだそうだ。

私が保護された日の夜その精鋭部隊がポルタ村へ到着し、翌日の朝避難が開始された。

ポルタ村とテグス村の村人たちは合わせて五百三十人ほどだ。

皇都へこれだけの人々を避難させるのは容易なことではない。

ポルタ村から皇都テーベまでは、徒歩で通常一週間はかかるらしい。五百人以上の旅慣れない村人たちを引き連れてなので、実際は倍の二週間はかかるものと思われる。

第三駐屯地のポルタ村を出てから第二駐屯地でもあるヨセミテ村、第一駐屯地である交易都市ファンゲルデンを経て、私たちは砂の舞う埃っぽい街道を南へ向けて進んでいた。

「ノアちゃんはどう思う？」

馬車の荷台に腰掛け、不安そうな目で後ろを見ていたリーネちゃんが私に振り返って問いかける。避難民たちの後ろは、シュナイダーさんたちが馬に乗って護衛をしている。

「どうって、さっきのこと？」

リーネちゃんはこくりと頷く。

騒動は交易都市ファンゲルデン出立直前に起こった。

交易都市ファンゲルデンは、中東の都市のような雰囲気の街だ。石造りの堅牢な建物が並び、東西南北の物資が行き交うとても活気のある要衝でもある。

北から迫る魔王軍の脅威は日に日に人々の生活に暗い影を落としてはいたが、それでもファンゲルデンの人々は生き生きと生活していた。

郊外で野営して今日の朝出立する時、避難民の一部から「ファンゲルデンに残りたい」という申し出があったのだ。

その申し出をシュナイダーさんはやんわりと、しかし断固として却下した。後でファンゲルデンに移住するのは構わないが、まずは一度皇都へ避難してほしいと。

ポルタ村とテグス村の村長は、それぞれの村の代表としてシュナイダーさんに激しく抗議した。けれどシュナイダーさんが折れることはなく、あわや暴動かと一時は騒然となった。

最終的には村人たちから尊敬を集めるヘルメスさんの一言で、村長さんたちはしぶしぶ引き下がった。

「誰のお陰で今こうして生きている？」とヘルメスさんは無骨な笑顔で優しく諭した。

ヘルメスさんはもともポルタ村の木こりで、軍人ではなかった。事実シュナイダーさんたちが来なければ、テグス村の住民は皆殺しにされていただろう。そしていずれはポルタ村も。

村人たちはその恩を忘れたことはなかった。

でも私は村長さんたちの気持ちもよくわかった。誰しも、生まれ故郷にできるだけ近いところにいたいものだろう。例えばそれが見ず知らずの土地であっても。

そんな村人たちを見ると、私も望郷の念に駆られてしまう。

お母さんやお父さんは心配してるだろうなとか、仕事無断で休んじやってもうクビにされちゃってるかなとか。

携帯もないし連絡のしようもないからしょうがないけど、やつぱり戻れるなら戻りたい。ゲームは好きだけど、ゲームの世界に入りたいだなんて思ったこともない。

「気持ちはすぐわかるけど…… 何でだろうね」
「なにが？」

風で顔にかかる髪を掻き上げながら、リーネちゃんは小首を傾げる。

「シュナイダーさんは何で、みんなをどうしても皇都に連れて行きたいんだろう」

「うーん……」

リーネちゃんは腕組みをして眉間にしわを寄せて考え込む。難しいことを考えている時のリーネちゃんは、本当にお父さんそっくりだ。本人は自覚してないみたいだけ。

「安全だから？」

「うーん……」

今度は私が考え込む番だった。

「危険度はあんまり変わらないと思うけど」

「それとも殿下は、ファンゲルデンも魔王に陥落させられるって危険性を考えてらっしゃるのかな？」

「うーん…… ダメだ、わかんない」

「うちもダメだ」

私たちはくすくす笑い合う。リーネちゃんは戦時下のこの厳しい世界で生きてきただけあって、私なんかよりよほどしっかりした考え方をしている。彼氏に振られてヤケ酒煽ってゲームをした誰かさんに、爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいわ…… って私だけ。この一週間で私とリーネちゃんは、もはや親友と呼べるくらい仲良くなった。まるでもう何年もいっしょにいたかのように、自然に打ち解け合っていた。

私は短大を卒業してから二年間一人暮らしを続けてきたので、それなりに料理はできる。この旅でもクレセニア皇国軍の兵士さんたちだけでは手が回らないので、私やリーネちゃんは村人のおばさんたちといっしょに炊き出しの準備を手伝ったりしている。

リーネちゃんはしっかりしているが…… 料理は苦手だった。

その日は三十キロメートルほど進んで野営することになった。

ファンゲルデンからテーベまでの街道筋にはいくつかの宿場町があるけれど、そのどれもが小規模なものだ。

風除けも兼ねて、丘の陰に数十のテントが張られている。女子ども年寄りもテントで休み、それ以外の者たちは思い思いの場所で体を休める。

住み慣れた土地を離れて遠い場所で夜空を見上げる人々の気持ちは、どれほど寂しいものなのか。

私は固い荷馬車で痛くなった腰や背中中、なかなか寝付けないでいた。

荷馬車にロイヤルサルーンを求めたりはしないけど、一日中サスペンションもない固い荷馬車に揺られれば身体が痛くなるのは当たり前だ。

お風呂ももう一週間は入っていない。ポルタ村のヘルメスさんの家で入って以来だ。

テントの中で身体を濡れタオルで拭いたりしてはしてるけど、それでもやはり気持ち悪い。

私は隣ですやすやと寝ているリーネちゃんを起こさないように、そつと起きてテントを出す。

外は満天の星空だった。

都会では見ることでできない広大な宇宙が、そこには広がっていた。

「きれいだなあ」

私は地面で寝ている村の人たちを踏んづけないように気をつけながら、丘へ向かう。

さほど高くない丘はくるぶしほどの草が生い茂り、夜風にさわさわと音を立てている。そこに何か別の音が混じる。いや、音ではなく声だ。

「ふっ…… しゅっ！」

声の後には空気を切り裂く鋭い音が続き、私は気になって音の方へと足音を忍ばせて歩いていく。

丘の頂上には蒼い月明かりに照らされて、無数の星々の煌めきを

背景にしたシュナイダーさんが剣を振っていた。

第10話

「誰だ！」

鋭い誰何すいかの声が飛んできて、私はびくつと動きが止まってしまう。草むらの中に立ち尽くす私を見つけると、シュナイダーさんは厳しい視線を和らげて剣先を下ろす。

「なんだ、ノアさんでしたか。驚かせてすみませんでした」

白磁のようなシュナイダーさんの額に流れる汗が月明かりにきらめいている。私は呪縛が解けたように肩の力を抜いて、おそろおそろ斜面を上っていく。丘の頂上は夜風が気持ちよかった。

「邪魔をしてすみませんでした。何だか寝付けなくて……」

「気にしないでいいですよ、今夜はもう終わりですから。避難の旅は精神的に辛いですからね。通常よりも身体に負担がかかります。休める時には休んでおいた方がいいですよ」

シュナイダーさんは剣を顔の前に持ち上げて銀色に光る刀身を丁寧に確認すると、スムーズな動作で鞘に収める。豪華な金髪が風に揺られて、紗々と流れる。青白い月明かりの下にいますと、本当にシュナイダーさんは人間離れた美しさだと思う。

「は、はい、ありがとうございます」

「眠くなるまで、少しお話しでもしませんか？」

シュナイダーさんは傍らの草むらに腰掛ける。私は素直に頷いて少し離れて腰掛ける。外とはいえこんな夜中に男の人と二人きりつ

て、逢い引きしてるみたいでちょっとときどきする。

「ノアさんはご自分も避難民なのに、いろいろと手伝っていただいてありがとうございます」

「あ、いえ、何もしないでいるよりはいいかと思って……」

シュナイダーさんは照れる私に優しく微笑みかける。うわっ、その微笑みは反則だ！ めっちゃかっこいいし！

私は恥ずかしくなっとうつむく。頬に熱を感じる。きっと赤くなってるに違いない。今が夜でよかった。

「補給部隊の間では、もう噂になってるみたいですよ。あのかわいい娘はどここの娘だって」

「そ、そんな……」

補給部隊の兵士たちは前線で武器を取って戦ったりはしないけど、みんなそれなりにプライドを持ってお仕事をしている。食べ物がないと人は戦えない。けれども物資の量は決まってるから、ただ食事を用意すればいいってわけじゃない。今は撤退みたいなものだからまだいいけれど、これが敵地へ進軍する作戦行動だと食事の準備もスピードと効率が必要とされる。

決められた作戦行動期間に合わせて、用意された食料を計算して使わないといけない。しかも補給部隊は部隊の生命線だけに、真っ先に敵に狙われやすいのだ。

彼らにはそういったプライドと緊張感がある。自分たちが部隊を支えているという強いプライドが。

「リーネちゃんも最近はよく笑うようになりました。心から」
「え？」

思わず顔を上げると、シュナイダーさんは遠くの山影に目をやりながら切なげに眉根を寄せる。

「わたしがポルタ村に着いた時は、リーネちゃんはまったく笑わない子だったんです」

「そうなんですか？」

私は本心から驚いた。リーネちゃんはいつも明るく元気な子だ。そのリーネちゃんがまったく笑わない子だったなんて、ちよつと想像もつかない。

「母親がモンスターに殺されてから、彼女はずっと悲しみに沈んでいたようですからね。そういう意味でもあなたには本当に感謝しています」

「いえ、そ、そんな……」

私は身の置き所がなくなってしまう。私は何もしていない。それどころかリーネちゃんには、異世界に来て不安な私の方が支えてもらってる。

「魔王が現れてから、この国ではリーネちゃんのような子どもがたくさん出てしまっている。わたしは子どもたちが、いや国民全員が心の底から笑いあえる世界を取り戻したいと思っています」

シュナイダーさんは普段とても忙しそうで、最初に会った時からほとんど話をしないままここまで来てしまった。私が人見知りなのもあるけれど、こんなにゆっくりシュナイダーさんと話ができたのは初めてだ。

今なら理由が聞ける気がして、私は昼間リーネちゃんと話したことを聞いてみようと思った。

「あ、あの、聞いてもいいですか？」
「なんでしょう」

シユナイダーさんの優しい目がこっちに向けられる。私は恥ずかしくて視線を外しながらおそるおそる聞いてみる。

「どうしてあの町に村の人たちが残るのを許可しなかったんですか？」

「ああ……」

シユナイダーさんは悲しげに目を伏せる。村長さんたちに責められたのを思い出したのだろう。聞いちゃいけなかったかな？

でもシユナイダーさんは遠くを見つめながら、ぽつりぽつりと話し出す。

「彼らの気持ちはよく理解できるけど、ファンゲルデンに彼らを残していくことはできなかったんです。町にはその町の規模で賄える適正人口というのがあります。ファンゲルデンは今ぎりぎりの状態なんです」

「あ、そっか……」

人が生活するためには衣食住が必要になる。住む場所や仕事などだ。ファンゲルデンは割と大きめの町だけれど、一度に数百人の人が流入してきたら、たちまちのうちに生活できない人が多く出てしまう。ただでさえ第一駐屯地として負担が掛かっているのだから。

「それに命を脅かされていた彼らには、まずはショックや悲しみを乗り越えてから前を向いてほしいと思っています。実はここだけの話ですが……」

シュナイダーさんは声を潜める。心持ち座ってる位置が近づいてる気がする。いや、間違いなく近づいてるし！

シュナイダーさんのたくましく大きな肩が、私の肩に触れんばかりになっている。だから私は緊張して、シュナイダーさんの言葉が一瞬理解できなかった。

「皇都には魔除けの神聖な結界が張られているんです。だから皇都にいれば、モンスターに襲われることは絶対にはないんです」
「え？」

私は思わず顔を上げてシュナイダーさんの方を見てしまう。すると白く美しい顔と海のように青い瞳がどアップになって、私は固まってしまった。

第11話

「え、あ？」

「父は占星術が専門ですが、元は偉大な賢者だったんです。皇王となつて今は半分隠居しているような状態ですが、父の魔法はまだまだ衰えてはいません」

シュナイダーさんは体勢を戻して星空を見上げる。それで私はやつと呼吸することができた。ああびつくりした……　キスされるかと思つた。つて、ええ？

そこで私はシュナイダーさんの言つたことに漸く気づく。

皇都が結界で守られてるつていうことは、モンスターに襲われる心配がないということ。それは今のこのクレセニアの状況ではかなり強力な安心材料だ。でもそれが広まると大勢の民衆が大挙して皇都へ押し寄せる。皇都はこの国で一番大きな都市だけれど、いくら何でも国民全員を賄えるほどのキャパシティはないだろう。

「できればテグス村とポルタ村の人たちには、戦争が終わるまで皇都に避難していてほしいのです。そして戦争が終わったら村へ返してあげたい。移住したりするよりも、それが一番いいと思うのです」
「それであれだけ頑なに拒否されてたんですね」

雲一つ無い澄んだ夜空は、私の知らない星座ばかりだ。涼風が首筋を通り抜け、私は目を細めて星々の瞬きに目を細める。

そこでふと、ある矛盾に気がつく。

ゲームのシナリオでは間もなく皇王は魔王に暗殺される。でも魔除けの強力な結界が張られているなら、暗殺されるはずはないんだ。私は皇王暗殺の可能性を、まだ誰にも告げていない。リーネちゃんにも。今ここでシュナイダーさんに言つた方がいいのかな？

でも今までの出来事から、私の知っている「クレセニア皇国物語」のシナリオとは微妙に食い違っているのがわかる。そうなれば皇王暗殺イベントは発生しないかもしれない。皇都に魔除けの神聖な結界が張られているなんて設定は聞いたこともないし。

「あの…… その結界は敵に破られるってことはないんですか？」

「うん、絶対に破られることはありません。事実、今まで何度も攻撃されましたが、一度だって破られたことはなかったですからね」

「魔王にも…… ですか？」

シュナイダーさんは力強く微笑んで頷く。

その笑顔はやっぱり素敵で、私は恥ずかしくなって視線を逸らしてしまう。白いワンピースに包まれた自分の膝を見ながら、小さく頷く。

うん、やっぱり杞憂だ。

私は安心して皇王暗殺のことは忘れることにした。

魔法って私にとってはリーネちゃんの特訓で見たただけけど、この世界には厳然として存在する。元賢者だという皇王に会えば、私が元の世界に戻る方法もわかるかもしれない。

「父に会えば、あなたが何者なのかわかるかもしれません。もっとも、少なくともモンスターではないということはわたしにもわかりますけどね」

そういつてシュナイダーさんは笑顔で髪を掻き上げる。

「モ、モンスターって、シュナイダーさんひどい！」

「あはは、こんなかわいらしいモンスターなら襲われてもいいですね」

「もっ……」

私は頬を膨らませて立てた膝の間に顎を載せる。

「でもシュナイダーさんはいい国王様になりますね。こんなにも国民のことを考えてらっしゃるから」

シュナイダーさんは一瞬驚いたように目を見開く。そして軽く首を振る。月明かりに照らされたきれいな金髪がさらさらと流れる。私はウィンドチャームの幻聴が聞こえたような気がした。

「それはまだまだ先の話ですね。わたしはもっと強く賢くならなければならぬ。国王などの器ではないんです」

「そんなことないですよ。シュナイダーさんはいわゆる王子様ですよね？ 普通王子様ってたおやかで繊細なイメージがあります」

「はは、それはどこの世界のお話ですか」

私はドキッとしてしまう。シュナイダーさんに「別の世界の人間だ」と看破されたような気がしたからだ。

「わたしは思っています」

私がドギマギしていると、シュナイダーさんは真剣な目で話し始める。

「ノアさんは救世主なんじゃないかって」「救世主？」

突拍子もないことを突然言われ、私はまたドキッとしてしまう。“救世主”なんて設定、ゲームにあったかな？ いや、なかったと思う。あえて言えば“勇者”が救世主だ。

「この世界を救う救世主です。なんの根拠もないですけどね」

私がそれに対して何かを言おうとすると、シュナイダーさんは後ろを振り向く。私は何も感じなかったけれど、斜面を大きな影が上ってくる。ヘルメスさんだ。

シュナイダーさんと私は草を払って立ち上がり、ヘルメスさんが会釈するのを見る。

「殿下、村人で熱を出した者がおりまして解熱剤を求めています。勝手に軍の薬を分けるわけにもいきませんが、村人たちの在庫も底を着いているようです。ご判断を仰ぎたいと思ひまして」

「ああ、構わない。いざとなれば早馬で皇都へ搬送もできるし、薬を取って来ることもできる。処方していいよ」

シュナイダーさんとヘルメスさんが話すのを聞きながら、私は丘の麓に散らばって揺らめいている篝火かがりびを眺める。

もし私が本当に救世主で世界を救う力があるのなら、できる限りのことはしたい。人々が笑顔で平和に暮らせる世界にしたい。今までの私の人生では、人の役に立つことなんか何一つしてこなかったから。

私はこの世界に來た意味を漠然と考え始めていた。

第12話

クレセニア皇国の首都テーベ。科学文明の発達していないこの世界にも拘わらず、そこには高層建築物が空を狭めている。とはいってもせいぜい石造りの五階建てがいいところなのだけだ。教会や聖堂の尖塔は十数メートル以上はあり、それらが林立している様は異国情緒たっぷりだ。

延々と続く市壁に沿って街道を進むと、アーチ型に石を組んだ通門にたどり着く。くすんだ金色の鎧を着て長槍を携えた衛兵が二人、その両脇に立っている。引き上げ式の入り口の扉は下ろされ、私の胴回りほどもある太い鎖で市壁とつながっている。有事にはこの扉は引き上げられ、敵の侵入を防ぐのだろう。映画やテレビで観たことのある西洋のお城の入り口と同じだ。

「着いたねえ！」

「うん、やっと着いたね」

がたがたと揺られる馬車の荷台で、私とリーネちゃんは伸びをする。もうほんと腰やら背中やらいろんなところが痛い。ふかふかのベッドがいかに幸せなことか、私はこの二週間でよくわかった。

村の人たちも漸く辿り着いたテーベの偉容に、心持ち表情が明るい。ヘルメスさんは入り口の手前で馬を止め、周囲の兵士たちに何か指示をしている。程なくして後方からシュナイダーさんがやってきて、ヘルメスさんと話し始める。

皇都テーベは交易都市ファンゲルデンとは比べものにならないくらい大きいけど、それでも五百人以上の避難民が一気に入っていたら混乱するだろう。事前に仮設住宅とか用意してあるみたいだから、人員の確認をしてから振り分けるのかもしれない。

周囲の兵士たちが村人たちへその場に座るように指示し始める。

村人たちは苦勞して辿り着いたテーベを目の前にして待たされることに不満を漏らしてはいたが、ここまできたら軍の指示に従うしかない。みんな不承不承腰を下ろし始めた。

私は何となく、東京見物に来た田舎の修学旅行生を連想してしまっただ。

「ノアちゃん、なに笑ってるの？」

リーネちゃんが目をしばたかせて私を覗き込んでいる。やばっ、表情に出ちゃってたみたい。

「あは、なんでもないよ」

「ノアさん、リーネちゃん」

馬車の横にシュナイダーさんがやってくる。馬ではなく鎧をかちやかちや鳴らして歩いてくる。

「王には夕方に謁見する約束を取り付けてあります。それまで街でも見学したらどうですか？ 案内できないのが心苦しいのですが」

「え、あ、はい。でも私たち、道に迷っちゃうかも……」

テーベは東京ほど大きくはないけど、それでも山手線の内側ほどの広さはある。バスや電車もないこの街を、無駄に歩き回っても疲れちゃうだけだ。

「あれが見えますか？」

シュナイダーさんは私たちの背後を指さす。振り返って見ると、林立する尖塔の向こうに、一際高い尖った三角形の塔が霞んで見える。スモッグなどのないこの世界であんなに霞んで見えるって、そ

うとう高い塔だと思う。

「あれが皇宮です。ここからあそこに向かってのんびり歩いていくだけでも、十分観光になるでしょう。途中にお店や公園などもありますから、きっと楽しいですよ」

そういうとシュナイダーさんは左手に持っていた小さな袋を差し出す。飴色をしたその袋は、持つとずっしりと重い。何となく予想はついたけど、一応中を覗く。そこには銀貨がたっぷりと入っていた。

「わたしは仕事でいっしょに行きませんが、ヘルメスが護衛についてくれるそうです。ここまできたらわたしの護衛は要りませんからね」

見るとヘルメスさんも、馬を降りて荷物を解いている。

「え、でも、いいんですか？ シュナイダーさん一人でたいへんじゃないですか？」

「ノアちゃん、父さまは皇軍に入ったけど正式には軍属じゃないの。あくまでも殿下の個人的な仲間なの。だから殿下の政治的なお仕事には関係ないのよ」

「ふん」

どんなに有能で力があっても、元木こりのヘルメスさんが軍の中で幅を利かせるとおもしろくないと感じる人はいるだろう。

そういう配慮もシュナイダーさんにはあるのかもしれない。そしてそれがわかってるからこそ、ヘルメスさんは何も言わずに私たちについて来てくれるんだろう。

シナリオでは勇者とヘルメスはラストまでいっしょに冒険するは

ずだ。無機質なゲーム画面からは伝わってこなかったけど、二人の間には強固な信頼関係がこうして築かれていったんだろうなと思う。

「ノアちゃん、早く行こ！」

リーネちゃんはすでにヘルメスさんの腕にぶら下がっている。私はシュナイダーさんに会釈して、馬車から飛び降りる。まだこの身体には完全に慣れていないので、私はバランスを崩して転びそうになってしまう。

「おっと」

鎧の硬質な感触とたくましい筋肉の温もりが私を包み込む。私はシュナイダーさんに抱きかかえられていた。

「あ、す、すいません」

顔から火が出るほど恥ずかしい。こんな映画俳優みたいな美形に抱かれるとあり得ないし！

シュナイダーさんの微笑みがすぐ目の前にあって、私は慌てて視線を逸らす。

「皇宮に行けば後は係の者が案内してくれるはずです。それまではゆっくり楽しんでくださいね」

シュナイダーさんは何事もなかったかのように微笑んでいる。ドキドキしている私なんか情けない。心も体と同じく少女になってしまったような気がする。

私はもう一度シュナイダーさんにお辞儀して、リーネちゃんたち

の方へ走って行った。

その時のシュナイダーさんの温もりは、その後も私はずっと忘れることはできなかった。

第13話

「はい、右腕出して」

「これなに？」

私は傍らに立つリーネちゃんを見て泣きそうになる。注射って苦手なのよね。

守衛さんの大きな手が私の腕を掴む。決して乱暴ではないけれど、しつかりと掴まれてるからちよつと怖い。私はまだオークに刺されたショックを忘れたわけじゃない。

「ノアさん、テーベに入るための通行許可証のようなものです。痛くはないしすぐ済みますよ」

ヘルメスさんのセリフは、どう考えても注射の時の看護師さんのものだ。私はハンコのようなものを近づけてくる守衛さんの手元から目を背ける。

「はい、終わりましたよ」

「へ？」

確かに痛くも痒くもない。ほんのちよつと二の腕が温かくなっただけだ。私は自分の腕を回して見る。そこにはギリシャ文字の「Ψ」に似た文様が焼き付けられていた。

「公には警備の一環とされていますが、これはテーベの“絶対領域”を透過するのに必要な措置なのです」

「絶対……領域？」

また知らない単語が出てきた。テーベにそんな魔法が掛けられるとかつて、聞いたこともなかった。

ヘルメスさんは周囲を憚って声を潜める。

「皇王によって張られている結界のようなものです。偉大な賢者様でもあるクレセニア皇王が数ヶ月かけて構築した絶対不可侵の領域です」

シュナイダーさんの言っていた「魔除けの神聖な結界」ってこれね。

リーネちゃんは市壁の向こうに広がる広場に目を奪われて、もうさつさと中に入ってしまったている。私はヘルメスさんについて、通門へと入っていく。

「少し文様が熱くなりますが、体には害はないので我慢してください」

そういうとヘルメスさんの体が少し歪む。何もない空間に水面のような波紋が広がる。私はおそろおそろ右手を差し出す。

特に抵抗は感じないけど、指先から波紋が広がる。私はそのまま進み、波紋の中へ入っていく。

ヘルメスさんの言ったように、二の腕の文様が熱くなってひりひりしてくる。でも痛いほどじゃない。

全身が柔らかくて温かいゼリーののようなものに包まれている感触がする。この感触はどこかで感じたことがある。

周囲の光は七色に輝いて乱反射し、流動的なプリズムが幾何学的な可視光線を連続してフラッシュさせる。

不思議なことに、私はその中にずっといたいと思った。

そつだ、感じたことがあるのは当たり前だ。

これは母親の胎内。私は今、羊水の海の中に浮かんでいるんだ！

光溢れる生命の根源。太古から変わらず連綿と続いている命のり
しー。

私は今、その狭間に浮かんでいる。

温かくて気持ちよくて、何て安心できるんだろう……

私の意識は拡散し、高く空へと上っていく。

広い緑の芝生に囲まれた皇宮を、私は真上から俯瞰している。道を歩く人々は胡麻粒のようで、家々は箱庭の玩具のようだ。

「ノアさん！」

伸ばした右腕が強烈な力で引っ張られる。私の意識は強引に引き戻され、視界がぼやける。私はふらついて、地面にへたり込んでしまった。

「ノアちゃん大丈夫？」

リーネちゃんが驚いて駆け寄ってきた。ヘルメスさんに腕を支えてもらっていなかったら、きっとそのまま倒れて固い石畳に頭を打ってしまっていただろう。

「う、うん…… 大丈夫…… 何があったの？」

「ノアさんは絶対領域の中でぼうつと立っていました。その文様は一瞬しか効果がありません。燃え尽きてしまったら終わりです。あのまま立っていたら、ノアさんはその存在自体が消滅してしまっていたでしょう」

「しょ、消滅？」

リーネちゃんが青白い顔でぶるっと身震いする。結果ってそんなに怖いものなんだ……

でも何だか私にはそうは思えなかった。

安心して身を委ねていられるような、そんな確かなぬくもりを感じた。一体あれは何だったのだろう……

「きつと初めて強力な魔力に包まれたから、びっくりしちやっただよ。いろいろお店とか見て回れば、気持ちも落ち着くよ！」

「そ、そういうもんかな……」

私は納得はいかなかったけど、自分でもよくわからないのでリーネちゃんの言う通りにすることにした。

ヘルメスさんも無骨な笑顔で頷いてくれる。

私は大きく息を吐き出すと、両膝に力を入れて立ち上がる。

確かにせっかくの皇都なんだから、いろいろ考え込んでしまうのはもったいない。どうせならうんと楽しまないと！

二の腕の文様はもう跡形もなく消え去っていた。

「どうぞこちらへ」

柔らかそうな若草色の芝生と季節の花々が咲き乱れる美しく広い前庭を十分ほど歩いて、漸く皇宮の入り口へ辿り着いた。

車停めのように張り出した屋根には、おそらく名匠によるものだろう重厚な彫刻がぐるりと施されている。まさに歴史と伝統を感じさせてくれる建物だ。

日はすっかり沈んでしまって、濃紺の空には星が瞬き始めている。観光ですっかり体力を使い果たしてしまった私とリーネちゃんは、すでに眠くなつて足取りも重い。

正直皇王との謁見は明日にしてくれないかななどと、失礼なことを考えてしまった。

ヘルメスさんは両手に重い荷物を抱えたまま、のっしのっしと赤

絨毯を踏みしめて守衛さんの後について歩いていく。

リーネちゃんは勉強家で、魔法や魔術それに召喚術などに関する本を山ほど買い込んだ。お家にあつた本だけでも十分なのに、それだけでは全然足りないらしい。何より家にある本は全部読んでしまつて、もう何度繰り返して読んだかわからないという。

本は村では手に入らないので、ヘルメスさんが遠出した時に時々買つてもらつていたようだ。今回はしばらくここに滞在することになるので、買えるだけ買つたみたい。

ちなみに私は服と靴、それに下着を買つてもらつた。いつまでもリーネちゃんのブーツや下着を借りているわけにもいかなかったし、自分の好みの物を身に着けたかつたし。

でも、サイズがあつちの世界のものよりツーサイズくらい小さくなつてしまつたのには軽くショックを受けた。

私たちは皇宮の一室へと案内された。私とリーネちゃんはお風呂に入つて、綺麗な服を着るようにヘルメスさんに言われた。

お風呂もとても豪華で、私とリーネちゃんははしゃいで大騒ぎだった。客室に備え付けられているお風呂にしてはとても広くて大きくて、ライオンみたいな動物の口からお湯がザザーツて出た。

それでもここはあくまでも来客用の部屋なので、王様とかはもつとすごいお風呂とかお部屋なんだろうなと想像した。

「ねえ、ノアちゃんはテーブルに來たの初めてだよね？」

リーネちゃんの声がお湯の流れる音に混じつて反響している。白く煙つた湯気の向こうで、リーネちゃんの白くて小さいおしりがお湯の上にぷかぷかと浮いている。私はそれがかわいくてむしゃぶりつきたい誘惑に駆られてしまふ。

「そ、そっだよ」

「どうやって沸かしているのかわからないけど、お湯はかなり熱い。私は縁に腰掛けて首筋の汗を拭う。」

「お店の場所とか道とか、ノアちゃん全部知ってたのはどうして？」
「え、あ、あれは、勘よ、勘！」

私は慌てて言い繕う。

理由はわからないけど、私の脳裏にはティーベの細かい地図が浮かんできた。どこに何があるのかも、自然にわかってしまったのだ。ティーベに入ってきた時のことが関係あるのかも知れないなど、私は上せかけた頭で考えた。

「でもお陰で効率よく行きたいとこ行けたから、助かつちゃった！」

ヘルメスさんはここへ何度か来たことがあったみたいだけど、必要などころしか行ったことがなかったので細かい道やお店の場所までは知らなかった。だから結局は私が道案内をしたような形になってしまった。

「明日もお買い物いっしょに行こうね！」

リーネちゃんの屈託のない笑顔に、私も満面の笑顔で大きく頷く。でもその約束が果たされることは、二度となかった。

第14話

体にぴったりと張り付くような、薄いピンクのキャミに合わせた淡いピンクのショーツ。少しゴムが緩いけど、下がっちゃう程じゃない。

ブラはワイヤー入りなんて現代的なものじゃないけど、ショーツと合わせてピンク色の綿生地でかわいいヤツだ。リーネちゃんといっしょに選んだ。

元々体の線が出るような服は好きじゃなかった。この少女の体になってもそれは同じで、できる限り露出は抑えたものにしたかった。でも文化の違いなのか、女性用のズボンは農作業向けのもんぺみたいなのしかなくて、結局腰で縛ることのできる白いチュニツクにした。お店の中で一番丈の長いやつにしたけど、大人用だと膝下まで隠れてしまつて歩きづらい。

結局子ども用のサイズの一番大きなものを選んだ。それだと膝上五センチくらいだから、ちょうどよかった。本当は生足じゃなくてジーンズでも合わせたいところだったけど、ジーンズは手に入らなかったなので黒いスパッツのような柔軟性のある革製のショートパツにした。

これはスパッツのように見えるけど、実は女性戦士用の下着らしい。太ももの真ん中くらいまでの長さなので、上着用チュニツクがワンピースみたいになつてしまっている。それはそれでかわいいから、気にしないことにした。

ちなみに脱衣所の外には靴が置いてある。スニーカーが一番よかったけど、あいにくこの世界にはそんなものはない。結局冒険者用のミドルブーツにした。長靴くらいの長さで、焦げ茶色をした厚い革製の実用的なブーツだ。とは言っても、デートにはちよつと無骨すぎて実用的じゃないけど。

「うわあ、ノアちゃんかわいい！」

買ってきたばかりの下着と服を身に着けると、リーネちゃんは目を輝かせて手を叩く。同性に「かわいい」だなんて今まで言われたこともなかったから、私は照れて俯いてしまう。

でも確かに脱衣所の大きな姿見に映った私は、自分で言うのもないけど本当にかわいらしかった。二十二年間見知った自分ではないから、余計客観的に見られたのかもしれない。

胸が小さくなったのにはちよつとショックだったけど、お尻は小さくなったからいいかな？

横を向いたり後ろを振り返ったりして自分の姿を眺めていると、脱衣所のドアがノックされた。

「ノアさんそろそろ謁見の時間です。準備はよろしいですか？」

「あ、はい！」

ヘルメスさんの遠慮がちな声が聞こえ、私は慌てて今まで着ていた服を横の籠に放り込む。メイドさんが後で洗濯してくれるらしい。ヘルメスさんは初めて出会った頃こそ遠慮はなかったけど、私が怪しい者じゃないとわかってかなり紳士的に対応してくれるようになった。

そんなヘルメスさんに、リーネちゃんはくすくす笑う。

「父さまいつもはノックもしないでお風呂に入って来るのに、ノアちゃんが来てからすっかり遠慮してしまってるみたい」

「ええ、ノックしないの？ お風呂なの？」

「あれ、ノアちゃんはお父さまといっしょにお風呂に入ったりしなかったの？」

「わ、私はそんなことしないわよ！ そりゃ幼稚園の頃はいっしょに入ってたけど、小学校中学年くらいからはいっしょに入らなくな

「ったかなあ」

「よーちえん？　しょうが……　ちゅうがくねん？　それなに？」

「あ、ゴメン、こっちの話」

私は慌てて手を振る。

「ノアさん」

ヘルメスさんの促すような口調が、再度ドアの向こうから聞こえる。

いけない、またおしゃべりしちゃってた。急がなきゃいけないのに。

私たちは苦笑して肩を竦めると、脱衣所を出た。

当たり前だけど、皇宮にはたくさんの方が働いていた。メイド服を着た女性たちと何人かすれ違い、長いスカートみたいな服、ローブっていうのかな？　そんなのを着たおじさんたちともすれ違った。みんなヘルメスさんの大きな身体を見るとぎよっとして道を譲る。そりゃいかにも武人って感じのヘルメスさんが背中に大きな剣を背負ったままのっしのっしと歩いていたら、普通の人はびっくりするよね。

リーネちゃんはずっきの部屋で、謁見が終わるまで待っていることになった。今回皇王様に謁見できるのは、私とヘルメスさんだけみたい。

ヘルメスさんも皇王様に会つのは今回が初めてということ、すごく緊張している。だからさっきはあんなに焦ってたんだ。時間に遅れるわけにはいかないって。

「シュナイダーさんはいらっしゃらないんですか？」

ヘルメスさんは普通に歩いているけど、私はどうしても遅れがちになってしまう。時々小走りになりながらも、必死にヘルメスさんについていく。

ティーベを観光してた時は気を遣って歩調を合わせてくれてたけど、今は緊張の方が先に立ってるみたい。

「殿下は先に行って、待っておられるそうです」

「そうですか」

毛足の長い赤い絨毯は時々足を取られて転びそうになってしまう。それでも一生懸命ヘルメスさんについていく。

長い廊下を歩いて幅の広い階段を三階分上る。すると風が私の髪を乱す。そこはテラスのようになっていて、石の手すりの向こうには前庭が濃紺の空と外灯ランプに照らされ黄褐色に染まって広がっている。遙か先にはティーベの街並みが、地上に降りた星屑のように白や黄色の光を瞬かせている。

「武器を預からせていただきます」

大きな両開きのドアの前に、くすんだ金色の鎧に茶色いマントをつけた衛兵さんが二人立っていた。ヘルメスさんがどんな立場なのかわかっていようで、物腰は柔らかいが視線は鋭い。私は衛兵さんと目が合うといたたまれなくなって視線を逸らせてしまう。

「こちらは殿下に保護された少女です。今回殿下の名前で謁見を許可されているはずですが」

「伺ってます。武器などは携行されてませんか？」

「は、はい……」

私はかろうじて掠れた声を出し、こっくりと頷く。それだけで精

一杯だった。

何だか偉い人に会って実感が、今更ながらに湧き起こってきた。
こんな検問みたいな物々しい雰囲気、大学の卒業旅行でヨーロッパへ行った時の入国審査以来だ。

「では、どうぞ」

ヘルメスさんからクレイモアを預かった衛兵さんが、重そうに両手で抱えて壁際に下がる。もう一人の衛兵さんがドアを開けると、その向こうには荘厳な大広間が広がっていた。

第15話

ギリシャにある神殿みたいな装飾彫刻の施された円柱が、左右にたくさん並んでいる。天井は二、三階分吹き抜けになっていてかなり高い。

壁際には落ち着いたオレンジ色のランプが一行にたくさん灯されていて、広い空間全体を淡い光で照らしている。

入り口からまっすぐと伸びた赤い絨毯は、数十メートル先で終わっている。その先には数段の段差があり、大きく広い台座となっている。

台座の上には背もたれの長い黄金の椅子が設えてあり、クレセニア皇王らしき人がそこに座っていた。

「へ、ヘルメスさん、私、緊張してきました」

「心配されなくてもいいですよ。私も緊張しています」

いや、それ余計に心配だから！

謁見室では急な動作をしてはいけない。不穏な行動と受け取られてしまうからだ。私はヘルメスさんの少し後ろをゆっくりと歩きながら、謁見の作法について頭の中で反芻した。

リーネちゃんと部屋で少し練習したけど、上手くできるかな？

失敗して怒られたりしないかな？ ドキドキしているせいか、皇王様の前、下？ にはすぐに到着してしまった。

ヘルメスさんと私は視線を下げたまま両膝を絨毯について、右手を心臓に当てて深く頭を下げる。

ええっと、腰から曲げないで頭だけを下げたんだっただよね？ えと、それで声を掛けられるまでその姿勢を維持…… っと。これけっこうキツイ体勢だなあ……

「両者とも面を上げ」

少し神経質そうな声を掛けられ、私はほっとして頭を上げる。一瞬皇王様に声を掛けられたのかと思っただけ、隣に立ってる秘書みたいな人が言っただけ。

深緑色のローブを着たその人は、バインダーのような黒い板を持つてこつちを厳しい視線で見下ろしている。

「ヘルメス、そなたの働きはシュナイダーに聞いている。いろいろと世話になっているのう」

囁れた、それでいて慈愛に満ちた深く優しい声音が響く。それがクレセニア皇王様の第一声だった。

皇王様は濃い紫で縁取りされた緋色のローブを身に纏い、椅子にゆったりと腰掛けている。全体的にとても落ち着いた印象を受ける。シュナイダーさんのお父さんだから年齢はまだ壮年くらいのはずだけど、その顔は老人を思わせるような瘦顔だ。顔の下半分は白く長い口髭と顎髭に覆われ、その先は胸の前まで到達している。年齢百歳の老人と言われても、信じてしまっただろう。

頭髮はすべて白髪で、肩を覆うほどの長髪だ。丁寧に梳かれて艶めいており、ランプの光を照り返して橙色に染まっている。頭には王冠の代わりとも言える黄金の輪っかを載せ、その中央に嵌め込まれた緑色の大きな宝石は神秘的な輝きを放っている。

どう見ても長老様だ。でも全体的な雰囲気は魔法学校の校長先生みたいで、いかにも魔法使いですって印象を受ける。

「は…… 身に余るお言葉」

ヘルメスさんがまた深々と頭を下げる。すると皇王様は視線を私に移す。私は目が合うとドキッとして、心臓が止まってしまうかと

思った。

皇王様の目は深い蒼で、シュナイダーさんが年を取ったらあんな感じになるのかなって思った。優しく、それでいて吸い込まれそうに奥深い。知性と慈愛を兼ね備えた思慮深げなその瞳を見た時、私は無条件でこの人の言うことはすべて真実なんだという根拠のない確信を得た。

「そなたは…… 何ということだ！」

皇王様の声が震えている。私は何か不法なことでもしてしまったのかと思って、慌てて自分の服装や姿勢を確認する。

「おお……」

皇王様は立ち上がり、一歩踏み出す。先の尖って少し上を向いた固そうな靴が、硬質な音を立てる。

「王！」

秘書みたいなローブの人が、慌てて皇王様に近寄る。皇王様は震える両手を中途半端に持ち上げたまま、私を凝視し続けている。蒼い瞳は驚愕と畏怖に揺らめいている。

「そなたは紛れもなく勇者…… そしてこの世界を救う救世主じゃ！」

「え、えええっ？」

私は驚いて立ち上がってしまう。ヘルメスさんはそんな私の不法を咎めるでもなく、呆然とした顔で皇王様から視線を離せないでいる。

「父上！」

奥のドアからシュナイダーさんがやって来る。謁見室の様子がおかしいことに気づいたんだろう。

シュナイダーさんは台座を数歩で駆け上り、皇王様をゆつくりと椅子に座らせる。

「あ、あの娘の名は何と言う」

「父上、彼女はノアです」

シュナイダーさんは傍らで皇王様を落ち着かせながら静かに答える。

「バルドウィーン、水を」

「ははっ！」

先ほどの秘書の人に、シュナイダーさんは短く言いつける。あのロープの秘書の人はバルドウィーンっていうらしい。バルドウィーンさんは慌てた様子で階段を下り、シュナイダーさんの出てきたのとは反対側の奥のドアから出て行く。

「シュナイダー、人払いを」

皇王様はだいぶ落ち着いたのか、先ほどと同じ静かで深みのある口調でそう告げた。シュナイダーさんは頷いて壁際にいる何人かのロープを着た文官らしき人たちと、台座の下で羽ペンを動かしていた書記らしき人に小さく目で頷く。彼らはそれで理解したようで、機敏な動きでバルドウィーンさんの出て行ったのと同じドアから出て行く。

後に残されたのは皇王様とシュナイダーさん、呆然としているヘルメスさんと私だけになってしまった。広い大広間は静寂に閉ざされる。するとバルドウィーンさんがドアを開けて、ガラスのコップと水差しの載った木製のトレイを持って入ってくる。

「ご苦労、卿も下がってよい」

「は、あ？ し、しかし」

「王の命令だ」

「あ、は、はい……」

バルドウィーンさんは額に汗しながら一礼する。振り向く瞬間、私はバルドウィーンさんに鋭い視線で睨まれた気がした。

第16話

バルドウィーンさんがドアを閉めた音の残響が消えるまで、その場は静寂に支配されていた。私は別に悪いことをしたわけじゃないのに、何だかいたたまれない気持ちになった。

私が救世主？ 以前シュナイダーさんにそう言われたことがあったのを思い出す。あの時はシュナイダーさんの勘みたいなものだったけど、特別な力を持っている皇王様に言われると急に現実味を帯び、全身が圧迫されるような緊張感に包まれる。

「父上、いきなりどうされたのですか？」

シュナイダーさんの静かな声がして、私は息を吞んで皇王様を見つめる。皇王様は大きく息を吐いて、疲れたように背もたれに体を預ける。

「シュナイダー、それにヘルメス。永きに渡るこの辛い戦いの歴史に、漸く終止符の打たれる時がきたようじゃ」

「僭越ながら申し上げます」

金縛りが解けたように、ヘルメスさんが口を開く。少し声が掠れているのは緊張のせいかな驚きのせいだろうか。

「ノアさんが救世主とは、一体どういうことなのでしょうか」

「その娘は強い。とてつもなくな」

「強い？」

シュナイダーさんが眉を顰めて私を見る。横顔にもヘルメスさんの視線を感じる。二人の不審はよくわかる。だって私の攻撃力はた

った七。防御力はチートだけど、魔力は皆無。この数値から考えれば、私は負けないけど勝てないというキャラだ。それはそれで囷とか盾とか使いようはあるかもしれないけど、勇者とか救世主とかってほどのキャラじゃない。

「今後戦いは混迷を極めるじやろう。しかしシュナイダーにヘルメス。その娘に何があるうとも信じるのじゃ。そなたたちがその娘を信じる限り、この戦いの迷宮からは必ず逃れることができる」

皇王様の言葉は神秘的で漠然としていて、私にはまったく理解できない。それはシュナイダーさんとヘルメスさんも同じのようで、眉を顰めたまま皇王様を見つめている。

でも私は皇王様の言葉を聞くと胸がドキドキする。何かものすごく大事なことを聞いているような、絶対忘れちゃいけないことを言われているようなそんな気持ちになる。

「父上、戦いの迷宮とは」

シュナイダーさんの声が唐突に途切れる。激しい耳鳴りがして、私は両手をこめかみにあてる。シュナイダーさんの口はまだ動いている。つまりまだ何かしゃべってるんだ。

でも私には聞こえない。耳鳴りに続いて動悸が激しくなってくる。

「
」

ヘルメスさんが心配そうな顔を私に向けている。口の形で私の名前を呼んでいるのはわかるけど、耳鳴りで何も聞こえない。

「あ……わ……」

私は声を出そうとするけど、喉が麻痺したようになって息が吸えなくなる。

苦しい…… 何したの？ 私いったいどうしちゃったの？

ヘルメスさんの姿が滲みながら霞んでいく。

ああ、私涙を流してるんだ。

私は金魚みたいに口をパクパクさせながら、遠ざかるヘルメスさんのぼやけた姿に手を伸ばす。

遠ざかる？

そこで気づいた。

私は今、宙に浮かんでいるんだ。

全身が雷に打たれたように痙攣する。

手足がちぎれそうなくらい引き延ばされる。

無音の嵐が大広間を席卷し、無数の稲光が私の体から周囲に放出されている。

体中の関節が悲鳴を上げ、心臓は胸を突き破って飛び出してくるんじゃないかってくらい激しく胸骨を内側から叩いている。

次の瞬間、すべての光が黒に変色する。

黒に閉ざされているのに“黒い”ってわかる。

そんな不思議な感覚。

私は空中に浮いたまま、黒い球体に包み込まれていた。

ああ、私はここで死んじゃうのかな……

そう思った時、黒い光のベールを通して雷光が目の前的一点に集中するのが見えた。

雷光は何度も何度も交錯し、激しくスパークする。

連続してフラッシュする光の交点に、黒い点が残る。

空中の一点に発生した黒点は徐々に大きく育っていき、不定形の靄に成長する。

そこでいきなり、私の全身を縛り付けていた呪縛が解けた。私は数メートル上空から床に落ち、全身を強く打ち付けた。

「きゃっ！」

バチバチッという放電するような大きな音がして、私は音が戻って来たことに気づく。

体中の痛みを喘ぎながら身を起すと、空中に広がった靄が何かを形作り始めていた。

「ヘルメスさん！ シュナイダーさん！」

私は激しく明滅する光の中、二人の名前を大声で呼ぶ。壁や天井にフラッシュバックされた影で、シュナイダーさんと皇王様はまだ台座の上にいることがわかった。でもあまりにも激しい音と光のために、ヘルメスさんの姿は見つけられない。

シュナイダーさんと皇王様は、驚愕の表情で空中の一点を見つめている。

そこには黒い靄が炎のように揺らめきながら人型を作っていた。闇をそのまま凝固させたような真っ黒なその姿は、大きなマントをつけた人間のように見える。

その人型の影はマントを大きく広げ、全身から黒い靄を煙のように幾筋も立ち上らせている。

輪郭も臃気なその頭部付近に、禍々しい赤い光が二つ点る。

その瞬間、謁見室の大広間に強風が吹き荒れた。

「きゃあああっ！」

私は横の壁際まで吹き飛ばされ、背中と頭を激しくぶつける。

頭の中でぐわんぐわんと吹き荒れる音の嵐の中に、シュナイダーさんの絶叫が割り込んでくる。

「父上！」

涙で霞む目に力を込め、両手で頭を押さえながら焦点を定める。
そこには驚愕の光景が広がっていた。

黒い人型の影からまっすぐと黒い光が伸び、皇王様の胸を後ろの
背もたれごと突き刺している。

その時、私の耳には確かに聞こえた。

皇王様は、苦しげな声でこう呟いた。

「魔王」と。

第17話

「貴様！」

シュナイダーさんが剣を抜く。そして皇王様を刺し貫いている黒い光に沿って大きく跳躍する。銀光がきらめいて黒い影に向かって振り下ろされる。

けれど次の瞬間、シュナイダーさんは後方へ強烈な力で弾き飛ばされていた。

「ぐあっ！」

鎧を身に着けていなかったら全身打撲で重傷を負っていただろう。それほど強烈な力だった。

「お前はまだ生かしておいてやる。この国を滅亡させるのには必要な人間だからな」

頭の中を瞬間冷却されたかのような痛みが走る。それが空中の黒い人型から発せられた声によるものとは、すぐには理解できなかった。それはそれほど冷然酷薄とした声だった。

私は全身の痛みと酷い頭痛で声を出すこともできない。豪奢な金髪が俯いた顔を隠し、シュナイダーさんは壁をずり落ちていく。

影の頭が微かに動いて、赤い双眸が皇王様に向けられる。その下に半月型の白く鋭い切れ込みが横に伸びる。影が笑っているんだ。

「ぬおおおおおっ！」

影の向こうに、さらに大きな人影が現れる。瞬間的に銀光がきら

めいたかと思うと、皇王様の胸に伸びていた黒い光が破碎される。黒い光はそれで霧散してしまった。

「ヘルメスさん！」

私は喉の奥から漸く掠れた声を絞り出す。黒い影は信じられない速度で入り口の方まで飛んで逃げる。ヘルメスさんは巨大なクレイモアを横薙ぎに払ったけど、すでにそこに影はなかった。

さつきヘルメスさんがいなかったのは、入り口の衛兵さんのところへクレイモアを取り戻しに行ってたからなんだ！

「うおおおおっ！」

獣のような咆吼を発し、ヘルメスさんは黒い影へ走る。大きな体からは想像もつかない速さで、ヘルメスさんはものの数歩で黒い影へ間合いを詰めてしまう。

黒い影は少しずつその輪郭を固めている。翻る黒いマントの上に、星空を溶かしたような銀色の光が幾筋も流れる。その光は頭部から流れ出ていて、まるで長い銀色の髪が生えているように見えた。

「おおおおおっ！」

大きく跳躍したヘルメスさんがクレイモアを縦に振る。私には銀色の光が流れ星のように斜めに走ったようにしか見えなかったけど、黒い影はその斬撃をも軽々とかわす。

入り口の重々しい両開きのドアが弾け飛ぶように開き、黒い影は滑らかな動きでテラスへと出て行く。ヘルメスさんも後を追う。

そこから見えるテーベの夜景は、一面の炎に禍々しく彩られていた。

「ど、どういうこと？」

私は壁に手をついて立ち上がる。振動でさらに頭痛が酷くなるけど、そんなことを言ってる場合じゃない。震える膝と痛む背中に顔を顰めながら、私は一步一步揺らめく赤い炎を背景にしたテラスへ歩いていく。

街は各所で炎を上げ、人々の逃げ惑う悲鳴がここまで聞こえてきていた。

「ま、街が……」

手すりにもたれかかると、熱風に髪を吹き上げられる。頬がちりちりと痛い。悲鳴と金属を打ち鳴らす不穏な音がして下を見る。前庭ではモンスターと兵士たちが戦いを繰り広げていた。

「な、なんてこと…… いったい……」

「ノアさん！」

黒い影を追って出て行つたヘルメスさんが、階段のある方から顔中に汗だくになって走ってくる。よかった、無事だったみたいだ。見たところヘルメスさんにケガはないようだ。

「ヘルメスさん、さっきのは……」

「取り逃がしました…… 恐ろしく素早いヤツで、私の攻撃がかすりもしませんでした。それより皇王様と殿下は？」

「お、奥に……」

私は振り返って中を指さす。広い謁見室の中で荒れ狂っていた光と風の大嵐は収まり、椅子や机の破片が床に散らばっている。

「王！ 殿下！」

ヘルメスさんは巨大な剣を片手で持ったまま、あっという間に台座まで走っていく。私も少しすっかり歩けるようになったので、シワの寄った赤い絨毯の上をふらつきながらも早足で歩いていく。

ヘルメスさんは二、三步で台座を駆け上がり、皇王様の元に辿り着いた。

「王！ クレセニア皇王！」

ヘルメスさんは汗びっしょりの顔で何度も皇王様に呼び掛けている。しかし私の目から見ても、皇王様がお亡くなりになっているのは明らかだった。

蟻のように白い肌に生氣はなく、胸からの出血はすでに止まっている。緋色のローブは黒々とした血で重く湿っていて、豪華な椅子の下には血だまりができています。段差にはそこから細く赤い血が小さな流れを作って滴っている。

「く…… で、殿下！」

ヘルメスさんは奥の壁に背を預けて気を失っているシュナイダーさんの元へ飛び降りる。頭を打っているので不用意には動かさないようだけど、ヘルメスさんが何度か呼びかけるとシュナイダーさんは呻きながらも少し頭を動かす。

「殿下、ご無事でしたか！」

「へ、ヘルメス、父上は……」

シュナイダーさんは苦痛に顔を歪めながらも、ヘルメスさんを見上げる。そして焦点の定まらない目で周囲を探る。

「お亡くなりになりました。街はモンスターに襲われて混乱しております。只今、衛兵たちが抗戦しております」

「そ、そうか……」

シュナイダーさんは立ち上がろうとするが、苦しそうに呻いてまた尻餅をついてしまう。見た目より体の内部は深いダメージを負っているのかもしれない。

「こ、皇王様！」

台座の向こうからバルドウィーンさんの声がした。私は何となく苦手意識を感じて、ヘルメスさんの陰に隠れるように身を寄せてしまう。

「秘書官どの、王は魔王に殺された。街はモンスターに襲われている。私は援護に向かう。王と殿下を頼む」

「む、わ、わかった。しかしなぜこのような……」

その時テラスの方から獰猛な唸り声が聞こえる。はっとして振り返ると体長三メートルはありそうな巨大な虎が、長い牙から血を滴らせて現れるところだった。

上あごの犬歯が異様に長く、真下に向かって二本突き出ている。

私はゲームの知識で知っていた。あれは“サーベルタイガー”。かなり強い猛獣系のモンスターだ。

「くそっ、まさかこんなところまで入り込まれているとは！」

ヘルメスさんはクレイモアを両手で握って立ち上がる。その時私は、はっと気づく。

「へ、ヘルメスさん、リーネちゃんか！」

「わかっています。まずはあいつらを倒してここから出ないと」

巨大なサーベルタイガーの後ろから、鈍色に光る剣を携えたオウクの集団が雄叫びを上げながら次々と謁見室になだれ込んできた。

第18話

「うおおおおっ!」

ヘルメスさんは叫び声を上げながら、オークの集団へ突っ込む。見た感じその数は十体以上はいる。いくらヘルメスさんが強くたって、あれだけの数に囲まれたらやられてしまうんじゃない……でもそんな心配はまったくいらなかった。

ヘルメスさんのクレイモアの一振りで、先頭の二体の首が飛ぶ。残りのオークが躊躇して動きが鈍った隙に、ヘルメスさんは右に素早く移動して壁を背にして斬りかかる。

複数を相手にする時は、囲まれるのが一番怖い。シミュレーションバトルでよくわかっていた。その考え方は合戦形式じゃなくても通用する。

複数の部隊を相手にする時は、こっちの戦闘力がいくら高くても意識して一対一の状況を作り出すのが戦闘の鉄則だ。

ヘルメスさんは壁を背にすることで、背後を守って正面の敵にだけ集中できるようにした。それは一度に複数を相手にする危険性を回避して、集団を端から一対一で倒していく戦術に他ならない。

さっき見せたように、ただでさえヘルメスさんの攻撃力はかなり強い。

十数体のオークが全滅するまで、ものの一分もかからなかった。まさに鬼のような強さだ。

最後の一体が断末魔の悲鳴を上げて床に倒れ伏すと、ヘルメスさんは返り血を浴びた憤怒の形相でサーベルタイガーを睨みつける。

サーベルタイガーはヘルメスさんがオークたちと戦っている間、虎視眈々と攻撃する隙を狙っていた。でもヘルメスさんに隙はなく、結局一対一にさせられた。

サーベルタイガーは頭を低く下げ、跳躍の姿勢を取る。サーベル

タイガーは間違いなく車二台分はある重さだ。いくらヘルメスさんが屈強な戦士だからって、そんな巨体になんか耐えられないだろう。

サーベルタイガーは低く唸って威嚇する。ヘルメスさんはクレイモアを引いて、サーベルタイガーに対して半身になる。幅広のクレイモアを顔の横で床に対して水平に保ち、切っ先をサーベルタイガーに固定する。入り口から外の光が差し込んで、ヘルメスさんの影が長く伸びている。まるで彫像のように佇むヘルメスさんのその姿は、古代の剣闘士のようなものだ。

サーベルタイガーが跳躍する。巨大な質量がヘルメスさんに頭上から襲いかかる。

「むん！」

銀光が美しい真円を描く。次の瞬間サーベルタイガーの首が落ち、胴体はヘルメスさんの向こう側へ重々しい音を立てて落下した。

「おおつ、さすが“豪腕のヘルメス”！ 巨大なモンスターを一撃とは！」

呆然と立つ私の後ろで、バルドウィーンさんがシュナイダーさんに肩を貸しながら喜色満面で叫んでいる。

「ヘルメスさん！」

私は真つ赤な炎の光に照らされて佇むヘルメスさんへ向かって走り出す。もう足腰はしっかりと回復していた。頭痛もない。オークたちとサーベルタイガーの喧せ返るような血臭で気持ち悪くなったけど、そんなこと言ってる場合じゃない！

「ノアさん、リーネを頼みます。私は城内に入り込んだモンスターどもを倒して、村人たちを助けに行かなければならない」

「わ、わかりました！」

「リーネを見つけたらどこかに隠れていてください。後で必ず助けに行きます」

「はい！」

混乱と死の饗宴の中、私はヘルメスさんの後について走り出す。

来る時はヘルメスさんについて来ただけだからよくわからなかった。でも途中までヘルメスさんが先導してくれたから、何とか一階のエントランスまでは迷わず辿り着けた。

途中何度かオークが襲いかかってきたけど、ヘルメスさんの敵ではなかった。

「では私はここで、くれぐれもリーネを頼みます」

「はい！」

私が駆け出そうとすると、ヘルメスさんが呼び止める。私が振り返るとヘルメスさんは無骨な顔に苦渋の表情を浮かべ、何か言いたそうにしている。

私はリーネちゃんが気がかりで焦ってしまふ。ヘルメスさんは小さくため息をついて微笑む。

「私も殿下も、あなたを信じていますから」

「え？」

ヘルメスさんはそのまま前庭へ出て行ってしまう。ヘルメスさんの微笑みは、どことなく悲しそうだった。

ヘルメスさんの言葉は気になったけど、今はとにかくリーネちゃ

んと合流するのが先だ。私はメイドさんやローブを着たおじさんたちとすれ違った長い廊下をひた走る。当然だけど誰もいない。

窓からは炎の赤い光が差し込んで、赤や黄色の光がゆらゆらと揺れている。漸くリーネちゃんがいるはずの部屋の前へ辿り着く。ドアは固く閉ざされ、中からは何の物音も聞こえない。

「リーネちゃん！」

私はドアを激しく叩く。鍵が掛かっていると思っていたドアは、その衝撃で簡単に内側へ開く。

「開いてる？ リーネちゃん！」

ドアを勢いよく押しのけて中に飛び込む。部屋の中はランプの光が消えて真っ暗だ。窓から差し込む炎の光で、かろうじて見通せる程度だ。

「リーネちゃん！」

「ノアちゃん！」

横のクローゼットの扉が勢いよく開き、中からリーネちゃんが飛び出して来る。よかった！ 無事だった！

その時庭に面したテラスへ抜ける大きな窓ガラスが割れ、オークが二体飛び込んでくる。

「きゃああつ！」

オークの一体が雄叫びを上げて目の前のリーネちゃんに斬りかかる。もう一体は私に向かって剣を振り上げて飛びかかってくる。

その時私の頭には、自分が死ぬかもという恐怖はなかった。

ただただ、リーネちゃんを守らなきゃという思いだけだった。
頭の中にキーンという高音が響き、私は咄嗟にリーネちゃんに飛
びつく。

私は斬られる痛みを目をつぶる。
しかしその痛みはやって来なかった。

「あれ？」

リーネちゃんは私の腕の中で震えている。

不審に思って振り返ると、二体のオークは半ばから折れた剣を見
て呆然としていた。

廊下からオークたちの叫び声が近づいてくる。

「リーネちゃん逃げよう！」

私はリーネちゃんの手を引いて、破られた窓から外へ逃げた。

第19話

「ノアちゃん、父さまは？」

「ヘルメスさんはお城のモンスターと戦ってる。村の人たちを助けに行くって」

「よかった、無事なんだね」

私たちは壁に沿ってお城の裏手へと向かっていた。

前庭はモンスターと衛兵さんたちが戦って危険過ぎる。でもお城の裏手の方は火も回ってなくて静かだ。

石造りの庇が大きく張り出した石畳を、私はリーネちゃんの手を引いて走る。等間隔に並んだ丸い柱の影が、横断歩道のようになっている。

「ねえノアちゃん、さっきはどうしてうちら助かったの？」

リーネちゃんはだいぶ落ち着いたみたいだ。ポルタ村でモンスターに何度も襲われた経験があるからか、こういう状況には耐性があるのかもしれない。

それにしてもあの状況からどうして助かったのか、私にもよくわからない。なぜオークの剣は折れていたんだろう。あの部屋には私たちしかいなかった。誰かに助けてもらったって感じでもない。

「どうしてなんだろうね。私にもわか」

唐突にリーネちゃんの手が離れる。正確に言えば私が放した。気がついたら私は、お城の壁に埋まっていたからだ。

「きゃああつ！ ノアちゃん！」

リーネちゃんの悲鳴が聞こえる。私は石の破片をぼろぼろと落しながら壁の穴から出る。目の前には一つ目の巨人が立っていた。

「あ、あれ？ おめえなんでい、生きてんだ？」

“サイクロプス”…… かなり後半にならないと出てこない強力なモンスターだ。身長は五メートル近くある。

サイクロプスは青白い体に炎の赤い照り返しを受けて、石畳の横の芝生の上に立っていた。腰に布を巻いただけの裸身は盛り上がる筋肉ではち切れそうだ。額には白い三角錐の角。手には巨大なハンマー。おそらく私はさっきあれで殴り飛ばされたんだろう。

「ノ、ノアちゃん大丈夫なの？」

「え？ う、うん…… なんで？」

「うちに聞かれても！」

「ふんがあー！」

突然庇が轟音を立てて破壊される。サイクロプスがハンマーを振り下ろしたのだ。

「リーネちゃん、下がってて！」

私は咄嗟に両腕をクロスさせて頭をかばう。大量の瓦礫が私に降り注ぐ。けれど私には何の衝撃も感じられない。私は自分の周りに積み上がった瓦礫の山を、不思議な思いで見つめていた。

「お、おめえ何者だ！」

サイクロプスは再度ハンマーを振り上げる。強烈なパワーで振り

回されるハンマーは、見て避けられる速さじゃない。でも何となく私には恐怖は感じられなかった。

サイクロプスは私の頭へ、唸りを上げてハンマーを振り下ろす。私はそのまま何もせず、そこに立っていた。

「ノアちゃん！」

リーネちゃんの悲痛な叫びに、重い石でできたハンマーが砕け散る音が重なる。私の頭の上では、自分の身体より大きなハンマーが粉々に砕け散っていた。

「うおっ、おおおっ！」

サイクロプスは手が痺れたのか、持ち手だけになったハンマーを取り落とす。

「え？」

涙目になったリーネちゃんが呆然としている。私は確信した。やっぱり私は防御力では最強なんだって。

「な、なんだおめえ、バ、バケモンか？」

一つ目の巨人モンスターに言われたくない。でも相手はビビッてる。チャンスだ！

「えええい！」

私は瓦礫を乗り越えて、怯えながら後ずさるサイクロプスに向かって走り出す。今が攻撃のチャンスなんだ。

「ひ、ひえええっ！」

サイクロプスは情けない声を上げて逃げだそうとする。私はその足を渾身の力で殴りつけた。

ぺち。

「え？」

「ひ、ひええええっ！ こ、殺される！」

サイクロプスは頭を抱えて逃げ出してしまふ。私は芝生の上に立ち尽くして、自分の握り拳を呆然と見つめていた。

ぺちって…… ペちってなによぉ！

忘れてた。私の攻撃力はたった七。スライムだって倒せない。防御力は最強でも、攻撃力は最弱なんだ。

「ノアちゃんすごい！」

リーネちゃんが走って来る。

「あんなすごいモンスターを追い返しちゃった！ 一体どうやったの？」

「わ、私……」

「いたぞぉ！」

後ろからオークの集団が走って来る。

「きゃあぁっ！」

「リーネちゃん、あっちへ走って！」

私はリーネちゃんをお城の裏手へ押しやる。

「え、でもノアちゃんは？」

「私はあいつらを引きつける。リーネちゃんは先に逃げて！」

「でも、でもノアちゃん死んじゃうよ！」

「大丈夫」

私は確信していた。

「私は死なないから」

「うおおおっ！」

オークたちが勢いに任せて剣を振り下ろしたり突き刺したりしてくる。

私は両手を広げて、走り去るリーネちゃんをかばうように立ちふさがる。

私の全身に攻撃が降り注ぐ。けれど何の痛みもない。勢い余ってぶつかってきたオークは、私に突っかってひっくり返る。

数本の剣が折れて転がり、折れなかった剣を持ったオークは何度も私を斬りつける。私は何もしないでその場に立っているだけだ。

「な、なんだ、こいつ！」

「めっちゃくちゃ固えぞ！」

「それに石みてえに動かねえ！」

剣を失ったオークは殴ったり蹴ったりしてくるけど、私には何のダメージもない。すると一体のオークが諦めたようにお城の裏手を指さす。

「ええい、こいつは無視しろ！ あつちの逃げた子どもを追え！」

私ははっとして振り返る。リーネちゃんの足ではすぐに追いつかれてしまう。もしかしたら私をどこかで待ってるかもしれないし。

「へへっ、殺してやる！」

獰猛な笑みを見せて、オークが舌なめずりをする。

私はリーネちゃんが殺されると思ったその時、生まれて初めてと言つていくらいの激しい怒りを覚えた。

刺された皇王様。傷ついたシュナイダーさん。齒を食いしばって私にリーネちゃんを任せてくれたヘルメスさん。

燃え上がる炎が私の瞳に映り、たくさんの人たちの悲鳴が聞こえる。

どうしてこんなことになっちゃったの？

どうしてこいつらは人間を殺そうとするの？

どうしてそんな簡単に命を奪おうとするの？

私の中に言いようのない怒りが渦巻き、それが奔流となって体中から放出された。

「そんなことさせない！」

その瞬間、私の目には信じられない光景が飛び込んできた。

私を中心としてオレンジ色の光のドームが急速に広がっていく。

オークたちはその光に触れると、見る間に泡となって消滅していく。

私はこの光を見たことがある。

テーベに入る時……

私は“絶対領域”を作り出していた。

第20話

「ぎゃああつ！」

黒板に書かれた文字が黒板消しで消されていくように、オークたちはあつという間に消えていく。私はその様子を見無感動に呆然と眺めていた。

「きやあつ！」

静けさが戻ると、裏手の方から低い爆発音とリーネちゃんの悲鳴が聞こえた。はつと我に返ると、絶対領域は消えてしまった。

「リーネちゃん！」

私はお城の裏手へ走り出す。

さつきのは間違いなく絶対領域だった。テーベに入る時に感じた、母親の胎内に浮かんでいるようなあの感覚に間違いはない。

でも私の魔力は「-」。元賢者の皇王様が作るのに数ヶ月掛かるほどの絶対領域を、私がそんな簡単に作り出せるはずがない。

建物の角を曲がってお城の裏手へ回る。そこは少し広めの通路のようになっていた。

建物のある左側は石畳になっていて、建物の影で薄暗がりになっている。右側は石塀がまっすぐと果てしなく伸びていて、その向こう側には裏庭の外灯がぼうつと白く光っている。きつとこの塀はお城の裏門まで続いているのだろう。

塀の下の地面は芝生になっていて、左半分が石畳で右半分が芝生といった感じだ。

リーネちゃんは十メートルほど先の石畳の上に、俯せになって倒

れていた。

「リーネちゃん！」

私は走り出す。最悪の予想が頭をよぎり、膝から力が抜けてしまいそうになる。もしリーネちゃんが死んでしまったら、私はどうなっちゃうんだろう。

「リーネちゃん！」

生足の膝が石畳に擦れて少し痛かったけど、私は構わず膝をついてリーネちゃんの顔を覗き込む。

「ん……」

リーネちゃんは眉を顰めて頭を動かす。よかった、生きてる！よく見るとリーネちゃんの倒れている少し先の石に、黒いシミが広がっている。

それは焦げた跡のように見える。
さっきの低い爆発音は、きっとこれだろう。

「なんだ、子どもがもう一人逃げてきたぞ？」

妙に耳障りな高い声が、少し先の空中から聞こえた。
はっとして振り返ると、そこには真っ黒なローブを着た人間が空中に浮かんで裾をはためかせていた。

「な、なに？」

私はその声から受ける不快な感触に気持ち悪くなってしまう。す

るとリーネちゃんがすぐ横で動く気配がした。

「ノ、ノアちゃん、逃げて…… ま、魔導師だよ……」

どうやらリーネちゃんは魔導師の攻撃を足下に受けて吹き飛ばされたようだ。直接受けてたら、きっと即死していただろう。

リーネちゃんは意外と俊敏だ。少なくとも私よりは身体能力は高い。だから咄嗟に避けて直撃を避けたのだろう。

「リーネちゃんは壁際に下がって。私が守ってあげる」

「え？ む、無理だよ！ 相手は魔導師だよ？ しかも空を飛べるって、かなりレベルの高い魔法を使えるってことだよ！ ノアちゃん、魔法使えないんでしょ？」

「大丈夫。私には絶対領域があるから」

「え？」

私は魔導師を見上げてきつと睨む。ローブで顔はよく見えないけど、大きく白い鉤鼻が見える。

「テーベ攻略部隊を指揮しているのがワタシだとわかってここに来たのかどうかはわからないけど、見られてしまったからには殺すしかないねえ」

魔導師は身の毛もよだつような奇怪な声を断続的に発する。それが笑い声だと私が気づくのに、数秒間を要した。

「指揮？ じゃあ、あなたが皇王様を殺したの？」

「ひえ？」

息を吸いながら魔導師は笑うのをやめる。ローブの奥から紫色の

怪しい二つの光が漏れ出す。

そう言いながらも、私は違和感を覚えていた。謁見室で聞いた声とは違う。あの声はもっと恐ろしくて冷たかった。

「どうしてお前のような子どもが皇王暗殺を知っている？ まだほとんどの人間が知らないというのに」

「私は目の前で見たわ！ 黒い影が皇王様の胸を黒い光で差し貫くのを！」

「お前は魔王様を見たのかい？」

しわだらけの白い顔がローブの中から出てくる。それは醜悪な顔をした老魔女だった。

「そうかい、そうかい。魔王様を見ちまったんなら、間違いなく殺さないといけないねえ。魔王様の姿を見た人間は、死ななきゃいけないのさ！」

空中に突然稲光が走る。私は咄嗟に横に転がって避け、柔らかな芝生の上で身を起こす。

「ノアちゃん！」

リーネちゃんはちゃんと壁際に下がってる。あの位置なら私が絶対領域を出しても大丈夫。私は魔導師を睨みつけ、心の中の怒りを開放する。

「なに？」

魔導師が仰け反って怯えの色を見せる。私は直径五メートルほどの、オレンジ色の光のドームの中にいた。

「お、お前はまだ子どもなのに絶対領域を作り出せるのかい？」

魔導師はしわだらけの細い手を前に突き出し、私を恐れているかのように顔を背ける。絶対領域のオレンジ色の光が、魔導師の全身をはつきりと照らし出している。

「そう、あんたを消してやる！」

「ワタシを消す？」

魔導師は口を尖らせて醜惡な笑みを浮かべる。怯えの色はもうない。

「何か勘違いしてやしないかい？ 絶対領域は確かに攻撃を防ぎはするし、触れた者を消滅させる。敵の侵入や“物理攻撃”から身を守るには最強の結界さ。でも攻撃魔法は防げないって、知らないのかい？」

「え？」

魔導師はしわだらけの右手を高々と上げ、異様に長い人差し指を夜空へ真っ直ぐと突き立てる。

「ワタシの雷撃で、真っ黒焦げに殺してやるさね！」

魔導師が右手を振り下ろした瞬間、私は強烈な落雷に打たれていた。

第21話

「ノアちゃん！」

リーネちゃんの悲痛な叫びが轟音に紛れて消えていく。絶対領域はすでに消えてしまっている。私は雷に打たれながらも、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「ひえっへへへ！ 真っ黒焦げになって死ぬがいい！」

魔導師は奇怪な笑い声を上げて、さらに野太い雷光を私に落とす。白と黒の明滅する世界を、私は不思議な気持ちで眺めていた。

ええっと、私は今雷に打たれてるんだよね？ 普通「ぎゃあ」とか言って黒焦げになって死ななきゃなんないよね？ 普通そうだよね？

「ノ、ノアちゃん？」

私は戦慄きながら声を震わすリーネちゃんに、首だけを回して微笑む。

「なんか大丈夫みたい」

「え？」

リーネちゃんが涙目のまま、口元を覆っていた両手を下ろす。

「な、なんだと？ ワタシの雷撃を受けてなんともないだとか？」

魔導師は驚愕に目を見開き、両手の指先を震わせる。

「魔力吸収」……」

リーネちゃんの呆然とした呟きで、私は自分の能力を新たに自覚する。

私は魔力がないんじゃないかって、必要がなかったんだ。相手の魔法を吸収して、無効化させてしまうんだ。なんてチートなキャラなんだろう。

「ええい、これではどうだ！」

魔導師は震える両手を突き出して、手のひらから炎を放出させる。それはリーネちゃんの見せてくれた火の魔法の、何百倍もの規模だった。でも……

「あ、なんかあったかい」

私は猛烈な炎を浴びながら、胸の中心がほんのり温くなるのを感じた。これが吸収した魔力なんだね。

胸を両手で押さえて祈るように俯く私に、魔導師は目に見えて焦り始める。

「ええい、“デス”！ “ブリザード”！ “ポイズン”！」

魔導師は黒い煙とか氷の竜巻とか緑色のガスとかを、私に立て続けに浴びせかけてくる。でもそれらはすべて私の中へ吸い込まれ、その度に胸の中心の熱が高まってくる。

「ワ、ワタシがこんな子どもに！ 最高位の魔導師にして、魔王軍の指揮官たるこのマレリイ様が！」

後でわかったことだけこのマレリイという魔導師は、この時点で確かにほぼ最高レベルにあったらしい。使えない攻撃魔法はほとんどなく、数百人規模の皇王軍でさえ彼女一人には敵わないという。それほど圧倒的な力を持つ魔導師だったみたい。

でもそのすべてが私には効かない。それが深い知識と経験のある彼女の魔導師としてのプライドを、根底から突き崩してしまっていた。

「そ、そうだ、これなら！」

マレリイは私の頭上に巨大な“氷柱”を作り出す。それは氷柱とは言えないほど巨大で、てっぺんは暗がりに溶け込んで見えないほど高い。太さも直径二メートル近くあって、私はトラック何台分くらいの重さなんだろうなどと暢気なことを考えてしまっていた。

「跡形もなく潰してくれる！」

両眼から紫色の光を燃え立たせながら、マレリイは両腕を勢いよく下ろす。巨大な氷柱は猛烈なスピードと重量で、私の頭の上に落ちてきた。

「わわわわわ……」

視界が小刻みに揺れる。同時に私の周囲には、かき氷みたいに白い雪が積もっていく。

巨大な氷柱は私を押し潰すことも刺し貫くこともなく、大量の細かい氷となってすべて粉微塵になってしまった。

「バ、バカな……」

マレリイは空中を後ろへゆっくりと下がっていく。

「あ、ま、待ちなさ……は」

ザクザクと氷の山に踏み出した私は、急に冷えた周囲の空気に鼻がむずむずする。胸の中心の熱は、すでに張り裂けそうなくらい熱くなっていた。

「はくちゅ！」

思わずくしゃみをしてしまう。同時に私の全身から膨大な量の“何か”が放出された。

「ぎゃあああああつ！」

それは何百本もの稲妻だった。触手のように無数の細い光を周囲に放出しながら、私の体と空中のマレリイは太い稲妻でつながっていた。

さらに私の体の前面から、ドラゴンブレスのように炎が勢いよく轟音を立てて噴出する。私の体はその反動で、少し後ろに押されてしまう。体の中から力を抜き取られるような感覚で、どうしても力の奔流を止めることができない。なぜだか私のぼうつとした頭の中には、献血した時のふわふわした感覚が思い出されていた。

力の奔流は出た時と同じく唐突に収まる。急に静けさを取り戻したお城の裏手には、遠くの悲鳴や剣戟の音が小さく聞こえていた。

「かか…… かかか……」

少し先の芝生の上に、真っ黒なボロ切れが蠢いている。それがマ

レリイの成れの果てだと気づくのに、私は十数秒を有してしまった。

「ノアちゃん！」

リーネちゃんが勢いよく抱きついてくる。私は全身虚脱状態だったので、そのままリーネちゃんに、芝生の上に押し倒されて頼ずりされてしまう。

「すごい、すごいよ！ 魔力吸収だけでもすごいのに、それを“増幅返還”するなんて大魔法使い様みたい！ ってかノアちゃん大魔法使い？」

「ち、違う違う！」

興奮して紅潮したリーネちゃんの大きな瞳の中に、たくさんの星がきらきらしてる。私自身まだよく自分のことを理解していないんだから、説明なんてできるわけがない。さっきだつてくしゃみしただけだし。

「かか…… ま、魔王様ふ、不覚を取りました…… す、すみませぬ……」

蠢くマレリイに、私とリーネちゃんは真剣な顔で立ち上がる。

「ノアちゃん、皇王様がお亡くなりになったって、ほんと？」

私は真剣な顔で頷く。

「だったらあいつは絶対に許せない！」

リーネちゃんは小さな肩を怒らせて、芝生をどんと踏みつける。

「ま、魔王軍よ！ しゅ、集結せよ！ ま、魔王様あ！」

マレリイは焦げて黒ずんだ右手をわなわなと震わせていたが、ふいにぱさりと落とす。そしてそのまま動かなくなってしまった。

「ノアちゃん、あいつ死んじやったよ」

「うん」

リーネちゃんがぼつりと呟く。次第に地面が小刻みに揺れ始める。

「わああっ！」

遠くの暗がりから、くすんだ金色の鎧に茶色いマントをつけた衛兵さんたちが何人も走ってくる。

「ま、魔王軍だ！ も、ものすごい数だぞ！」

「ここはもうだめだ、撤退だ！ いかにもヘルメス殿でも、あれだけの数ではいくらかも保たないぞ！」

真っ青な顔の衛兵さんたちが、大声で呼び掛け合いながら私たちとすれ違う。

「リーネちゃん！」

「うん！」

私たちは衛兵さんたちが来た方向へ、全速力で走り出した。

第22話

薄暗がりの石畳の上を二百メートルほど走ると、お城の建物がアーチ状にくり抜かれている場所に出た。右は塀が切れて色とりどりの植物が咲き乱れる裏庭へ続き、左のトンネル状の通路は前庭へ続いているようだ。

規則的な震動はさっきよりも大きくなってきていて、私の不安もいっしょに大きくなってくる。

「リーネちゃんはここで待ってて。私はヘルメスさんのところへ行くから」

「嫌！」

リーネちゃんは目をぎゅっとつぶって、大声で拒否する。私はその勢いにびっくりしてしまう。

「一人になるのは嫌！ もう誰も死んでほしくない！ 父さまもノアちゃんも殿下も…… だからうちも行く！」

「リーネちゃん……」

実際、リーネちゃんが行ったところで何の役にも立たないだろう。それどころか、かえってヘルメスさんの足手まといになってしまう。それでもリーネちゃんの気持ちはよくわかる。涙目で拳をぎゅっと握っているリーネちゃんを、私は強く抱きしめる。その小さな温もりは、私に恐怖へ立ち向かう勇気を与えてくれた。

「わかった。でも少し離れたところにいてね。ヘルメスさんが思いっきり戦えなくなっちゃうから」

「うん！」

花が咲いたようにリーネちゃん表情が明るくなる。いざとなれば私が盾になればいい。私は少なくとも、防御力だけは無敵なんだから。

私とリーネちゃんは暗いトンネルを走り抜ける。途中左右にある通路から、メイドさんや執事さんらしい人たちが不安そうな顔を覗かせているのを見た。

トンネルを抜けると、そこはお城の西庭だった。少し先に歪な円を二つズラして合わせたようなひょうたん池がある。

何力所が生きている外灯があり、薄暗い前庭にオレンジ色の光がところどころぽっかりと浮かんでいる。喧噪は左の方、つまり正門の方から聞こえてくる。私たちは何も言わず、百メートルほど先にある車停めのように張り出した豪華な玄関の屋根に向かって走り出した。

お城の前庭では、魔王の軍勢が地響きを立てながら迫って来るところだった。

「ヘルメスさん！」

車停めの少し先の砂利道の上に、ヘルメスさんの大きな姿を発見した。それでも迫り来る魔王の軍勢の圧迫感に比べれば、とても小さく儚げに感じてしまう。

「ノアさん、なぜこんなところに！ リーネは？」

私は黙って後ろを振り向く。玄関の柱の陰に、リーネちゃんの小さな影が佇んでいる。ヘルメスさんはリーネちゃんの思い詰めたその表情で、すべてを悟ったみたい。ヘルメスさんは肩を落として、小さくため息をつく。無言で振り返ると剣を握り直し、決意を込めた視線で魔王の軍勢をぐつと見据える。

「では、何としてもここで魔王軍を食い止めないといけません」

ヘルメスさんの向こうには、不安そうな顔をした衛兵さんたちが十数人、剣や槍を構えて立っている。対して地面を揺らして迫り来る魔王軍は、軽く見積もっても二百体はいる。

ほとんどがオークみたいだけど、ところどころ飛び抜けて大きい影がある。たぶんさっきのサイクロプスのような巨人だろう。城攻めの時には、巨人のパワーが役に立つからだ。そのほかにもサーベルタイガーも何頭が見受けられる。

思ったよりモンスターの種類は多くない。私は高速で頭の中にある攻略本のページをめくる。

あの部隊構成は“突撃編成”だ。

防衛線を突破して攻撃の活路を見出す、突撃に秀でた部隊編成だ。つまり、本格的な攻撃編成部隊ではない。おそらく皇宮の防衛線を想定しての編成なんだろう。ということはまだ何とかなる！

「ヘルメスさん、敵には指揮官がいません。数は多いけど、混乱させれば撤退させることはできると思います。街の外には村人たちを護衛してきたシュナイダーさんの部隊がいますよね？」

「あ、ああ…… おそらく今は火災の消火に当たっているはずですが……」

突然きびきびと話し始めた私に、ヘルメスさんは気圧されたように頷く。

「上手くいけば挟撃できますね」

「ノ、ノアさん、あ、あなたは何者ですか？」

「私が行きます。ヘルメスさんたちは後詰めをお願いします」

「ノアちゃん！」

私はリーネちゃんの叫び声を背中に受けて走り出す。むっとする草の匂いが鼻孔を満たし、ブーツの下に柔らかい芝生の感触を感じる。

あの星空の下でシュナイダーさんと話した時から、私はどうしてこの世界に來たのか考え続けていた。

皇王様がおっしゃっていたように私が本当に救世主なら、怖がってちゃダメなんだ。誰かが助けてくれるって思ってたちゃダメなんだ。勇者は自ら進んで悪と戦わなきゃならない。私がこの世界へ來た意味が世界を救うことなら、私はその意味を受け止めなきゃならないんだ！

私は芝生の上で仁王立ちになる。思ったより魔王軍は迫ってきていて、しかも横長に展開している。ここで絶対領域を出したら、後ろのヘルメスさんたちやお城も消滅させちゃう。

「でも！」

私は両手を勢いよく前に伸ばし、黒々と蠢く魔王軍をきつと睨む。手のひらに意識を集中して、魔王軍に対して“拒絶”の意志を強める。

「私がみんなを守る！」

輝くオレンジ色の巨大な壁が、私の前にそそり立つ。私は絶対領域をドーム状ではなく、壁のように作り出した。

「な、なんだあれは！」

オークたちがたたらを踏んで立ち止まる。

私は伸ばした両手を真横に広げる。

するとその壁は翼を広げたように左右に長く伸びる。同時に高さも高くなり縦五メートル、左右それぞれ百メートルほどの塀のようになる。

オレンジ色の美しい光が前庭を幻想的に照らし出す。でもそれは魔王軍にとっては、死を司る光に他ならない。

「えええい！」

私は広げていた両手を勢いよく閉じる。長大な絶対領域の壁が、中央に向かって閉じていく。

地の底から湧き上がるような怨嗟の悲鳴が夜空を震わせ、魔王軍は左右から一気に消滅していった。

第23話

巨大な獣の顎門で噛み砕かれるように、黒々と蠢く魔王の軍勢が半円形に削り取られていく。オレンジ色の泡になって消滅していくモンスターたちを、私は無感動に眺めていた。

「おおっ！」

遠く背後でヘルメスさんたちのどよめきが聞こえる。

かろうじて飛び退けて生き残ったモンスターたちが、お城の正門の方まで下がっていくのが見える。街に出て行かれたら、市民たちがまた危険に晒される。私は咄嗟に前方へ走り出した。

すると後退するモンスターたちの背後から、真っ黒なローブを着た人影が五人ほど前へ出てくる。

「魔導師！」

私は身を固くして急停止する。その瞬間無数の雷撃が私を直撃した。

「う……」

一発一発は先ほどのマレリイほどじゃない。でも連続して叩き込まれる雷撃は魔力に変換されて、高熱を発して“チャージ”されていく。私は胸の中心に、尖った針で刺されるような痛みを感じていた。

痛みが強くなるにつれ動悸が激しくなり、私は堪えきれずに爆発した。

「いやああっ！」

お城の前庭が真昼のように明るくなる。

次の瞬間、私を中心に地面が抉れていく。私は爆心地にいた。いや、私が爆心地なんだ。

白い火球が膨れあがり、さらにその外側へ数百本の稲光を触手のように放出する。

私は体の中から何かが奔流のように抜け出ていく感覚に目眩を覚えながらも、モンスターたちが死んでいくのを呆然と見ていた。

火球が収まった時お城を囲う正門を含めた石塀はみななぎ倒され、美しかった芝生や庭園は跡形もなく削り取られていた。

「あらあら、何てことしてくれちゃってんのよ」

土が剥き出しになった地面に両膝をついて荒く息をついていると、頭上から小馬鹿にしたような女の人の声が降ってくる。見上げると夜目にも鮮やかな真紅のドレスを身に纏った艶やかな女性が浮かんでいた。

「あな…… たは？」

気怠さで全身が鉛のように重く、視界も霞む。それでもその女の人の真つ赤な唇が醜悪に歪むのは、はつきりと見て取れた。

「サフィーネ、余計なおしゃべりはいい。早くケリをつけるがいい」

前方の暗闇が盛り上がり、筋骨逞しい肉体が現れる。

身長は巨人ほどではないけど、二メートル近くはある。はち切れんばかりに盛り上がった筋肉は、もはや芸術品と言っていいいかもしれない。胸囲や腕回りなんてヘルメスさんより二回りは大きい。あ

まりにも膨れあがった筋肉で、両脇がしまらないほどだ。

焦げ茶色の肌の上半身は、鉾がいくつも嵌められたベルトをバツ印に掛けただけで何も身に着けていない。

下半身は深緑色のゆつたりとした長ズボンに黒くて固そうなブーツを履いている。

柄の長い巨大な斧を持ってるけど、私が一番驚いたのはその頭だ。

「ミ、ミノタウロス……」

私は絶望に打ちひしがれる。丸太のような首の上に載っているその頭は雄牛だった。

牛頭人身のモンスター、ミノタウロス。

他のゲームではわからないけど、「クレセニア皇国物語」に出てくるミノタウロスはかなり強い。終盤も、それこそラスト近くならないと出てこない。当然私は戦ったことなどない。対戦する前にゲームオーバーになってしまっていたからだ。

私の頭の中には、攻略本に書いてあったミノタウロスへの数々の賛辞が思い浮かんできた。

『最高レベルの“クレセニアの剣”でも、致命傷を与えることはできない』

『一個師団をもってしても倒すのは困難』

頭も良く統率力もある。魔王の側近として辣腕を振るい、攻略サイトの書き込みを見ても魔王に会う前に倒された勇者は数知れないという難敵。

そんな相手が、今まさに私の目の前にいる。

「いいのかい？ あたしが手を出しちゃっても。あたしとあんたは魔王様の護衛で付いてきただけなのに」

サフィーネと呼ばれた女が、ミノタウロスへ嘲笑するような笑みを向ける。夜空に溶け込みそうな長い黒髪が、サフィーネの頭の動きに合わせて肩をさらさらと流れ落ちる。

その時私は初めて気がついた。

サフィーネと呼ばれたこの女性の背中には、コウモリのような真っ黒い翼がついている。そしてその下には、先の尖った黒い尻尾がうねっていた。

「あ、悪魔……」

朦朧とした私の頭では、そんな単語しか思い浮かばない。しかしサフィーネはそんな私の言葉に冷笑を浴びせかける。

「ふん、悪魔なんて下等で泥臭い連中といっしょにするんじゃないわよ。あたしは……」

サフィーネはそこまで言うかと急に言葉を途切らせ、ミノタウロスの横ヘドレスの裾をはためかせながら優雅に着地する。

私は悪寒がして、後ろを振り返る。

星空の一点に黒い染みが広がっていく。それは瞬く間に黒いマントを羽織った長身の人型へと変わった。

「予定が狂ったな」

凍り付くようなその声に、私は聞き覚えがあった。

皇王様を殺した黒い影。

夜風に銀色の長い髪がたなびき、双眸は血のように真紅の燐光を放っている。

筋の通った高い鼻の下では、血の気のない薄い唇の両端が少し持

ち上げられている。

微笑みというには禍々しく、冷笑というには邪悪すぎた。

「魔王様」

サフィーネが恭しく跪く。ミノタウロスはすでにその巨体を深々と折り曲げて、片膝についてお辞儀していた。

「まさか特異点となろうとはな」

「あ、あなたが魔王？」

私は自分の声が老婆のように掠れているのに気づく。魔王を見た瞬間全身が痺れたように硬直し、呼吸が苦しくなった。

人は真の恐怖に直面すると、本当に身動きすら取れなくなるらしい。

魔王は悠然と空中に佇んでいるだけだったが、それだけで私の心は深い絶望感に囚われた。

「お前たち、その娘を殺せ」

「は、よろしいので？」

ミノタウロスが巨大な斧を持ち上げながら、“念のため”という口調で魔王に尋ねる。

「構わん。そいつは“殺しても死なん”」

「畏まりました」

音もなく赤いドレスと焦げ茶色の巨躯が立ち上がる。

前方から強烈な殺気が押し寄せてくる。

私は恐怖に突き飛ばされるように霞がかった頭に意識を集中させ、

絶対領域を発生させた。

第24話

私は全天を覆う白い火花と激しい光に視界を埋め尽くされていた。それが唐突に収まると、夜風が私の頬を撫でていくのを感じた。

「あ……れ？」

それで気づいた。私を中心としてドーム状に展開していた絶対領域は、跡形もなく消滅していた。

「絶対領域を作り出せるのが、自分だけだと思わないことだな。しかもその程度なら、わたしもここまで苦労しなかった」

首筋に冷水を流し込まれるような冷徹な声が後ろから聞こえた。私は振り返ろうとしたけど、そうする前に視界は闇に閉ざされた。

「え？」

私は地面深くに埋め込まれていた。目の前に細かい雑草の根が絡まり合っている。ずり上がったチュニツクの裾から剥き出しになった太ももへ、冷たくザラザラした土の感触が伝わってきた。

「何という防御力だ。私の渾身の一撃でもダメージを与えられないとは」

頭上から太く落ちていた声が聞こえる。それがミノタウロスのものだとは、すぐには気づけなかった。

私は攻撃を受けたんだ。この状況は、サイクロプスのハンマーを

受けた時と同じだ。

「く…… よ、よいしょ……」

私は四苦八苦しながら穴をよじ登る。その時攻撃されなかったのは、きっとミノタウロスは次の攻撃法を考えていたんだと思う。サフィーネの姿が見えないのが気に掛かった。

穴から出ると、少し先にミノタウロスが悠然と立っている。両手で斜めに持った長い斧が、優雅に回転して切っ先がこちらへ向けられる。風を切るひゅんって音が、私の耳に意外と心地よく響いた。

「面白い！」

ミノタウロスが突進してくる。私は両手を前に突き出して“拒絶”する。

絶対領域が発生しようとしたその瞬間、私は強烈な光に包まれた。じゅうじゅうと地面が焦げる音を聞きながら、私は何か高熱を発する攻撃を受けたのだとぼんやり思考する。視界の隅に、赤いドレスの端がちらついた。

次の瞬間私はお腹に衝撃を感じて、強烈な力で上空高く弾き上げられていた。

「あ、ああ……」

綺麗な満天の星空が回転し、ちろちろと炎の舌を伸ばすティーベの街並みが反転する。

耳元を通り過ぎる風の音を聞きながら、私はミノタウロスの攻撃を受けたのだと理解した。

「ほら、もう一回“粗相”をしてごらん？」

サファイアの妖艶な姿が逆さまになって目の前に現れる。いや、私が逆さまになって落ちてるんだ。

「ぐっ！」

お腹の真ん中が強烈に圧迫される。見ると炎のまとわりついた黄色い球体が、私のお腹に少しめり込んでいた。私はそれを両手で掻き抱くように掴もうとするけれど、指先に触れる感触は何もない。私はそのまま地面に落下し、一回バウンドして横向きに倒れた。

「ああ、ああああっ！」

地面に激突した衝撃は何ともなかったけど、お腹が焼けるように熱い。攻撃魔法だというのはわかるけどこんな魔法あったっけ？

「あはは！ 苦しいだろう？ その“焼けつく閃光弾”は体の中で爆発するんだよ。魔力吸収能力が仇になったねえ。ああゝっはっはっは！ ……内臓ぶちまけて死ね」

黄色い球体は輝きを増しながら私の中へ潜り込んでいく。すべてが私の中に消えた直後、体の内側から何かが爆発した。

「ああああああああっ！」

私は涙や胃液を吐き出しながら悶絶する。

全身から熱い进りが外へ流れ出す。私の防御力は外側だけではなく内臓にも適用されているようで、その爆発で身体がバラバラになることはなかった。

その代わり細胞の隙間から进り出るような熱い奔流が全身を焼く

激痛に、私は悶絶して地面をのたうち回る。

「し、信じられないよ。これを受けて生きてるなんて……」

涙で霞む視界に、赤いドレスが見え隠れする。

私は今にも破裂しそうな胸を押さえ、血の味の混じった唾液を地面へ吐き出す。

「げほっ……」

「ここまでとはな……」

魔王の声がすぐそばで聞こえる。私が両手について起きあがろうとすると、目の前が暗闇に閉ざされる。その瞬間、全身が痺れたように脱力してしまった。

「仕方ない、今回は皇王暗殺という最低限の目的は達成した。これ以上欲張ってもよい結果は得られないだろう」

「魔王様、どうなされるおつもりで？」

サフィーネのくぐもった声が聞こえる。私の視界は闇に閉ざされたままだ。サフィーネの声音には、少し戸惑いを感じられた。

「またこいつに“潜り込む”。残存兵力をまとめて撤退しろ」

「は……ヤツらはどうしますか？」

遠くにヘルメスさんたちの怒声が聞こえる。どうやらミノタウロースと戦っているようだ。

「殺せ。王子以外に用はない」

「わかりました」

サファイネの気配が遠のく。私は全身に力を込めて起きあがろうとしたけど、冷たい“染み”が、胸の真ん中に広がってきて意識が遠のいていく。

『もはや入れ物に興味はなかったのだが、特異点となってしまうたからにはここに捨て置くわけにもいかないだろう。お前にはいっしょに来てもらう』

「あ……」

頭の中に染み込んでくる冷たく感情のない声を聞きながら、私の意識は白い霧の中へ閉ざされていく。

意識が途切れる瞬間、私は遠くリーネちゃんの悲鳴を聞いた気がした。

ごめんね、リーネちゃん……

約束守れそうもないよ……

私の意識は、そこで完全に途切れた。

閑話1 リーネちゃんの目玉焼き

埃っぽい山道を下るのは、実は上るより疲れる。前を向いても後ろを向いても、疲れ切った村の人たちが黙々と下り坂を俯き加減で歩いている。

うちとノアちゃんは子どもだということで馬車に乗せてもらってるけど、歩いてる大人たちはたいへんだろうなと思う。

村を出てからもう五日になる。

谷間の森の向こうには、真っ赤な太陽が今まさに沈もうとしている。

うちらはまた、あの慣れ親しんだ村に戻ることができるんだろうか。

山奥で田舎の村だけど、そこには母さまとの思い出がいっぱい詰まってる。

夕焼けを見るとどうしても悲しくなっちゃうのは、うちがまだ弱いからだ。

「リーネちゃん、大丈夫？」

夕焼けを眺めていると、横に座るノアちゃんが心配そうに覗き込んでくる。

ノアちゃんはうちの村と隣村の中間地点で、モンスターに襲われたところを父さまたちに保護された。

父さまたちは何も教えてくれないけど、ノアちゃんには何か秘密があるみたい。それでもうちはノアちゃんが大好きだ。

吸い込まれそうな黒く澄んだ瞳は、どこか遠い夜空を覗き込んでいるような不思議な気持ちになる。さらさらの長い髪は、うちの硬い髪質とは比べものにならないくらいきれい。

細い手足で真っ白に透き通った肌は、身分の高い貴族のお嬢様の

ようだ。いや絶対そうだ！ 殿下がノアちゃんのことをすごく気に掛けてるのは、きっとそのためだとうちは推理してる。ノアちゃんの秘密って、もしかしたらそれなのかもしれない。

「リーネちゃん？」

うちがじつと見つめたまま何も言わないから、ノアちゃんは小首を傾げてきよんとしている。

か、かわいい！ うちがノアちゃんより年下だけど、こんなかわいい女の子になりたいなっと思う。

でもノアちゃんには、かわいいときれいが合わさったような儚げな美しさもある。きつと大人と子どもの中間という、微妙な年齢のせいもあるんだと思う。うちの母さまもきれいだったけど、ノアちゃんもつときれいだ。

「ううん、大丈夫だよ！」

うちは目一杯明るい笑顔で応える。うちができることは、一人ぼっちになっちゃったノアちゃんを元気づけてあげることだけだ。

ようやくできた、たった一人の大切なお友達だもん。うちまで悲しい顔をしちゃったら、ノアちゃんももっと悲しくなっちゃうよ。

「ならいいんだけど……」

ノアちゃんはいつものどこか不安げだ。だからうちが笑顔で元気づけてあげるんだ！

「あ、ねえ、リーネちゃん」

「ん、なに？」

ノアちゃんはさらさらとした髪をかき上げながら、うちの方へ顔を寄せてくる。うちは五日もお風呂に入っていないから、臭ったやだなと思って少し身を引いてしまう。

ノアちゃんも同じはずなのに、どうしてこんない匂いがするんだろう。

「私たちがばかり馬車に乗ってていいのかな…… みんな一生懸命歩いてるのに、何だか申し訳なくって……」
「うん……」

うちは腕組みをして考え込む。

実際うちは山の中で走り回って育ったから、結構足腰には自信がある。でも子どもだからきつと歩くスピードは遅い。みんなについていくのは一苦労だと思う。

それにこちらが歩いたら、交代で馬車に乗ってる大人たちが気を遣っちゃうかもしれないし。

そう考えれば、こちらではできる限り子どもとして堂々と馬車に乗ってた方がいい。

でもノアちゃんの気持ちもよくわかる。

その時うちの頭に、名案が浮かんだ。

「ねえ、だったら食事の準備や片付けを手伝おうよ！ それならうちにもできるし！」

「え？　しょ、食事？」

名案だと思ったんだけど、なぜかノアちゃんは乗り気じゃない。うちは母さまが死んじゃってからずっと家の中を切り盛りしてきた。

食事の準備や片付けなら、お手のものだ。

「ね、そうしよう？　夕食は配るだけのおにぎりみたいだから、明日の朝食から！　これってすごく名案じゃない？」

「う、うん……」

ノアちゃんは微妙な笑顔をしながら頷く。その笑顔を見て、ノアちゃんは料理が苦手なんだと推理した。

「心配なくていいよ！　料理はうち得意だから、いろいろ教えてあげる！」

うちはノアちゃんが困ったように笑うのを見て、どんと胸を叩いた。

翌朝早く、こちらは食事の準備をしている補給部隊のおじさんたちのところへ二人で向かった。

おじさんたちは夜が明ける前から食事の準備を始めていた。避難民だけでも五百三十人ほど。さらに護衛の兵士さんたちが八十人以上。六百人以上の食事を、たった三十人の補給部隊の兵士さんたちが用意しなくちゃいけない。単純計算だと一人で二十人以上を作ることになる。

こちらが手伝うだけでも、すごく助かるはずだ。

「おじさん、うちらなにか手伝います！」

「お？　嬢ちゃんたち、村の人だろ？　いいのかい？」

一番偉そうなおじさんの兵士に声を掛けてみたけど、どうやら正解だったみたい。

おじさんは忙しそうにキャベツを剥きながら、周囲を見回す。そして少し離れたところで卵を割っている若い兵士に目を止める。

「嬢ちゃんたち目玉焼き作れるかい？」

「もつちろん！ ノアちゃんは大丈夫？」

「う、うん、大丈夫」

「じゃあ頼むぜ！」

「おじさんありがと！ ノアちゃん、行こう！」

律儀に深々とお辞儀をしているノアちゃんの手を強引に引っ張って、うちは若い兵士さんのところへやって来る。

「あのおじさんに、目玉焼きを作るように言われてきましたあ！」

「ええ？ ほんとかい？ 助かるよ」

若い兵士は卵を割りながら、額の汗を拭う。目玉焼き担当はこの人一人しか見当たらない。まさか六百人を一人で作らなきゃならなかったのかな？

「じゃあ、僕が割った卵をその竈かまどで焼いてくれるかい？ できたらそっちの皿にどんどん載せていってくれ」

「りょーかいしましたあ！」

竈は二つあるけど、兵士さんが一人だけだったから一つしか火が入っていない。うちが得意の魔法で薪に火をつけると二つの竈が赤々と炎を上げ、白々とした夜明けの空に煙を上げ始める。

「よおっし！ ノアちゃんががんばろうね！ 目玉焼きの作り方はわかる？ 教えてあげようか？」

「だ、大丈夫。わかるよ。」

「じゃあ、どっちが美味しい目玉焼きが作れるか勝負だよ！」

「え、ええ？」

うちは張り切ってフライパンに植物油を流し始めた。

「はい、どうぞ！」
「どうぞ」

うちとノアちゃんは皿に載せたおかずを配っていく。皿には目玉焼きと野菜サラダ、ベーコンが二枚盛りつけられている。

朝食をもらうための長い列は、漸く半分を過ぎたところだった。

「いやあ、この目玉焼きすごく美味いねえ！ あんたが作ったのかい？」

目玉焼き担当の若い兵士が、村人のおじさんに肩を叩かれている。兵士はおじさんの皿を覗き込み、うちらの方を向いてにこっと微笑む。

「僕じゃないですよ。あの娘たちです」

「なんだ、ポルタ村のリーネちゃんじゃねえか。それにそっちの娘は殿下に保護された娘さんだな。」

「そうだよ。うちらが作った目玉焼きおいしいでしょ！」

「ああ、美味い！ しかし手伝いなんて偉いなあ！ 家のボウズたちにも見習わせてやりてえよ」

おじさんは目玉焼きにかぶりつく。真ん中の黄身がきれいなまん丸になっているのに気づく。あれはノアちゃんが作ったヤツだ。

「ちょっとなんだいこの目玉焼き！ 黄身がぐしゃぐしゃにつぶれてるじゃないかい！」

「オレのは裏側が真っ黒に焦げて炭みたいになってるぞ！」

おじさんの後ろからおばさんと若いお兄さんがやってきた。皿を見るどころかもうちが作った目玉焼きだ。

「そ、それうちが作ったヤツだ……」

避難の旅は辛い。せめてご飯くらいは笑顔になってほしい。でもうちの作った目玉焼きはみんなを笑顔にできなかったんだ……

「う……」

うちが下唇を噛んで泣くむと、おばさんたちは慌てて手を振る。

「ああ、リーネちゃんが作ったのかい？ そんならしょうがないよ！ 見た目より味だからね！ 見た目は確かにあれだけど、味は……」

おばさんは端っこを嚙って眉を顰める。でもすぐに無理矢理笑顔を作る。

「ちょ、ちょっとしょっぱいけど、う、美味しいよ！」

そのままおばさんはくるりと振り返って歩いて行ってしまった。

「は、はは、うん、美味しい。美味しいよ」

お兄さんは食べもせず、そう言っておばさんの後を追っていく。うちは涙を堪えきれず、大粒の涙が頬を流れるまま俯いた。

「リ、リーネちゃん、おばさんたちのはたまたま失敗したヤツだったんだよ。ほ、ほら、ヘルメスさんに聞いてみよ?」

ノアちゃんが指さす先で、父さまが若い兵士に目玉焼きの皿を渡されている。本当は殿下たちとテントのテーブルで食べてもいいはずなのに、父さまはいつも村の人たちと食事を摂る。

道端にどっかりと腰を下ろして目玉焼きを食べ始めた父さまのところまで行って、うちは皿を覗き込む。

黄身と白身が縞模様のようになった目玉焼き。間違いなくうちのだ。

「おお、リーネにノアさん。食事の準備を手伝うなんて偉いですなあ!」

父さまはそういつて豪快に笑い、目玉焼きを二口で食べてしまう。

「と、父さま、その目玉焼きうちが作ったんだけど、お、美味しかった?」

「ん? そうかそうか! えらく美味いと思つたら、リーネが作ったのか! はっはっは!」

「そ、そうだよな? うちの目玉焼き、美味しいよね!」

「ああ! リーネの料理はクレセニアだ!」

「よかった!」

うちは安心して満面の笑みになる。見た目はちょっとアレだけど、やっぱり美味しかったんだ!

うちは元気が出てきたから、またがんばってお手伝いしようと思つた。

「でも今度は、リーネの作った野菜サラダが食いたいなあ!」

「え、野菜サラダ？ わかった！ うち、父さまに最高の野菜サラダ作ってあげるね！」

やっぱり父さま大好き！ うち元気いっぱい歩いていく。ノアちゃんと父さまは、顔を見合わせて苦笑していた。

なんだろう。

閑話2 リーネちゃんとお買い物

「見て見て、ノアちゃん！ あれなにー？」

「あれは噴水っていうんだよ。水を噴き上げてみんなの目を楽しませるんだよ」

「へえー、あつ！ じゃあ、あれは？ あれはなにしてんの？」

「あれは靴を磨いてるんだよ。靴磨きっていうちゃんとした職業なんだから」

「そんなお仕事があるなんて、さすが皇都だねえ！ あ、あのお店なんだろう！」

ノアちゃんは記憶喪失なのに何でも知ってて、うちにいろいろ教えてくれる。ほんとすごいなあって思う。

うちはノアちゃんと父さまの三人で、皇都テーブルのメインストリートを歩いていて。おっきな建物がいっぱいあって、ただ歩くだけでもとっても楽しい。テーブルにはポルタ村にはない華やかさと活気が漲っていた。

「ね、父さま！ うち本買いたいんだけど、本屋さんってどこ？」

父さまは何度かここに来たことがあるから、お店とかも知ってそう。

「本屋？ 父さまはここで本を買ったことがないからなあ」

父さまは困ったように頭を掻く。メインストリートだけでも何百軒とお店がある。これで他の区画まで含めたら、お店なんて何千軒あるのかわからない。

でも夕方には皇宮へ行かなきゃならないから、他の区画まで足を

伸ばすことはできない。メインストリートに本屋さんがなかったら、本を買うのは諦めなきゃならない。

うちはがつくりと肩を落としてとぼとぼと歩く。

「ねえリーネちゃん、どんな本が欲しいの？」

ノアちゃんがうちを覗き込みながら横に並んで歩く。さらさらの黒い髪が流れて、くりつとしたアーモンド型の大きな目がうちを優しく見つめている。

もう、ノアちゃんほんとかわいい！

道行く人も、二人に一人はノアちゃんを見て振り返っている。にやけた若い男が何人かノアちゃんに声を掛けようと近寄ってきたけど、その前にみんな父さまのひと睨みで尻尾を巻いて逃げてった。ノアちゃんは全然気づいてなかったみたいだけど。

「ん」とね、魔導関係書と召喚術の本。モンスター関連の本もあったら買いたいなあ」

「そんなに？ 専門書ばかりだね。リーネちゃんは勉強家だなあ」
「そんなことないよ」

そんな素直に褒められると照れちゃう。でも実際、そういう専門書を読むのは好きだ。小さな田舎の村だから学がないって思われなくなってくて、うちは幼い頃から母さまに字を習っていた。読み書きはきつと、皇都の同年代の子たちにだって負けないと思う。

「たぶんこの先の角を曲がって少し奥に入ると、そういう専門書の売ってる本屋さんがあると思うよ」

「ええ？ ノアちゃんわかるの？」

「んん〜…… なんとなく」

にこつと春の陽射しのような笑顔を向けられると、うちはふにやあつてなっちゃう。もう、ノアちゃんのこの笑顔は十分凶器だよ！

「じゃあ行ってみよ！」

うちはノアちゃんの手を引いて走り出す。父さまはどうせ勝手についてくるだろうから、この際無視！

薬屋さんの角を曲がると、落ち着いた佇まいを見せる商店街があった。そこは文具屋さんや美術関連の道具屋さんの並ぶ、すごくアカデミックな感じのする通りだった。

「ほう！　こんなところがあるなんて、私も知りませんでした」

通りはメインストリートの三分の一ほどの幅で、父さまが歩くとすれ違う人は避けなきゃならない。父さまは張り出した軒先に頭をぶつけないように気をつけて歩くから、こちらとはどんどん離れてっちゃう。でも目的の店は父さまとはぐれる前にすぐ見つかった。

『デオドア古書店』

大きな木から切り出したらしい重そうな看板が、長い間日にさらされて飴色にできている。お店のドアは開け放たれているけど、中は薄暗くって洞窟みたい。

「うわぁ！　いかにもって感じだね！」

「うん、私こういうお店って入ったことない」

ノアちゃんは本屋さんってあんまり行かないみたい。そういえば前に、本は『こんびに』ってお店でしか買わないって言ってた気がする。どこにある本屋さんなんだろう。

お店はあんまり大きくなくって、書棚がいくつか並んでいるだけだった。棚に収まりきらない本は床に平積みになっていて、あんまり手入れされてないみたい。

うつすらと埃の積もった表紙をめくったりしていると、奥の方から嘎れた声が響いてきた。

「いらっしやい」

明るいところから急に薄暗いところへきたから、まだ目が慣れていない。それでも奥のカウンターに背中曲がったお婆ちゃんが座っているのはわかった。

白髪を頭の後ろでお団子にして、紺色のローブを着ている。暗くて表情まではよく見えなかったけど、くすんだしわくちやのほっぺたと長い鼻は見えた。

「あのう、魔導関係書と召喚術の本はありますか？ あとできればモンスター関連の本もあれば見たいんですけど……」

声を掛けても、そのお婆さんは何も応えない。うちは不思議そうな顔をしているノアちゃんと顔を見合わせて首を捻る。

「あのう……」

カウンターへ近づきながらまた声を掛ける。よく見るとお婆さんはにこにこしながらこっちを見ていた。聞こえなかったのかな？

「魔導関係書と召喚術の本、それとモンスター関連の本はありますか？」

「ああ？ あんだって？」

お婆ちゃんは耳を傾けて手を添える。やっぱりこのお婆ちゃん、耳が遠かったんだ。

「魔導関係……」

「リーネちゃん、ちょっと待って」

さらに大声で話そうとしたうちを止めて、ノアちゃんがお婆ちゃんの前に近づく。ノアちゃんはお婆ちゃんの目の前で腰を屈め、視線を合わせる。そしてうちよりもずっと小さな優しい声で、ゆっくりと話し始める。

「魔導関係書と召喚術の本、それにモンスター関連の本はありますか？」

「ああ、ああ！ あるとも！ そっちの奥の棚の上から二段目が魔導関係書、その下の棚が召喚術。モンスター関連はそっちのお嬢ちゃんの足下に山積みになってるよ」

「ありがとう」

ノアちゃんはにこつと笑ってお辞儀する。うちが大きな声で言っても伝わらなかったのに、どうしてあんな小さな声で伝わったんだろう。

ノアちゃんが戻ってくると、うちはそのことを聞いてみた。

「ああ、それはね？ 耳の遠い人は唇や表情で言葉を理解する場合が多いのよ」

「唇で？ 読唇術ってやつ？」

でもこのお婆ちゃんは魔女みただけど、そんな技術を持ってるようには見えないなあ……

「読唇術がどんなものかはわからないけど、お年寄りの知恵ってやつかな。人は言葉で意思を伝え合うけど、一番大事なのは気持ちなんだよ」

「気持ちかぁ……」

なんかすごく大事なことを聞いた気がする。確かにテキトーにお礼を言うのと、心を込めて「ありがとう」って言うのとじゃ印象は全然違うもんね。

「それでも伝わらない相手はいるけどね……」

そう言った時のノアちゃんの笑顔は、どことなく淋しそうだった。

「こ、これはかなり重いぞ!」

父さまは両手一杯に膨らんだ紙袋を抱えている。

うちは買いたい本を全部買ってもらっちゃった。テーブルにはしばらく滞在するみたいだし皇宮だと家事をする必要もないみたいだから、うちはその間何もすることがない。父さまはどうせお仕事ですっとお留守なんだから、この際徹底的に本を読もうと思ってる。買った本は全部で十五冊。一ヶ月はこれで十分楽しめそうだ。

「ノアちゃん、お金ってあとのくらい残ってる?」

「うーんと……」

ノアちゃんは飴色の袋を覗いて、お金を数える。

「銀貨はあと三十枚、銅貨が五十六枚かな」

「じゃあ後はノアちゃんが買いたい物買っていよいよ！　うちはもういいから」

「え、でも……」

ノアちゃんは、重そうな紙袋を両手に抱えている父さまを振り返る。父さまはそれでノアちゃんが何を言いたいのかわかったみたいで、明るくにかつと歯を見せる。

「私のことは気にせんでいいですよ！　せつかくの殿下のご好意です。全部使うのが礼儀です」

「は、はい……」

ノアちゃんは頬を染めて頷く。お金は大事だけど、殿下はきっと生活費にしてほしくて渡したんじゃない。うちらが楽しまないと、殿下の気持ちを無駄にしまうつて父さまは言いたいんだ。

「ね、ノアちゃんは何か欲しいものとかないの？」

「え？　わ、私は……」

ノアちゃんは俯いて何か考えている。それは実は、俯いてるんじゃないくつて自分の服装を見ていたんだって気づいた。

「服とか靴が欲しいかな。後はし、下着も……」

「あっ！」

うちはそのことに気づかなかったことがとても恥ずかしかった。

ノアちゃんが着てる服はみんなうちのだ。下着も。

いくら洗濯したからって、うちの物をずっと身に着けてるって嫌だよ。でもノアちゃんの性格上、そんなこと自分から言い出せるはずもない。ファンゲルデンで何となく街に行きたそうにしてたの

は、そういうことだったんだ！

「ごめん、ノアちゃん！　うち全然気づいてあげらなかつた！」

うちが勢いよく頭を下げると、ノアちゃんは驚いたように両手を胸の前で振る。

「あ、いや、リーネちゃんの服が嫌ってわけじゃないの！　でもいつまでも借りてるわけにはいかないし……」

「わかつてる、わかつてるって！　うちがとびつきりかわいい服選んであげるから、いっしょに買いに行こ！」

うちはノアちゃんの手を引いて、メインストリートを歩き出す。カラフルな服の並ぶお店がいっぱいあって、目移りしちゃう。

うちは普段服を買うなんてしたことない。でも母さまが村の人たちの服の修繕をしてたから、服に関してはちょっとうるさい。大事なのはノアちゃんのスタイルのよさを、いかに引き立たせるかだね。

何軒かのお店の前を通ってみたけど、イマイチノアちゃんに合う服を売っているお店がない。しばらく行くと、女性服専門店らしき看板があった。

『ブティック・アリス』

「ねえノアちゃん、『ブティック』ってなに？」

「ええとたぶん、高級な服とかアクセサリを扱うお店のことだったと思うけど」

「じゃここに決定！」

うちは「高いよ」と抵抗するノアちゃんを強引に引っ張って、か

わいらしいクリーム色のドアからお店に入る。ガラス張りの店内は明るい光で満ちて、カラフルな服が並んでいる様子はまるでお花畑のようだった。

「うわぁ！ 見て見てノアちゃん、かわいい服いっぱいあるよ！」

「う、うん、そうだね」

ノアちゃんはうちの手をぎゅっと握って、うちの陰に隠れるようにしている。

「おい、父さまはこういう店には入れないから外で待ってるからな」

父さまが入り口から恥ずかしそうに声を掛ける。うちは適当に返事をして、ワンピースコーナーにノアちゃんを連れて行った。

「ねえノアちゃん、こんなのどう？」

うちはピンク色のかわいいワンピースを取り出す。少し丈は短いけど、ノアちゃんだったらすごく似合うと思う。

「え、ええ？ これちょっと短かすぎない？」

体に当てていたノアちゃんが驚く。

「いいから試着してみて！」

うちは目を白黒させているノアちゃんを、奥の試着室へ押し込む。ノアちゃんはしばらく文句を言ってたみたいだけど、諦めて着替え始めた。少ししてうちを呼ぶ声が聞こえたから、仕切り布を開ける。

「うつわぁ！ ノアちゃんめっちゃかわいい！」

うちは自分でも目がきらきら輝くのがわかった。

ピンクのワンピースを着たノアちゃんは、まるで妖精みたいだった。白くて細い手足はまるで高級な陶器細工みたいで、今にも消えちやいそうな儚さがある。黒いさらさらの髪が大人っぽい雰囲気醸し出汁、童顔がかえって色っぽく見えてくる。

少し広めに取りられた胸元からは繊細な彫刻みたいな鎖骨が見えて、うちはむしろぶりつきたくなってしまふ。

「こ、これやつぱり恥ずかしいよ」

ノアちゃんは真っ赤になって、仕切り布の陰に隠れてしまふ。

「あらぁ！ とってもプリティでコケティッシュですわよん！」

体をくねくね動かしながら、妙に細い体をした男性店員が走り寄ってくる。

「うげっ！」

うちは気持ち悪くなって後ずさってしまふ。

赤と白のチェックの派手なＴシャツは、体にぴったりと張り付いている。乳首が立っているのがわかって、余計に気持ち悪さが目立つ。袖とズボンはぴったりとした黒い生地で、ズボンには細く白い縦縞が入っている。

ぎんぎらの巨大なバックルが黒革のベルトの真ん中についていて、てかてかに光っている黒い革靴の上には毒々しい緑とオレンジの縞模様のソックスが見えている。

村では見たこともない派手な服装に、うちは目がちかちかしてき

てしまった。

「あなたはスタイルもスレンダーだし、シユールでスリットなお顔だからセパレートタイプのコーディネートもグレートだわよん！」

「は、あの……」

いったいこの人は何語を話しているのだろう。うちは話しかけられたら嫌だなあって思って、そろそろとお店の出口へと移動する。幸いその店員さんはノアちゃんに夢中のようで、次々と新しい服を取り出してはその辺に並べている。

うちはお店の前で待っていた父さまに助けを求める。父さまは一つ頷くと、入り口から狭そうにのっそりと中へ入る。

両手剣を背負った大きな戦士が、女の子向けのブティックにいる姿はかなり異様だと思う。父さまはのっしのっしとカラフルな服の間を歩いて行って、試着室の前まで来る。数人いた他のお客さんたちは、慌てて店から出て行った。これって営業妨害？

「だからね、あなたのようなチャージミングでエキセントリックな女の子には、フレーザーでセンシティブな色合いと」

「ノアさん」

「ひゃああっ！」

父さまが声を掛けると、店員さんは飛び上がって驚いた。

「なな、ななななな、なななんでしょうか？」

むっつりと黙り込む父さまから身を遠ざけるようにしながら、店員さんは真っ青な顔で無理矢理笑顔を作る。

「こういうお店では、自分の買いたい物をはっきりと言った方がい

いすぞ。買いたくないものまで買わされてしまいます」

「は、はい」

父さまの大きな体で見えなかったけど、ノアちゃんのか細い返事が聞こえた。父さまはそれだけ言っと、またのっそりと店を出て行った。でも何故か耳の後ろが真っ赤になっていた。

呆然とした店員さんを無視して、うちは試着室を覗く。

「ぐはっ、ノ、ノアちゃん……」

うちは鼻血が出そうになってしまった。

ノアちゃんは超ミニで胸までしかないボトムトップドレスを着せられていた。

「リ、リーネちゃん、こ、こんなの恥ずかしいよ……」

ノアちゃんは内股になって足をもじもじさせている。両手でスカートの裾を必死に下げて太ももを隠そうとするもんだから、真っ白い胸の谷間が見えてしまっている。

「ノ、ノアちゃん、それ買お！ 絶対！」

「やー！」

真っ赤になって涙目になるノアちゃんに、うちはお腹を抱えて笑い転げてしまった。

結局ノアちゃんは白いチュニックと女戦士用のブーツを買った。

でも下着だけは、絶対ピンクをノアちゃんに着せるんだ！

これだけはうちとしては絶対譲れない。

その後選んだピンクの下着は試着までではできなかったけど、きっとノアちゃんにはすごく似合うと思う。

お友達と買い物をするって、こんなに楽しかったんだ。

うちは時間があったという間に過ぎてしまったことに驚きながら、余ったお金で甘いお菓子をいっぱい買い込んだ。クローゼットに隠しておいて、後でノアちゃんと食べようって。余ったお金は明日の分かな。

ワゴンで売ってたアイスクリームを買って、ノアちゃんと噴水を見ながら食べる。父さまは別のワゴンで、うちの飲み物を買ってくれている。

勢いよく噴き上がる水が、眩しい陽光を乱反射してきらきらと輝いていた。

「ふふ！」

「リーネちゃんどうしたの？」

ノアちゃんはほっぺたにバニラクリームをくっつけたまま、小首を傾げる。うちは指でそれを掬って舐める。

「あ、な……」

ノアちゃんが慌てて手を頬に当てる。その仕草が可愛くって、うちは満面の笑みを作る。

「お買い物って楽しいね！」

「ふふ、そうだね」

ノアちゃんが目を細めて柔らかく微笑む。

皇都のメインストリートは、明るい陽射しの中まっすぐと皇宮に向けて伸びていた。

閑話3 シュナイダー、その想い

わたしが勇者と呼ばれるようになったのは、いったいいつの頃からだったろうか。

クレセニア皇国という世界でも大国と言われる国の皇子としての世に生を受け、何不自由なく育ってきた。剣の才能が見出されると、父上はわたしに一流の剣術師範をつけてくれた。

政治や経済について学びたいと申し出れば、各界の著名人がマンツーマンで家庭教師として徹底的にわたしが満足するまで教えてくれる。

何不自由ない生活。それは皇子としてのプレッシャーともなってわたしを苦しめた。

魔王が世に現れクレセニア皇国が瞬く間に危機に晒されると、わたしは即座に父上に申し出た。

前線に出たいと。

当然父上や幕僚たちは反対した。クレセニアにも優秀な將軍たちはいる。何も次代を担う皇子自ら、危険な場所に行かずともよいのではないかと。

しかしわたしは頑迷にその進言を拒んだ。理由は簡単だ。

わたしは民を危険に晒したまま、安全なところに引きこもっていることなどではしなかったからだ。

父上には皇都を離れられない理由がある。しかしわたしはどこまでも歩いていけるこの足と、その辺の魔物にはやられることのない剣術がある。

そして何より次代を担う皇子だからこそ、最前線を経験しておきたかったのだ。

魔王軍は燎原の火のようにその勢力を広げ、出現から一年を経たずして国土の半分にまでその版図を広げた。それは驚異的な進軍速

度だった。

幸い中央に広がる峻険な山脈が、その速度を緩めさせてくれた。わたしは最前線であるポルタ村へと軍を率い、陣を張った。

総勢百五十名ほどの中規模部隊だったが、険しい山道と深い森で魔王軍を足止めすることに成功した。

丸二日に渡る激戦の末魔王軍を撃退し、陣を張ったポルタ村へと引き返した。魔王軍の先遣隊はその大半を失い、山脈の向こうへ撤退した……。はずだった。

ポルタ村から三十五キロメートルほど離れたもう一つの山間の村テグスに、撤退したはずの魔王軍が現れたのだ。

「負傷した者はここで待機。騎士団と第一から第八小隊まで出撃！残りはここの防備を固めろ！」

整然と並ぶ騎士団の先頭に立ち、わたしは焦っていた。撃退したはずの魔王軍が、なぜ戦略的に価値のないテグスを襲ったのか。そのことに混乱して頭がいっぱいになり、ヤツらの意図に気づきもしなかったのだ。

その意図に気づいたのは手応えのないオークの集団を駆逐し、テグス村の人々の大半を保護した時だった。

「で、殿下！ポルタ村から伝令！魔王軍の急襲を受けているそうです！」

「な、なに？」

わたしは十数騎の手勢を引き連れ、ポルタ村へ向かった。ポルタ村には最低限の護衛しか残していない。しかもその大半は戦闘部隊ではなく後方支援部隊だ。武装はしているものの、組織的な戦闘などできるわけがない。

わたしは馬を駆けながら最悪の事態を想定した。伝令によるとポ

ルタ村を襲ったのは凶悪な魔獣部隊。襲われてからすでに二時間以上も経過している。戦闘能力のない村人と脆弱な後方支援部隊ではすでに全滅している可能性が高い。

しかしわたしの目の前に広がっていた光景は、信じられないものだった。

「こ、これは……」

さして広くもない村の通りが、魔獣の死骸で埋め尽くされていた。そしてその中央には、巨大な剣を持った巨躯が佇んでいた。それがわたしの大切な仲間、ヘルメスとの出会いだった。

「き、きみは木こりの……」

わたしは立ち込める血臭に顔を顰めながらも彼に近づく。熊や虎、狼などからその生を歪められた魔獣たちのうつろな瞳がわたしを見つめていた。

ヘルメスはわたしの姿を認めると、片膝をついて剣を地面へ置く。そして返り血を浴びたその精悍な顔でしっかりとわたしを見据えた。

「殿下、私を臣下にお加えください。私は村と娘、そして何よりこの国が好きです。山に籠もって木と対話することは、もはやできる状況ではないようです」

ヘルメスには妻があったが、二年前に魔獣に襲われて失っている。その事件の後、残された一人娘と村外れの小さな家でひっそりと暮らしていたのだ。

「願ってもない申し出だ。でも、きみを臣下に加えることはできない」

ヘルメスはその逞しい眉根を寄せる。

「臣下ではなく友人になってほしい」

「は？」

ヘルメスは惚けたように口をぽかんと開ける。わたしは後に“豪腕”と異名を取るこのクレセニア随一の戦士に、この表情をさせたことを誇りに思った。

ヘルメスの働きはめざましいものだった。その強さを目の当たりにした騎士たちは、彼をわたしの副官にしても誰も文句は言わなかった。

ヘルメスは木こりだったので地理に明るい。村人でさえ知らない山の獣道さえ把握しており、魔王軍への防備はほぼ完璧と言えるほどになった。

後は第一駐屯地からの増援を待つばかりとなった時、見張りをしていた兵から意外な報告を受けた。

「テグス村の生き残り？」

「はい、どうやら森の中へ逃げ延びた者たちがいるようです」

「至急、村長に言つて正確な村人のリストを作らせる。ああ、ポルタ村の分もな」

「はっ！」

下士官にそう命令し、わたしは救出隊を組織した。

そして第一陣として森へ入ったヘルメスが、“彼女”の死体を見つけてきたのだ。

「すでに刺された後だったと」

「はい、背後から心臓を一突き。苦しまなかったのが不幸中の幸いかと」

「そうか……では明日の朝火葬してやろう。それまではあの部屋に寝かしておこう」

「はっ！」

ヘルメスに指示を出しながら、わたしは齒がみしていた。自分の視野の狭さで、また一人犠牲者を出してしまった。テグスもポルタもさほど大きくない村だ。両村合わせても、住民は六百人にも満たない。始めから正確に住民の数を把握していれば、あの少女だって救えたかもしれないのだ。

わたしはさらに周辺の探索を強化し、一人でも多くの村人を助けるようと決意を固めた。

そんな時、ヘルメスからあの少女が生き返ったとの報告を受けた。

「ノ、ノア……です」

儚げで可憐な少女は、砂で汚れていても美しかった。わたしは「ノア」という神秘的な響きに、痺れにも似た感動を覚えた。ヘルメスはまた違った感慨を覚えたようで、どちらともなく顔を見合わせ、その名を呟いた。

彼女はかなり防御力が高いという気になる点があったものの、それ以外は特に変わった点はなかった。

しかし両村のリストにその名はなく、彼女自身にもなぜあそこにいたのかの記憶がない。何よりもヘルメスの言葉を信じれば、彼女はオークに殺されていたはずなのだ。魔王は確かに、アンデットモンスターなどの偽りの生を操る。しかし彼女はアンデットではなかった。

アンデットではなく生き返った少女。わかるのはその名前だけ。こうなると、魔王側の何らかの罠だと考えるのが普通だろう。

なのになぜ、こんなにも心惹かれるのだろうか。

村人をテーベへ避難させる任務に就いたのは、もしかしたら彼女と少しでもいっしょにいたいがためだったのかもしれない。

わたしは自分の責任において、彼女を監禁・拷問するのではなく父上にその真実を見極めていただくことにした。

自分にはその能力がないからとヘルメスには説明したが、彼は含み笑いをただけで何も言ってはこなかった。

「眠くなるまで、少しお話してもしませんか？」

皇都までの行程を三分の二ほど進んだある夜、わたしにノアさんと話をする機会が訪れた。それまでじっくり話をする機会がなかっただけに、わたしの心は高揚した。

彼女は聡明な娘だった。ファンゲルデンでのいきさつを説明すると、すぐに理解してくれた。見た目は十代なのだが、もっと大人びて見えた。

だからなのだろうか。

わたしは自然と“絶対領域”の話を彼女にしまっていた。

彼女は魔王に破られはすまいか心配していたが、過去魔王の攻撃は何度も退けていた。そう話すと彼女は安心したようだった。

しかし次の彼女の言葉は、わたしの心を深く抉った。

「でもシュナイダーさんはいい国王様になりますね。こんなにも国民のことを考えてらっしゃるから」

わたしは絶句して一瞬息が詰まってしまった。そして大きな無力感に包まれた。

わたしはまだまだ父上のようににはなれない。いや、まだ王などに

なつてはいけないのだ。

自分の未熟さはよくわかつている。

それでも彼女にそういわれると、心の中に勇気が湧いてくる。不安が掻き消され、やる気が込み上げてくる。

「わたしは思ってます。ノアさんは救世主なんじゃないかって」
「救世主？」

彼女はびっくりしてその澄んだ黒曜石のような瞳を大きく見開く。わたしのその言葉を考えるより先に口に使っていた。そして言うから、それが真実だと確信した。

彼女は救世主だ。

そしてクレセニア皇国にとってだけではなく、わたしの救世主でもあつてほしい。

もしあそこでヘルメスが現れなければ、わたしはどうしていただろう。

抱きしめて愛を囁いていただろうか。

それは自分でもよくわからない。

こうして馬上からリーネちゃんと楽しげにおしゃべりする彼女の姿を見ていると、自分の中に芽生えた気持ちに戸惑いを覚える。

ああ、やはりわたしは彼女をいつの間にか愛してしまっていたのだと。

第25話

『お前は生きている価値のないやつだ』

「そ、そんなことない」

『今までの人生を振り返ってみる。何か人の役に立ったことがあったのか？』

「そ、それは……」

『これからどんな人生を歩むつもりなんだ？』

「そ、それは結婚して子どもを生んで」

『そして死ぬ』

「……」

『それは幸せな人生なのか？ 幸せと言えるのか？ お前の生まれてきた理由は？』

「わ、わからない……」

『妻や母親という立場は、体のいい召使いと何が違う？』

「……も、もう」

『愛とはなんだ？ お前は今まで誰かに愛されたことはあるのか？ 誰かを愛したことは？』

「もうやめて！」

私は自分の声で目が覚めた。

眩しい陽射しに一瞬目が眩み、私は腕を動かす。乾いた布地を擦る感覚で、私は柔らかいベッドに寝かされていたことに気づく。

体が完全に沈み込んでしまうほど柔らかい布団と、載っているのがわからないほど軽い掛け布団。まるで白い雲に包まれているような浮遊感と温もりを感じる。

明るさに少し目が慣れてくると、ゴシック調の精緻な柄の色鮮やかな天井が視界に入る。重い頭を動かすと、ベッドの横に豪華な格子窓が備え付けられていることに気づく。

外からは小鳥の鳴き声が聞こえ、磨き抜かれた曇り一つない厚いガラス窓の向こうに青空が広がっているのがわかる。

「ここは……」

私は肘まで敷き布団に埋め込まれながら手について、上体を起こそうとする。

「痛っ！」

突然針を刺されたような鋭い頭痛がして、私はまたぼふっと枕に頭を沈み込ませる。チチチ……とかわいらしい小鳥の声が窓から離れていき、私は気を失う前の記憶をたぐり寄せる。

何だか怖い夢を見ていた気がする。それが現実に基づくものなのか、ただの夢なのかわからない。とにかく私は生きているようだ。押し寄せるモンスターたち。リーネちゃんの悲鳴。燃え上がる皇都。黒い光に刺し貫かれる皇王様。壁をずり落ちるシュナイダーさん。胸から突き出た錆びた剣。オレンジ色の光のドーム。広々とした皇都の俯瞰風景。リーネちゃん的笑顔。ヘルメスさんの怒声。ごろりと転がった獣の生首。黒い影。星空の下のシュナイダーさん。時系列も場所もめちゃくちゃに、私の頭の中には様々なシーンがフラッシュバックする。

「うつ……」

また酷い頭痛がして、私はぎゅっと目をつぶる。何となく私はとても恐ろしい目に遭った気がする。それが何なのかよくわからない。

よく考えれば、この「クレセニア皇国物語」のゲームの世界にきたこと自体夢なのかもしれない。ふと目を開ければ、いつもの私の

部屋で目覚めるのかもしれない。

私はまた目を開けた。

すると一本の横線が引いてあった。

「え？」

「目が覚めたかにや？」

「ひゃあああつ！」

思わず叫んで布団を持ち上げる。

それは一匹の黒猫だった。さっきのはどうやらその猫の目のドア
ツプだったようだ。

しかもその猫は黒いコウモリのような翼が生えていて、空中でパ
タパタと忙しくそれを動かしている。

「は、羽の生えた猫？ し、しかもしゃべってる！」

「ふむ、意識はしっかりしているようにや」

黒猫は短い前足を組んで片方を顎に当てている。まるでロダンの
「考える人」のようだ。

私は突然のことに頭がパニックになってしまい、きよろきよると
周囲を見回す。

豪華な家具が目に入り、ここがどこかの高級な部屋だということ
がわかった。

「おにやかは空いてにやいかにや？ それともにのみもにのよ方
がいいかにや？」

「あ、あなたは何？ モ、モンスター？」

とりあえず危険はなさそうだけど、私はドキドキして声が震えて
しまう。猫は別段おもしろくもなさそうに「ふむ」と言うと、私の

お腹の上に着地する。ほんのり重さは感じるけど、普通の猫より軽いかも。

「ミーは魔王様によ使い魔によスピニツチにや。お前は魔王様に連れて来られたにや」

「え？」

「魔王様」という単語で、私の頭の中に散らばっていた一連の出来事がつながっていく。そうだ、私はお城の前庭でモンスターと戦って、それでいつの間にか気を失ったんだ。

『お前にはいつしよに来てもらっ』

身を切られるような冷たい声が頭の中に蘇り、私は自分で自分を抱きしめる。思ったより細い腕と身体が、余計に心細く感じられた。

「こ、ここは…… どこ？」

とりあえず目の前で愛嬌のある顔をしたスピニツチというこの変な黒猫は、私に害意はないようだ。しゃべる猫なんてゲームに出てきたはずはないけど、話が通じるなら聞きたいことはいっぱいある。

「ここは魔王様によお城にや。動けるようににやったら、魔王様によところに連れて行くにや」

聞き取りづらい猫語（？）でも、慣れれば言っていることは何となく理解できるようになる。そう言われると、私は強い喉の渴きと空腹感を覚えた。

「喉が渴いたかも…… それにお腹も空いた」

「了解にや」

スピニツチはようやく仕事してもらえたという風に、細い目をさらに細めて飛び去ってしまふ。私はいまだに残る鈍い頭痛に顔を顰め、深く息を吐いて天井を見つめた。

第26話

「こつちにゃ」

私は目の前をふわふわと漂う黒い毛玉を追って、広い廊下を歩いていた。スピニツチの用意してくれた食事と飲み物で、私は漸く歩く元気が出てきた。食べ物は消化のいいリゾートと新鮮な生野菜、飲み物は温かいミルクだった。魔王の城なんていわゆるモンスター総本山みたいなものののに、あんなおいしい食事が出てくるとは思ってもみなかった。

食事しながらいろいろスピニツチに聞いてみたけど、「それは魔王様に聞くにゃ」ばかりで全然要領を得なかった。とにかくスピニツチは私の面倒をみるだけの使い魔でしかなく、分不相応に私に深入りしてはいけならしい。

窓から差し込む陽射しは眩しく、見える景色は一面の緑。どこか深い森の中なのか、びっしりと針葉樹がひしめき合っている。時折小鳥の囀りが聞こえると、ここが魔王の城だということを忘れてしまいそうになる。

お城の中は私の足音だけが響き、閑散としていた。私とスピニツチしかいないのではないかと思うくらいんだけど、時折遠くの方で何か獣のような唸り声が聞こえる。皇宮での記憶が蘇って私はその都度びくつとなってしまう。でもスピニツチはそんな私に、何の反応も示さなかった。

中世のお城のような石造りの廊下を歩き、角を三回ほど折れ曲がるとすっかりとした造りのドアの前に着いた。階段の上り下りはしていないから、さっきまで私のいた部屋とは同じフロアだ。

スピニツチは短い前足で二度ノックする。中からくぐもった声で応答があり、くすんだ金のドアノブを押し下げる。

「魔王様の執務室にや」

スピニツチは私にそう耳打ちする。どうやら一人で入れということらしい。

私は何となく心細くなつたけど、ここまで来たら腹を据えるしかない。私はグレーのカーペットが敷かれた魔王の執務室に、一步踏み出した。

中は私の部屋十個分ほどもあるかなり広い空間だった。壁には天井まで届く本棚が備え付けられ、背表紙に金文字でタイトルの彫られた厚い本がずらりと並んでいる。手前に応接セットらしき黒い革張りのソファがあつて、黒檀の低いテーブルが高級そうな艶を放っている。

奥の壁は一面の格子窓で、白いレース地のカーテンが左右に纏められている。その前には大きな執務机があり、映画で観たアメリカの社長のようペン立てや木製の文具置きが載っている。緑色のゴム製らしい下敷きには書類が山積みになっていて、その向こうに魔王がいた。

「いつまでそこに立っている。わたしは暇ではないのだ。さっさとそこに座るがいい」

高めのテノールが聞こえ、それが魔王の発した声だと気づくのに数秒間を有した。皇宮で聞いた声とはまったく違う。無感動で冷たい声ではあるけれど、体の芯まで凍らせるあの声ではない。

銀色の長髪に明るい陽射しを反射させ、真っ白い肌に表情のない冷たい顔。それは皇宮の前庭で見たのと変わりはなかったけれど、驚いたのはその瞳の色だ。

ぎらぎらと禍々しい紅い血の色をしていたその瞳は、今は美しい宝石のような瑠璃色をしている。澄んだその瞳は、とても恐ろしい

魔王には見えない。

でも酷薄な印象のその奥に、なぜか私は深い哀しみの色を感じた。

「早くしろ」

「え、あ、は、はい！」

苛立つた声を浴びせかけられ、私は早送り映像のようにソファへ座る。あまりにも勢いよく座ったため、体が一瞬反発で浮き上がる。

「落ち着きのないヤツだな…… まあいい。まだ頭痛はするか？」

「い、いえ、もうだいぶ…… って、どうして知ってるんですか？」

魔王はデスクを回り込んでこちらへ歩いてくる。すらりと長い足が、折り目正しいスラックスのような黒いズボンに包まれている。上半身は昔の西洋貴族のようなレースのついた白いシャツに、黒いマントを羽織っている。

私はこの人に殺されかけた。いや、皇王様は実際に殺された。もしかしたらヘルメスさんやリーネちゃんも。そう考えたらこいつに敬語とか使うのはおかしいと思えてきた。

「“抜け出た”後は酷い頭痛がするはずだからな」

「あ、あの！ ヘルメスさんやリーネちゃんたちは無事なんです……」

「…… 無事なの？ 私をこんなところに連れてきて、どうするつもり？」

声が震えているのがわかる。私は今まで他人に、しかも大人の男の人に強く出たことなんて一度もない。

魔王は執務机の前に立つたまま腕組みをして、無表情で私を見下ろしている。そして何も言わず踵を返すと、本棚とは反対側の壁際へと歩いていく。そこにはカラフルな瓶が二段の棚に並んでいた。

手前には落ち着いたダークブラウンのカウンターがあり、高いスツールが三つほど床に備え付けられている。どうやらミニバーのようだ。

魔王は伏せるように置かれていたワイングラスを手に取ると、カウンターの上面にあった紫色の瓶を取る。瓶口に嵌っていたコルクを口にくわえて、小気味よい音をさせて抜く。その時ちらつと牙のような長い犬歯が見えた。琥珀色の液体がグラスに注がれ、白い泡がプチプチと表面で弾けている。シャンパンか何かだろうか。まさかサイダーじゃないよね。

魔王はもう一つグラスを掲げると、同じように液体を注ぐ。二つのグラスを持ってこちらへ歩いてくると、一つを私の前に置いた。

「まずは落ち着け。これからいろいろ説明しなければならんからな」

そう言いながら魔王は私の向かい側のソファに座ると、色素の薄い唇にグラスをつけゆっくりと傾けた。

第27話

「説明？」

私は目の前に置かれた琥珀色の液体には手をつけず、目の前で優雅に足を組む魔王を睨む。魔王はコトリとグラスを置くと、膝の上で白く長い指を組み合わせた。

「いろいろ聞きたいこともあるだろう…… 例えばなぜこの世界に転生したのか、とかな」

私は息が止まるかと思うくらい驚いた。

どうして魔王がそのことを知ってるんだらう。

「どうした、何を驚いている？ 『なぜ魔王が私のことを知っているのか』 と思っっているのだらう？」

私はかろうじて顎を引く。手のひらがじつとりと汗ばんで、私は膝に載せた手をぎゅっと握る。

「知っているのは当たり前だ。わたしがお前をこの世界に呼んだのだからな」

「なっ！」

私は絶句してしまう。

この男がすべての元凶だった。今までの苦しみも悲しみも、すべてこの男によってもたらされたものだったのだ。

「どうして」

「『どうして私を呼んだのか』…… か？」

私の言おうとしていることや考えていることは、この男にはすべてお見通しのようだった。私はチュニツクの裾を握り、下唇を噛んで魔王を睨み続ける。

魔王は私の応答を待たずに語り始める。

「別にお前を特別に呼んだわけではない。お前が“適任者”だっただけだ」

「適任者？」

私は自分の声がどこか遠くから聞こえる気がした。魔王の声音は淡々と落ち着いていて、嘲笑するでもなく事実のみを事務的に告げているように感じられた。

「わたしは皇王の構築した絶対領域を攻略できずにいた。あの絶対領域は、お前の作り出す未熟なものとは比較にならないくらい強固だった」

私は彼の淡々とした語りを聞きながら、漸く気持ちが落ち着き始めた。

「クレセニア皇王の絶対領域は完璧だった。すべてを消滅させるのではなく、特定のものだけを拒絶する。おかしいとは思わなかったか？ もしお前の作り出す絶対領域と皇王のものが同じだったら、テーベは鳥さえ飛ばぬ場所になっていたはずだ。絶対領域が張られていたのは特定の者しか知らされていなかった。不用意に触れて消滅する人間がいたら、市民は不審に思っただろう」

確かに魔王の言う通りだった。

テーベの絶対領域は市壁に沿って張られていたけど、触れただけで何でも消滅させてしまうのなら誰も気づかなかったわけはないんだ。

「皇王の力はわたしにとって脅威だった。憎むべき敵がらな。世界征服というわたしの野望が漸く叶う時になって、まさかあのような手段を講じてくるとは予測がなかった」

「野望が叶う？」

私は魔王のその言葉に違和感を覚えた。

魔王が世界征服を狙ってクレセニア皇国と戦争を起こしたのは知っているけれど、それはあくまでも目標であって明確な手応えはなかったはずだ。実際ゲームでは、きちんとクリアすれば魔王は討伐されるはずだったし。

「お前の疑問はよくわかる。なぜ野望が叶うと言い切れるのか……そうだろう？」

今度こそ私はしっかりと頷く。すでに私はこの男が恐ろしい魔王だということを忘れ、すっかり話に聞き入ってしまった。

「わたしはもう何度も滅ぼされている」

私はその言葉の意味がまったく理解できなかった。何度も？

「過去、勇者と呼ばれる者どもにな」

「え？」

私は目を見開いて魔王を見る。まさか……

「何を驚く。わたしがこの世界のことを知らないとも思っていたのか？ この『クレセニア皇国物語』というゲームプログラムの世界を」

まさに絶句だった。ゲームキャラクターが、自分の存在する世界のことを認識することなんてあるのだろうか。いや実際目の前にいるのだけれど。

「わたしもモンスターたちもちろん人間たちも、この世界のあらゆる事象はすべてゲームの中に存在するプログラムに過ぎない。電脳世界というヤツだ。ただ一つ、“お前”という存在を除いてな」
「わ、私？」

すでに私は自分の意識が遠く霞んでいるような気がした。私が私であって私でないような、とても不安定な状態。目の前にいる魔王でさえ、まるで夢の中の存在のようだ。

「わたしは世界征服に邪魔な皇王を暗殺する計画を持っていた。それはお前もよく知る『シナリオ』に沿った行動だ。皇王は死ぬべき存在。シナリオが進むためにはな」

「じゃ、どうして……」

私は混乱する頭を必死に働かせる。

皇王暗殺がシナリオに沿ったものだということとはわかっていた。でも絶対領域なんて設定はなかったし、今までだってシナリオにないいイベントがたくさんあった。ミノタウロスの登場のタイミングだってそうだし、サフィーネとかマレリイとか知らないキャラも出てきたし。

そう考えれば私のいるこの世界が本当に「クレセニア皇国物語」の世界だとしても、設定やシナリオに共通点のある別の世界にしか

思えない。

「わたしがシナリオを変えたのだ」

衝撃の事実の連続に、もはや私の頭では理解不能になりつつあった。

「かつてわたしは、『勇者に滅ぼされるためだけ』の存在だった」

魔王は窓の外へ視線を向ける。どこか遠くを見ているようなその横顔は、どこかやはり哀しげだった。

第28話

「わたしが自我を手に入れた時、わたしはただの“悪役”でしかなかった。強さは確かにこの世界では最強だったが、いずれ成長しレベルアップした勇者には絶対に敵わない存在だった」

RPGゲームに限ったことではないけれど、ゲームとはそういうものだ。クリアできないゲームは存在しない。難易度に差はあるけれど、何度もプレイして攻略法を見つければいつか必ず倒すことができる。

失敗したらセーブしたところからやり直せばいいし、二週目以降はもつと効率的にクリアできる。ラスボスという存在は、“いずれ必ず倒される”という宿命の元に存在するんだ。

「わたしは滅び行く運命の輪廻の中、何度も復活し何度も倒された。刺され、焼かれ、八つ裂きにされた。お前にその屈辱や苦痛がわかるか？」

私は何も言えない。この世界に来て何度も怖い思いをした。事実目の前のこの男にも殺されかけた。ケンカさえしたことのない私の人生の中で、この数週間での経験はとても辛く苦しいものだった。

それでもリーネちゃんやヘルメスさん、シュナイダーさんたちのお陰で楽しいこともたくさんあった。不安が常に胸の中で渦巻いてはいたものの、ほんのひとときの安らぎを得られたのも事実なんだ。

「お前のいた元の世界では、多くの人間たちがこのゲームをプレイしている。しかし今お前のいるこの世界は、その根本的な部分にあるシステムの世界だ」

「根本的な…… システムの世界」

魔王は立ち上がって窓際へ歩いていく。窓枠に肘を掛け、眩しい陽射しをその白い顔に受ける。

「ヤツらは…… このゲームをプレイしているヤツらは、わたしの野望を知らない。プログラムした技術者でさえな。わたしはこの世界にプログラムされた因果律を破壊しようと、何度も血反吐を吐きながら抗った。そして少しずつ、少しずつ世界を創り変えてきたのだ」

「あなたは…… あなたは何をするつもりなの？」

魔王は私の質問には答えず、静かに外を見つめている。そして今日の天気を話題にした世間話のように、何気ない口調で言葉を紡いだ。

「復讐だ」

自分を生み出したものすべてに対する憎悪。滅ぼされるためだけに生み出された悪の権化。それが魔王。その魔王が自我を得て、この世のすべてに復讐しようとしている。

どうすればいいんだろう。いや、私はどうしたらいいんだろう。私と魔王の間に長い沈黙の帳が下りる。私はいたたまれなくなつて、テーブルの上のすっかり気が抜けてしまった琥珀色の液体を見つめる。

「お前は どうしたい？」

はっとして顔を上げる。

「どうしたい…… って？」

「お前は皇王の絶対領域を通過するためだけの、“入れ物”に過ぎなかった。皇王が死んだ今、お前に利用価値はない。しかし特異点となってしまうたからには、お前を殺すことはできません」

「あの…… その“特異点”ってなんですか？」

そう言えばお城で気を失う前にも、その言葉を聞いた気がする。

「簡単に言えば、システム上のバグだ」

「バグ？」

コンピュータ用語のバグって意味？

魔王はその場で振り返り、窓枠へ背中を預けたまま腕を組む。モデルさんみたいにスタイルいいなあ、なんて関係ないことを考えてしまった。

「こちらの世界へお前を転生させた時、何かシステムに無理がかかったようだ。幸いプログラム自体の破壊は免れたようだが、その歪みがすべてお前の特異体質となって現出してしまったようだ」

「わ、私の防御力がチートだったり、絶対領域や魔力吸収能力はそのせいなの？」

魔王は瞑目する。それは肯定の意味なんだろう。

「お前にうつつかれると計画に支障が出る。本来は皇王と共に死ぬ運命だったのだからな」

私は酷く落ち込んでしまう。結局私はこの世界でも上手く利用されるだけの、“都合のいい女”だったんだな…… あ、そういえば！

「あ、あの！ リーネちゃんやヘルメスさんは無事なんですか？」

皇王様の話を聞くと、私は皇宮でのあの恐怖が蘇ってきた。
魔王は一瞬眉根を寄せ、視線を鋭くする。

「あの大柄な戦士は予想外の強さだった。ミノタウロスとサファイアの二人がかりでも、重傷を負わせるだけで精一杯だったようだ。もっとも撤退を目的とした時間稼ぎだっただけに、あいつらも本気で戦ってはいなかったろうがな」

「じゃ、じゃあ二人とも無事なんですね？」

ヘルメスさんの重傷というのは心配だけど、必ず復活してくれると思う。そしてシュナイダーさんといっしょに、この魔王を滅ぼしてくれるはず。

そう考えれば、私は少し気が楽になった。改変されたシナリオは、あの皇王様暗殺の夜で完成されるはずだった。でもシュナイダーさんとヘルメスさんなら、きっと改変されたシナリオを元に戻してくれるはずだ。

「よかった……　じゃあ、必要のない私は元の世界に帰してもらえ
るの？」

「は？」

魔王の瑠璃色の瞳が大きくなり、色素の薄い唇が心持ち開く。それはこの魔王が見せた、初めての感情らしい感情だったかもしれない。

「お前はわたしの話を聞いていなかったのか？　わたしはお前をこの世界へ“転生”させたのだ。“召喚”じゃない。元々召喚術では、お前のいた世界の人間をこちらへ呼び寄せることはできないからな」
「え、ど、どういう……」

私は背筋にぞわぞわと寒気が這い上がってくるのを感じた。

「あちらの世界では、お前はすでに死んでいるということだ」

私はこの部屋の時間が止まったように感じた。

第29話

「によア、いい加減にちゃんと食べるにや」

スピニッチがサイドテーブルに食事の載ったトレイを置く。私は掛け布団から目だけを出し、憂鬱な気分で見える。

「食べたくないって言ってるでしょ」

「いくら死にやにやい体だからって、おにやは空くにや」

「それ以上に胸がいつぱいで、何も入らないわよ」

私はもう三日も宛がわれた部屋に引き籠もっていた。原因はもちろん、魔王に告げられた衝撃の事実だ。

私はすでに死んでいた。

まるでどこかの世紀末バイオレンス漫画で、一子相伝の拳法で秘孔を突かれたようなものだった。

私は“旅行”ではなく、“移住”していたんだ。

私はこの異世界で、これから終わりのない人生を別人として生きていかなければならない。

今までの私は始めこそ戸惑いはあったけれど、どこか自分の置かれた境遇を客観的に楽しんでいた。ゲームの世界で勇者として活躍するのは、夢物語や妄想としては魅力的だ。いや、現実逃避と言ってもいい。

男に弄ばれて失恋し、その痛手を背負ったままいきなりこの世界へ連れて来られた。

そんな私にとってある意味気分転換のような、それこそ二次元の世界へ辛い現実を一時忘れて没頭するようなそんな気分があったことは否めない。

それが実は一時ではなかったことがわかった。

私はもう死んでいる。

その言葉が頭の中でずっとぐるぐると回り続け、時には吐き気さえした。

私はどれだけバカだったんだろう。

バグによって変に強くなったからといって、勇者面してモンスターと戦ってみたりリーネちゃんを「守る」とか言って格好つけてみたり。

シュナイダーさんみたいなイケメン勇者と恋愛ありのヒロイックファンタジーなんて、ちよっと素敵かもなんて思っちゃったり。

「うつ……」

考えれば考えるほど、どうしたらいいかわからなくなってしまふ。私は何のために生まれて来たんだろう。私の人生ってなんだたの？ ろくにいいこともないまま死んじやって、こんな世界に連れて来られて「必要ない」とか言われちゃって。

もうとつくに枯れてしまったと思っていた涙が、また振り返してくる。私は布団を頭の上まで上げて、視界を閉ざす。ここは日当たりが良すぎる。今の私には明るいお日さまさえ恨めしい。

「とにかく食事はここに置いておくから、少しでも食べるにゃ」

スピニツチの気配が遠ざかって、離れたところでドアの閉まる音がした。

この三日間、私はスピニツチ以外の誰にも会っていない。外の世界で何が起きているのかもわからない。いや、わからないというより興味がない。どうなったって関係ない。所詮ここはゲームの世界。現実世界じゃないんだ。

でも今の私にとってはここが現実なんだ。絶食して餓死できるものならしてみたい。“死なない”私にとっては、それも無意味なこ

とだろうけれど。胃を振り切られるような空腹感が、ずっと続くだけだ。死ぬこともできずに。

これはなんてひどい拷問なんだろう。

私はこんな目に遭うほど悪いことをしたんだろうか。これは何の“罰”なんだろうか。

止めどないマイナス思考の渦に囚われたまま、私はまた気絶するように眠りに落ちる。死なない体なのに、眠気だけは律儀にやって来る。でもそれだけが、今の私にとっては唯一の現実逃避の手段だった。

深夜、強烈な空腹感で目が覚めた。レースのカーテンだけが引かれた大きな窓からは、月明かりが煌々と差し込んでいる。

私は鳴り響くお腹の音に眉を顰め、上体を起こす。入り口の脇にあるドアの向こうは、トイレと浴室がある。

「はあ……」

生きている限り生理現象は止められない。それは不死の体になっても変わらない自然の摂理のようだ。

トイレを済ませてベッドへ戻ろうとすると、サイドテーブルに置いてあるトレイが目につく。

「絶望するにもエネルギーは要る……か」

独り言にも堂が入ってきた。

私はベッドの端に腰掛け、すっかり冷たくなってしまったご飯を食べる。豆腐入りの味噌汁はちよつと味付けが濃すぎる。私は薄味の方が……って、何でご飯と味噌汁があるの？

「ちよつと、なにこれ」

無意識で手に取っていたけれど、私は箸を握っていた。ご飯に味噌汁に焼き魚。何の魚かはわからないけれど、トレイの端にはご丁寧に醤油まで添えられている。

「これってもしかして……」

小鉢に載っている紫色の野菜を食べてみる。やはりそれは茄子の漬け物だった。

「うつ……」

何故か涙が零れた。

私は冷たく固いご飯を何度も口に運ぶ。冷水のような味噌汁を啜り、焼き魚を小さく箸で千切る。少しだけ醤油をかけて食べてみる。

「お、おいしい……」

味は鮭に似てるけど違うみたい。でも今の私にとっては何でもよかった。和食がこんなに美味しいなんて。日本人でよかったと思える瞬間。

久しぶりにまともに食事をしたから、すぐに喉にご飯が詰まってしまう。

「うつ……」

鼻を啜りながら味噌汁も啜る。

私にはこの和食の意味に見当がついた。きっとスピニツチだ。食事を摂らない私に、いろいろ考えた結果なのだろう。

私が元は日本人だということはわかっているはずだ。食べないの

は気持ちの問題だから、私が食べたいものを出せば食べるだろうと思っただろう。

「うっ…… お父さん、お母さん」

私は涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、青白い月明かりの下でご飯を食べた。それは冷たくって固くってしょっぱかったけれど、とても美味しい食事だった。

その時改めて、自分は生きてるんだって実感することができた気がした。

第30話

結局、その夜はずっと考え事をして眠れなかった。それでも明け方にはうとうとしてみたいで、スピニッチがドアを開ける音で目が覚めた。

「によア、おはようにゃ！」

スピニッチは私が返事をしようがしまいが、必ず元気よく挨拶をして入って来る。どうでもいいけど、女性の部屋に入ってくる時はもっと気を遣ってほしい。

「にゃ？」

サイドテーブルの上に載っているトレイを見て、スピニッチが動きを止める。私は布団を剥いで起きあがった。

「スピニッチ、いろいろ心配してくれてありがとう。私、もう大丈夫だから」

スピニッチは細い目を見開いて、驚いている。その時初めて気がついた。スピニッチの瞳って、綺麗な緑色してる。エメラルドグリーンっていうのかな。まさに宝石みたいで、綺麗だなんて思った。

「よかったにゃ！ やっぱ和食で正解だったにゃ！」

「うん、すごく美味しかった。冷めちゃってたけど。あれなんて魚？」

「あれは西によ冷たい海で獲れるビンガっていう魚によ塩焼きにゃ。大型によ回遊魚で、にゃかにゃか稀少品にゃ」

「そうなんだ…… 私のために気を遣ってくれてありがとう」

私はベッドの端に腰掛けたまま、揃えた両膝に手を当てて素直に頭を下げる。

「にゃ、ミーじゃにゃいにゃ！」

スピニッチは長いヒゲを揺らせて短い前足をせわしく振る。ふふっ、照れてるんだ。

「ね、ところで魔王にまた会えるかな？」

「む？ 魔王様に会ってどうするにゃ？」

空になった食器の載ったトレイを持ち上げようとしたまま、スピニッチが動きを止める。糸のように細い目だけによくわからないけれど、視線は鋭い気がする。

「ちょっとお願いしたいことがあって」

「にゃにをお願いするにゃ？」

「うん、それは直接魔王に言いたいかな」

「うん……」

スピニッチはホバリングしながら考え込む。数秒ほどで細い目をさらに細めて、重々しく頷く。

「わかったにゃ。魔王様に聞いてみるにゃ。とりあえず朝食を持ってくるから、それまでに身支度をするにゃ」

「うん、わかった。ありがと」

スピニッチが出て行った後、私は急いで身支度を整える。服はぼ

るぼろになったチュニツクが今着てるパジャマ代わりの白いワンピースしかないから、この部屋に来て初めてクローゼットを開けてみた。

そこにはテーブルのブティック以上に、カラフルでタイプも様々な服がぎっしりと詰まっていた。

「うわぁ！」

サイズはどれも計ったように私にぴったりだ。スピニッチって本当に有能な使い魔さんなんだなあ。執事みたい。

私はくすつと笑うと、とりあえず動きやすそうな服を選んで体に当て始めた。

「用意はできたかにゃ？」

純和風の朝食を残さず平らげ、しっかりと歯磨きをしてから私はドアの前で気合いを入れる。スピニッチは私の横でふよふよと空中に浮いている。

「にゃんだか色気によにゃい服を選んだにゃ」

「いいの。もともと色気なんてないし」

私は七分丈のブルージーンズと黒いノースリーブTシャツ、それに薄いグリーンのブラウスを選んだ。胸や背中が大きく開いたナイトドレスやキャバ嬢かっというようなミニスカートとかもあったけど、とてもこれから魔王に会いに行く服装とは思えなかった。何よりこれから魔王に要求する内容を考えたら、動きやすい服装であるに越したことはないんだから。

「それより朝ご飯すごくおいしかった」

「それはよかったにゃ」

スピニツチは満足そうにのどをごろごろ鳴らす。

朝食にはなんと納豆が出た。こんな中世西洋風の世界になんて納豆があるのか不思議だったけど、よくよく考えてみるとこのゲームを開発制作したのは日本のゲーム会社だ。だから日本の文化が反映されても別におかしくはないかと、強引に納得することにした。そんなことよりもまず私が考えなきゃいけないのは、これからのことだ。

「魔王は今、なにしてんの？」

「副官から朝によ定時報告を受けてるところにゃ。そによ後は視察に出てしまつから、会つにやら今にようちにゃ」

「よし！」

私は気合いを入れてドアを開ける。廊下に出るとそこは、以前と同じように静かな冷たさを感じられた。でもどこかざわめいて感じられた。何となくこのお城全体が、前より活気づいているような気がする。

「また戦争が始まるの？」

私は歩きながらスピニツチへ問いかける。

「それは魔王様に聞くにゃ」

相変わらずの返事に私は今更落胆することはなかった。あの感情のない冷たい視線にどれだけ我慢して自分の要求を主張できるかわ

からないけど、このチャンスが無駄にはできない。私が私であるために、ここは怖くてもがんばって言うしかない。

そんなことを考えているうちに、すぐに魔王の執務室まで到着してしまった。スピニッチはドアを軽く二度ノックする。前と同じように中からくぐもった返事が聞こえた。

「じゃ、ミーはやるからここまでにや。失礼にやことを言うにやよ」

「うん、大丈夫」

私は軽く深呼吸をすると、くすんだ金のドアノブを押し下げた。

「――以上が我が軍の配備状況です」

中に入って真っ先に視界に飛び込んで来たのは、焦げ茶色の巨体だった。それはあの悪夢の夜、私に圧倒的な殺意を向けてきたミノタウロスだった。

「おやまあ、裏切り者の登場だよ」

横から背筋のざわざわするような嘲笑が浴びせかけられる。はっとして振り向くと、魔王の執務機の隣に真っ赤なドレスを着た長身の女性が立っていた。私を死ぬほど苦しめた悪魔みたいな女、サフィーネだ。

「魔王様？」

ミノタウロスの低くドスの効いた声がした。筋肉の小山の向こうで、艶めいた黒い布地が翻る。ミノタウロスの巨体の向こうから、相も変わらず酷薄な感じのする魔王の陶器のような白い顔が現れた。

「どうやら上手くいったようだな。時間がない。言いたいことがあるそうだが、簡潔明瞭に話せ」

私はミノタウロスの剛直な瞳とサフィーネの刺すような視線に、さつき食べたものをリバーズしそうなくらい緊張してしまう。それでも一歩中に踏み込んで、後ろ手にドアを閉める。そして両手をぎゅっと握って大きく息を吸って声を吐き出す。

「あ、あの！　お願いがあつてきました」

自分でも声が震えているのがわかった。それでも何とか勇気を振り絞って言葉を続ける。魔王たちは何も言わず、変わらぬ視線と表情で私をじつと見つめている。敬語を使うのは癪だけど、ここは一歩引いた態度を貫いた方がいいと思った。

「わ、私をこのお城から出してください！」

魔王は眉間にしわを寄せ、鋭い視線で私を射抜いた。

第31話

「お前はわたしの言ったことが理解できていないようだな」

射るような視線に私は身を竦めてしまう。要求を呑んでもらうためには気持ちで負けちゃいけないんだけど、性格上どうしてもびくびくしてしまう。

魔王はミノタウロスを回り込み、私の方へゆっくりと歩いて来る。にやにやと笑うサファイーネの顔が癢に触る。

「あなたの言ったことって？」

声が震えてしまうけれども、勇気を振り絞って顔を上げる。魔王はこの間話したソファへ優雅な動作で腰掛ける。何気ない動作の一つひとつが妙に様になってて、どうしても目が離せなくなってしま

う。

「お前は『特異点』の意味をきちんと理解しているのか？」

「え……」

城外のざわめきが小鳥の囀りと一緒に窓から聞こえる。このお城はこれから一日の活動を始めようとしているんだ。

「お前は言うなれば“ゼロ”だ」

「ゼロ？」

すっかり氣勢を殺がれた私は、呆然と立ち尽くすしかない。無意識に胸の前で組んだ両の手のひらがじつとりと汗ばんでいる。

「数学において“ゼロ”とは特殊な数字だ。わかるか？」

私は高校時代の数学教師を思い出す。理路整然と数理について説いていたその教師の話は、当時一人の男子に想いを寄せていた私の頭にはまったく入って来なかった。

「乗法・除法は元より、複雑な数式もすべて無に帰させてしまう悪魔の数字だ。その存在自体、脅威とも奇跡とも言える。お前はそういう存在だ」

魔王の言いたいことが臍気に見えてきた。私の存在自体が、この世界にとって脅威となってしまうているんだ。すべてを無に帰す存在。私が関わればみんな不幸になる。そういう存在なんだ。

「じゃ、じゃあ関わらなければいいでしょう？」

「ん？」

魔王の瑠璃色の瞳が私を射抜く。その目は怒っているようにも興味深げにも見える。

「私はあなたたちにもシュナイダーさんたちにも一切関わりません。リーネちゃんといっしょに、戦争に巻き込まれない場所でひっそりと生活していきます。それならいいでしょう？」

私の必死のお願いに、魔王は「ふむ」と言っただけで考え込む。長い足を優美に組んで、右の拳を口に当てている。視線は窓の外に向けられているが、景色を見ているわけではないようだ。

「リーネというのは“豪腕”ヘルメスの娘のことだな。あの娘がそれを納得するのか？」

魔王は私の中に潜んでテーベへ侵入した。だからそれまでのリーネちゃんと私の交流も知っている。覗き見されたみたいですがごく不愉快だけれど、リーネちゃんのことを細かく説明する必要がないのは助かる。

「説得してみせるわ。リーネちゃんだって、戦争に巻き込まれるのはいやだと思ふもの」

ヘルメスさんはシュナイダーさんの副官兼護衛だから無理だろう。でもリーネちゃんの安全を私が責任を持って守るとなれば、認めてくれると思う。

テーベからどこか遠くへ離れて、リーネちゃんと戦争が終わるまで静かに暮らす。それが私にとっては一番いい選択だと思う。少なくとも、私を殺そうとしたこの人たちにここで世話になっているよりは。

「まあいい」

魔王は薄く笑って立ち上がる。普段酷薄な顔つきをしているだけに、こうしてほんの少しでも感情の動きを見出すとドキッとしてしまふ。

「そう思ふのならしてみるといい。ミノタウロス」
「は」

それまで何も言わず、私たちの会話の推移を見守っていたミノタウロスが反応する。

「この娘をファンゲルデンまで連れて行ってやれ。確か皇国軍は、

あそこに前線基地を建設中だったな」

「は、まだ三割程度かと」

「十分だ。くれぐれも無用の戦闘は起こすな」

「は」

魔王はそういつとマントを翻して執務机へ向かう。悠然とした動作で豪華な本革張りの椅子に背を預けると、机上の書類に目を落とす。

「あ、あの……」

私は事の次第が飲み込めずにおろおろしてしまう。魔王へ話しかけようとすると、横からサフィーネが音もなく移動してきて私の視界を遮る。

「ほんとあんたは話を聞かないヤツだね。魔王様はいいって言うてんだろ？ さっさと出て行きな！」

「は、はい！」

どうもこの女は私が嫌いらしい。私も好きじゃないからどうでもいいけど、敵味方とかそういう以前に性格が合わない。モンスター相手に性格が合わないとかいうのもどうかと思うけど。

私は背伸びをして魔王を見ようとする。許可がもらえたのだったら、一応お礼を言っておかないと。

「あ、あの、ありがとうございました」

サフィーネの揺らめく尻尾の向こうに魔王の横顔が見える。その右手が羽ペンを握ったまま軽く振られるのを見た。

「さ、最後に一つだけ」

私は追い出そうとじりじりと近づいてプレッシャーをかけてくるサフィーネの横から、何とか顔だけを出して魔王へ呼びかける。魔王は手の動きを止めて、視線だけをこちらに向ける。

「あ、あなたの名前を教えてください。まさか“魔王”って名前じゃないでしょ？」

「あんたバカかい！　いくら特殊なヤツだからって、魔王様の名前をそう簡単に」

「アスタロト」

「え？」

私とサフィーネは動きを止めてしまう。まさか魔王が本当に名前を教えてくれるとは、思わなかったのだ。

「アスタロト様！　こ、こんな小娘にあ、あなたのお名前を教えるなんて……」

サフィーネは卒倒しそうなほど狼狽している。ちょっといい気味って思ってしまったのは内緒だ。

「アスタロト……」

悪魔の一柱として有名なその名前は、不思議と恐ろしいというより彼の名前にはそれしかないという印象を受けた。

キーキーと怒りまくるサフィーネに部屋を追い出されてからも、

私はその名前を何度も口の中で反芻していた。

第32話

部屋に戻ってベッドを直したり部屋の掃除をしていると、ドアがノックされた。

「はい」

開けると目の前に筋肉の壁が立ちはだかっていた。

「う、わっ！」

押し寄せる獣臭に私は数歩後ずさってしまう。それは魔王の副官ミノタウロスだった。

「昼過ぎにここを出る。それまでに準備を済ませておくがいい。昼食が終わったら、スピニツチに作戦室まで連れて来てもらうようにでは」

一方的に話をしてのっそりと去って行く。私は反射的に巨大な背中へ声を掛けていた。

「あ、あの！」

ミノタウロスは動きを止め、首だけを動かして振り返る。感情が読み取れない黒い目は、あの夜の恐怖を否応なく蘇らせる。

「こ、これからどうするんですか？ さ、作戦室に行つて……」

本当は聞きたいことはもっとあったはずなのに、ミノタウロスの

目を見たら何も出てこなくなっていました。

ミノタウロスは何の感情の揺らぎも見せずに、淡々とした口調で告げる。

「魔王様がファンゲルデンの近くへ転移させてくださる。私はその後仕事があるので、そこからは自分の足で歩いて行くがいい」

「わ、わかりました」

何の躊躇いもなく前を向くと、ミノタウロスはまたアスタロトの執務室の方へ歩いていく。私は何となくこのまま行かせてしまっただけにいけないと思って、小走りに後を追う。

「あ、あの！」

先ほどと同じ動作で、ミノタウロスはのっそりと首を動かす。ウ、ウザいって思われちゃったかな？ でも振り向いたミノタウロスの目には、やはり特に感情の揺らぎは感じられなかった。

「あなたはアスタロトがこの戦争を起こした理由を、どこまで知っているの？」

ミノタウロスはおそらくアスタロトの家臣では最上位だ。私なんかに話した内容を知らされていないわけはないと思う。

ミノタウロスは数瞬間押し黙っていたけど、ゆっくりと大きく裂けた雄牛の口を開く。

「魔王様は、お気持ちのすべてを私たちにお教えくださっているわけではない。しかし、お前に話した内容ぐらいいは知っている」

「“復讐”のために世界を征服しようとしてるってことも？」

ミノタウロスはゆっくりと瞬きをする。それは肯定を意味していた。

「この世界を征服したからって、それが“復讐”になるの？ 所詮ゲームの中の世界なんでしょ？ シナリオを変えたって、結局はプログラムの中だけの話でしょ？」

「定められたシナリオを変えることは、この世界のシステムを根幹から崩壊させることになる。それは人間たちの作った世界を滅ぼすことでもある」

「世界を滅ぼす…… そんなことをして何が…… 何が復讐になるっていうの？」

この世界を滅ぼしたら、結局は自分たちも消滅してしまうのではないだろうか。アスタロトはシュナイダーさんたちを道連れに、消滅しようとしているだけなんじゃないだろうか。

「勘違いするな」

思考の底なし沼に沈みかけていた私は、落ち着いた低い声で現実へと引き上げられた。

「魔王様は、この世界そのものを滅ぼそうとしているわけではない。正確に言えば、“人間の世界”を滅ぼそうとなさっているだけだ」
「人間の世界……」

それが「世界を滅ぼす」ってことじゃないの？ 私の逡巡を読み取ったかのように、ミノタウロスはその巨体をくりとこちらへ向ける。圧倒的な存在感と筋肉の迫力に、私はまた一步後ずさってしまふ。

「お前は特異点ではあるが人間だ。それでも人間のなんたるかについて知らなすぎる。この世界についても。それがまた人間の愚かさ故なのだがな」

「そ、それって、どういう意味？」

このモンスターは見た目すごく怖いけれど、その物腰は穏やかだ。これだけ噛みついた質問をしても怒る気配がないということは、少なくとも今すぐ捻り殺されることはないと思う。私はそれでも死なない体なだけだ。

そう感じたからか、こうして会話をしていると自分でも少しずつこのモンスターに慣れてきたのがわかる。ミノタウロスはじっと私を見つめている。私は勇気を振り絞って、真っ黒な目をしっかりと見つめ返した。

「……その目で見て理解していくがいい」

そう言い捨てるとミノタウロスは視線を逸らし、今度こそ大きな歩幅でのっしのっしと歩いて行ってしまった。

「人間…… 世界……」

私はミノタウロスの残した言葉の意味を、誰もいない廊下に立ち尽くして考え込んでしまった。

「いたにゃ！」

どのくらい考え込んでいたのかわからないけど、いきなり後ろからスピニツチのアニメ声が聞こえた。はっとして振り向くと、廊下をふよふよと黒い毛玉が飛んで来る。

「部屋にいにやいから搜したにや。によアはこによお城出るにや？」

「う、うん。いろいろとありがとう」

「そうか、寂しくにやるにや」

「寂しい？」

私はきよとんとしてしまう。スピニッチはあくまでも魔王の使い魔。私の面倒も、命令で仕方なくみていたものだと思っていたのだけれど。

「面倒な仕事がなくなっていていいんじゃないの？」

私は照れ隠しにちよつといじわるを言ってみる。スピニッチは細い目をさらに細めてにいと笑う。

「ほんと、によアは手によ掛かる子どもみたいだったにや」

「ちよつと、人の気持ちも知らないで」

不思議な気がした。魔王のお城でモンスターと軽口を交わして笑っている。そこにはリーネちゃんといった時と変わらない穏やかさがあった。それはきつとこの奇妙なモンスターに、私が自然と心を許しているからなんだろうな。

「お昼までまだ時間があるにや。どうするにや？」

「うゝん……」

人間や世界についてアスタロトやミノタウロスに聞いてみたいと思っただけ、きつと忙しいだろう。世界を滅ぼすのに。サフィーネに会いたくないということもある。

その時廊下の窓の外から獣の唸り声のような音が聞こえた。その

時初めて、自分はこのお城のことを何も知らなかったことに気づいた。

「できればこのお城の中を見て回りたいんだけど、大丈夫かな？」

「いいにや。ミーが案にゃいするにや」

スピニッチは即答する。特に秘密とかにするつもりはないみたい。それはそうよね。魔王にも直接会って話してるし、名前まで知ってる。

私がテーブルに戻るつもりがあるって知ってるにも拘わらず、監禁されることもない。

その余裕がある意味怖いけど、別に私はスパイとかじゃないし。きつとアスタロトはそれがわかった上で私を自由にさせているのだろう。

憎らしいけど、私の心はあいつにはすべて読まれているようだから。

「どこから行くにや？」

「うーん、綺麗なところ！」

「了解にゃ！」

私はふわふわと上下するスピニッチの毛玉のようなお尻を追って、廊下を歩き出した。

第33話

このお城は思ったより大きく、豪華だった。目覚めた部屋の豪華さからある程度予測はしていたけれど、観光地としてではなく普通に使っているお城としてはあまりにも現実離れし過ぎていた。

私が数日間過ごしていたフロアは、どうやら三階だったらしい。私の部屋とアスタロトの執務室の間には、大きな謁見室があった。数段の石段がある台座の上にある黄金の丈高い椅子。真っ赤な羅紗で織られた絨毯が敷かれ、両開きの巨大な扉へとシワ一つなく伸びている。両側に立つ装飾付きの円柱からも、どこことなくテーベの皇宮と似ている造りだ。

謁見室には頭が狼で体が人間という半人半獣の衛兵が二体、黒い鎧を身に着けて立っていた。二人って言った方がいいのかな？

鋭い目でぎろりと睨まれたけど、スピニッチといっしょだったために何も言われることはなかった。

謁見室を出ると、吹き抜けの広い空間に出た。そこはエントランスから続くロビーのようになっていて、左右両側の壁際に幅の広い階段があった。

右の階段を下りていくと、二階に辿り着く。そこはまるで区役所みたいに、職員たちが忙しそうに働いている場所だった。みんなモンスターなのが、ちよつとアメリカのCGアニメ映画を思い出した。タコのように触手つか手足？を忙しそうに動かして、書類の束をいくつも持って床を滑るように移動していくモンスター。

明らかにアラスカ熊なんだけど女教師のような眼鏡を掛けて口紅を塗ったモンスターが、緋色のローブを着てトレイに載せた湯気の立つ飲み物を運んでいく。

そこにはモンスターであるだけで、人間の世界となんら変わらない営みがあった。

「ここは見てもつまらないうにや。ちになみに、作戦室はこによ奥にあるにや」

「う、うん」

私たちを興味深そうに見てくるモンスターもいるけれど、ほとんどのモンスターは忙しそうに自分の仕事に没頭している。私は元〇しなだけにどんな事務仕事をしているのか気になったけれど、邪魔をしてはいけなとも思っ素直にスピニツチの後について階段に向かった。

エントランスはかなりの贅を尽くした造りになっていた。

白大理石とカラフルな石英を使って、複雑なパターンの模様が床に描かれている。いつも磨いているみたいで、私の顔が映るほどぴかぴかだ。ジーンズ履いててよかった。

「あつちに行くとゲストルームや遊戯室があるにや。こっちは厨房と食堂、それに倉庫にや」

「あ、厨房見たいかも！」

私は和食を含めたあの美味しいお料理を作っているところがどんなところか、強く興味が惹かれた。モンスターにもコックさんとかいるのかな？

若干薄暗い廊下を通って、お城の奥へ進む。場所的には謁見室の真下辺りに到着した。金属製の両開きの扉を押し開けると、中は広い厨房になっていた。

「うわぁ！」

今は朝食の後片付けが終わって、昼食の仕込みをしているところのようだ。ところどころにコックさんの帽子を被ったモンスターが立ち働いている。でも……

「あれ？」

私は目を凝らして、ジャガイモの皮を剥いているコックさんの手元を見る。

「手、手がいっぱいある！」

何と手が左右それぞれ三本…… いや四本ずつある！ 顔をよく見ると、黄色く丸い目がたくさんついていていた。

「く、蜘蛛のモンスター？」

「そうにや、彼らはとても優秀にやコックにや」

「優秀って……」

確かに見ているととても手際がいい。八本の足を器用に無駄なく使いこなしている。あれ？ ちょっと待って。

「八本って確かに蜘蛛は八本足だけど、全部使ってるならどうやって立ってるの？」

「よく見るにや。彼らは立ってるんじゃないにや」

「え？」

見た感じ普通の白いコックの服と帽子を身に着けている。でも一匹が作業を終えると、天井へすすと上っていった。

「あっ！」

立っていると思っていたのは、上下逆だった。服に見えていたのはエプロンで、体は頭の上にあった。天井から糸を垂らし、厨房内

を無駄なく動き回っている。

「そっかあ、蜘蛛だもんね」

私は妙なところで感心してしまった。すると一匹が大きな魚を抱えて、奥の部屋から持ってくる。

「あのお魚って、もしかして昨日私が食べたヤツ？」

「そうにや、あれがビンガにや」

遠目にはマグロに似てるけど、ひれはトゲトゲしている。マグロのように流線型をしておらず、若干頭の後ろの部分かくびれている。つまり頭と胴体がきちんとわかる感じだ。色も若干茶色っぽく、回遊魚というより回遊恐竜だ。

「何か気持ち悪いかも」

「異世界人によよアには、そう感じるによかにや？」

異世界人かあ。確かに私はこの世界では異質な存在だ。私にとってモンスターたちがそうであるように、そしてリーネちゃんたちに対しても同じように。

蜘蛛が料理した奇妙な魚は確かに美味しかった。それは食材の見た目がどうであれ調理人が昆虫モンスターであれ、この世界に生きる者たちが私たち人間と何ら変わらない感覚を持っていることの証拠だ。

私は複雑な思いで厨房を後にした。

「一応主だったところは見せたにや。こによ後はどうするにや？」
「うん」

エントランスまで戻ると、スピニツチがそう聞いて来る。庭とも見てみたいけど、さつき窓から少しだけ眺めた感じではあまりに広すぎてお昼までには見終えられそうもない。

私が考え込んでいると、外からまた獣のような唸り声が聞こえた。

「ねえ、あの声って何の声？」

「ああ、あれは獣小屋によ声にや。戦闘用によ獣型モンスターや乗用によ馬が飼育されてるにや。そによ向こうには、食用によ家畜小屋や鶏舎もあるにや」

私が食べた卵は、おそらくそこで採取されたものなのだろう。私はそういう下働きの現場も見てみたいと思った。

「獣小屋ってサーベルタイガーとかでしょ？ それは怖いからイヤだけど、馬小屋とかは見てみたいかも」

「じゃ、行ってみるにや」

スピニツチは疲れた様子もなく、元気よく玄関へ向かって飛んでいく。謁見室よりさらに大きく豪華な両開きの扉を抜け、ロータリーのようになっている植え込みを歩いていく。

「うわあ、すごおい！」

私はその時初めて、このお城が高台の上に建っていることに気づいた。

暖かく、柔らかな風が頬を撫でていく。お城の前庭の向こうには、山嶺の霞む青空が広がっていた。

「ここはクレセニア皇国でも最北端に近い場所にや。あによ山々は国を南北に分けるツエルニヒア山脈にや」

「うん…… 知ってるよ」

私は顔に掛かる髪を掻き上げながら、その灰色の峻険な山脈を眺める。ゲームシナリオでは、中盤の山場を迎えるのがあの山脈での攻防戦だ。私は二度ほどゲームオーバーになりながらも、漸く魔王軍を撃破した。

ゲーム画面では無味乾燥な岩山のグラフィックだったけど、こうして見るとすごく美しい山脈だっていうことに気づく。

私はこんなことさえ知らなかった、知ろうとしなかった。ましてやこの世界で何度も死と再生を繰り返す宿命を負って生まれた魔王の気持ちなんて、絶対にわからない。想像もつかない。

私が感慨に耽っていると、横の方で怯えた大声が響いた。

「お、おめえあん時のバケモン！」

二トントラック一台分はありそうな飼葉を担いで後ずさりするそのモンスターは、皇宮の裏庭で私を攻撃してきた一つ目の巨人サイクロプスだった。

第34話

「あ、あなたは！」

「ひええっ、お助けえ！ バケモンがこんなところまで追って来たあ！」

サイクロプスは飼い葉の束を放って、畜舎の方へ逃げて行こうとする。

「待つて！」

私が追いかけようとすると、スピニツチがツバメのように素早く飛翔してサイクロプスの前へ出る。なんだ、本気になればあんなに速く飛ぶこともできんじゃない。いつもふふよ飛んでるし翼も小さいから、速く飛べないのかと思ってた。

「クロ、待つにや！ 魔王様によお客人に対して、失礼にやことするにや！」

「お、お客人？」

サイクロプスは大きな一つ目をぱちくりして、口をあんぐり開けたまま振り返る。炎をバツクにして対峙した時は本当に恐ろしかったけれど、こんな長閑な場所で午前中の明るい陽射しの下で見るとどこことなく愛嬌がある。モンスターというより大きな妖怪といった感じだ。

「もうすぐいなくなっちゃうけどね」

私は手を前にきちんと揃えてお辞儀する。

「こんにちは。ノアと言います。あの時は怖かったわ」

巨大な彫像のように目と口を開いたまま固まっていたサイクロプスは、巨体に似合わないほど素早い動作で私の前に両膝をつく。地面が地震のように揺れて、私は尻餅についてしまう。

「わわっ！」

「す、すまなかっただ！ お、おらてつきり敵がこんなところまで攻めて来たんだと思っちまっただ！」

サイクロプスは赤くなった目で何度も土下座する。私は砂を払って立ち上がる。

「や、やめてよ！ あれは戦争だったんだから仕方ないよ。私だつてたくさん……」

私はそこまで行つて胸が締めつけられるような感覚を覚える。そうだ、私こそ彼らに謝らなければならない。なぜなら彼らの仲間をたくさん消滅させたのだから。

「たくさんあなたたちの仲間を殺してしまつたんだから」

サイクロプスは激しく上下させていた頭の動きを止め、きよんとして私を見つめている。近くで見ると、黒い虹彩には若干白みがかっているのがわかった。

「お、おめえ様はめんこい女の子なのに、変わったお人なんだなあ」「え？」

サイクロプスの呟きを聞いて、スピニツチはぷつと吹き出す。

「クロ、によアさんは厩舎や鶏舎を見学したいって言ってるにゃ。お前が案にゃいするにゃ」

「は、はい！」

サイクロプスは慌てて地面に散らばった飼い葉を集め始める。

「ねえスピニツチ、何で私が『変わってる』の？」

これも“特異点”ってことなのかな？

「価値観によ違いにゃ。そういうによアだって、すでに人間によ価値観とは違ってきてるにゃ」

「え？」

スピニツチはそう言い放ってさっさと厩舎の方へふよふよと飛んで行ってしまふ。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ それどういうこと？」

「わわわ、お待ちくださいええ！」

大量の飼い葉をまとめて抱え上げると、サイクロプスはどすんどすん地面を揺らせて私たちを追ってくる。前庭から緩やかな丘を登っていくと、広い牧草地と木造の平屋が並んでいる場所に出た。

「うわあ、すごい」

広々とした場所に若草色の牧草が広がっている。緩やかに起伏している丘は東京ドーム何個分で表現できそうなくらい広い。暖かな

風が私の髪を靡かせ、微かに獣の匂いを運んでくる。

「手前に二つにやらんでいるのが厩舎にや。そによ奥で縦にやらんでいるのが鶏舎と畜舎。畜舎には牛とか豚、羊がいるにや。そによ向こうによ、ちよつとだけ見えている尖った屋根が獣舎にや」

スピニツチが説明する獣舎からは、時折狼のような遠吠えやゴリラのような雄叫びが聞こえる。動物園を想起してしまった私はおかしいのだろうか。あれは殺戮を目的とした猛獣モンスターたちの声なのに。

「ふうふう……い、今厩舎は空ですだ。馬たちは放牧中です。鶏舎はこれからエサやりの時間ですから、見学にはいいですよ」

飼い葉の塊がのつしのつしと歩いてくる。私は潰されては困ると思って、脇に避ける。でもサイクロプスは不思議なことに、飼い葉で見えない前方の様子がわかるみたいだ。私の前でぴたりと止まると、抱いていた飼い葉の塊を肩に担ぎ直す。緑色の飼い葉が数本私の足下にパラパラと散らばる。

顔に掛かる髪をかき分けて目を細めると、牧草地が途切れて森になっっている境目あたりに黒点が無数に散らばっているのが見えた。どうやらあれが馬たちらしい。

「うん、私エサやりやってみたい」

そんな体験したことないし。

「そ、それじゃあ行ってみるだ」

サイクロプスは飼い葉を担いだまま歩き出す。私はその後を小走

りに、というかほとんどジョギングしながら追いかけた。

「ねえクロちゃん」

「ク、クロちゃん？」

サイクロプスが驚いて振り返る。また飼い葉が数本パラパラと落ちる。

「スピニツチがそう呼んでたから。クロちゃんみたいな巨人って、いっぱいいるの？」

「力仕事はおらたちのような巨人やトロールがやってるだ。鶏舎や畜舎では小柄なコボルトたち、獣舎は獣使いたちが働いてるだ」

「獣使い？」

コボルトはわかる。序盤ではレベル上げとお金稼ぎに使われる雑魚キャラだ。悪魔のような容姿をしている。

でも獣使いつていうキャラは初めて聞く。召喚師とも違うし……私が持っているこの世界の知識は、あくまでも勇者つまり人間の側の知識だ。モンスター側の職業や生活は、まったくと言っていいほど知らない。

私は純粋な興味を覚えて、クロちゃんの小山のような後ろ姿を追って坂道を下って行った。

第35話

「こ、このバケツにエサが入ってるだ。これを端っこから適当に流していくだ」

クロちゃんに手渡された金属製のバケツには、トウモロコシや大豆粕が混合された細かい粒状のエサがたっぷりと入っていた。ずっしりと重いバケツは、持ち上げるだけでも一苦労だ。私はスピニツチがどこから持ってきた軍手を嵌めて、賑やかに鶏たちがコツココツコ鳴いている鶏舎へと入った。

「うわあ、すごい数！」

鶏舎はまるで鶏の集合住宅のようだった。

鶏たちは木枠で組まれたケージが六段に重なっている。鶏がいるのは二段目と四段目、そして六段目だ。一・三・五段目のケージには鶏はいなくて、手前へ向かって傾斜している。鶏たちの産んだ卵が傾斜をゆつくりと割れないように転がって、雨樋みたいな受け皿へと出てくる仕組みになっているみたい。

私はむっとするような鶏たちの臭いに気圧されながら、とりあえず手近なところにエサを開ける。

「ああ、そんなにいっぱい入れちゃダメだって！」

子どものような甲高い声が聞こえて、私は頭を上げる。そこには粗末な布を腰に纏っただけの、細っこいギョロ目のモンスターがいた。コボルトだ。

「そんなにやったら、こいつら食べ過ぎて卵を産まなくなっちゃう

ぜ」

「ごめんなさい」

コボルトは私とケージの間にさつと身を滑り込ませ、私が大量に入れたエサを両手で掬い取る。横に引き延ばすように均していつて、パンパンと手を払って立ち上がる。

「あんなにもんだい？」

「魔王様によお客人にゃ」

「へ？」

私の後ろでホバリングしているスピニッチを見ると、そのコボルトは目を大きく見開く。尖った耳がびくびく動く様子は、悪魔のような顔を小動物のように感じさせた。

「あ、あんな魔王様の使い魔じゃねえか！ な、なんでこんなところに！」

コボルトはスピニッチを右手で指さして、左手をわたわたと上下に動かす。まるで漫画のような仕草に、私はクスツと笑ってしまう。

「はじめまして、ノアと言います。アスタロトに連れて来られてここにいます」

「ひえええっ！」

コボルトは鶏以上の大声を出して、頭を抱えてその場に伏せてしまふ。それだけではなく、一本向こうのケージでも誰かが何かを落としたような大きな音が聞こえ、「ひえええっ」という声が遠ざかっていく。

「え？ ど、どうしたの？」

「によア！ 魔王様によにや前を口にしてはダメにや！ みんなや怖がってしまうにや！」

「え、そ、そうなの？ ごめんなさい！」

私は慌ててコボルトに頭を下げる。コボルトはおそろおそろ顔を上げ、緑色の瞳で辺りの様子をきよろきよろと窺う。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫にや」

「ふう」

コボルトは安心したように、それでもまだ辺りをキョロキョロしながら立ち上がる。

「びつくりしたぜえ、まさかこんなところで魔王様のお名前を耳にしちまうだなんて。あんた…… いや、ノアさんか。おいらを殺す気かい」

「殺すだなんて…… あ…… 魔王の名前を出すってそんなによくないことなの？」

私は重くて手が痺れてきたので、エサの入ったバケツを地面に置く。そうすると周りの鶏たちが、「早く頂戴」って言ってるみたいに見える。

「ああ、そうさ。魔王様は恐ろしい方だ。でもきちんと働けば認めてくださる。怠け者には容赦しない。それに自分に刃向かう者も」
「……何となく納得」

下々の者にとって、魔王の名前を出すこと自体不敬に当たるんだ

ろう。歴史の授業で封建制度について勉強した時に、そんな感じのことを習った気がする。これも文化なんだろうな。

「おいらはコボルトのクラム。今は鶏舎担当だけど、いずれ兵士になりたいと思ってる」

クラムはギョロ目を輝かせて、口の端をにいと歪める。笑っているんだろう。見慣れない私にとっては不気味にしか見えないけど。

「とにかくエサは少なめに頼むぜ。おいらの仕事を増やさないでくれよな。忙しいんだから」

「わかったわ、ありがとう」

クラムはそういうと長い通路を小走りに駆けていく。モンスターだけによくわからないけど、声の調子や口調から少年のように感じた。

「ここで働くモンスターたちは、みんなやああいう子どもにや。大人になったら戦場へ出るにや。そしていによちを懸けて戦うにや」
「う、うん……」

私はとても複雑な気持ちになる。人間の感覚で言うと、いや一般的な日本人の感覚でいうと好き好んで死ぬかもしれない戦場に出るのは普通嫌だろう。でも彼らはそれに憧れている。

そういえば古いアニメなんかで観たことがある。鍋を被って汚れた下着に王冠の勲章を着け、棒つきれを持って戦争ごっこをするシーン。

今は戦時下なんだ。そして彼らは命を懸けて戦おうとしている。人間たちと。

私はいろいろなことを考えながら、クラムに言われた通り少なめ

にしてエサを流していった。

「によア、そろそろお昼によ時間じゃ」

全部のケージにエサをやるだけで、二時間以上も時間がかかってしまった。もう腕がパンパンだ。鶏舎で働くコボルトたちは、このエサやりを一日に二回やっている。そして卵の回収とケージの掃除。それが豚舎と牛舎もある。目の回るような忙しさだ。

「う、うん」

私はこの際だから獣舎も見たいと思ったけど、アスタロトやミノタウロスを待たせるわけにはいかない。それにこれ以上こういうところにいると、モンスターを憎めなくなってしまう。

いや、もうすでに“敵”には思えない。違う文化と人種の外国。そんな程度の認識だ。

「お昼は、によアがエサをやった鶏たちによ産んだ卵で作ったオムレツにゃ！」

「うわぁ、楽しい！」

手を叩いて大仰に喜ぶ私は、明らかに無理に笑っていたと思う。それがどんな気持ちなのか、私はその日のうちに思い知ることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7655v/>

恋の相手は魔王様！？

2011年12月3日12時11分発行